

鳥取県米子市

^{ME}目 ^{GU}久 ^{MI}美 遺 跡 XIII

2010. 3

財団法人 米子市教育文化事業団

序

米子市は、鳥取県の西部日本海側に位置し、山陰の商都と称される鳥取県西部の中核都市です。近年、米子市では道路建設など交通網の整備が急速に進められ、これに伴う埋蔵文化財の発掘調査によって、地域の歴史を考えるうえでの重要な遺跡が数多く発見されています。

本書は平成18年度に実施した日久美遺跡第13次調査の発掘調査報告書です。日久美遺跡は、1933（昭和8）年に新加茂川の開削工事中に発見され、山陰地方を代表する縄紋、弥生時代の遺跡として周知されています。また、1982（昭和57）年には山陰地方で初めて弥生時代の水田が確認され注目を集めました。このほかにも保存状態のよい遺物が数多く出土し、当時の人々の暮らしを探る上での貴重な資料を提供しています。

今回調査を実施しました第13次調査では、弥生時代の水田と水路を確認したほか、縄紋時代の資料を得ることが出来ました。これらの成果は、今後の研究における重要な資料になるものと思われます。

最後になりましたが、調査を実施するにあたって、多大なご理解とご協力を頂きました地元の方々を始め、ご指導、ご支援を賜りました方々、関係各位に心から御礼申し上げます。

2010（平成22）年3月

財団法人 米子市教育文化事業団
理事長 杉原 弘一郎

例 言

1. 本報告書は、鳥取県が計画する3・4・20車尾大谷町線緊急地方道路交付金工事に伴い、平成18年度に米子市日久美町で実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鳥取県の委託を受けて、財団法人米子市教育文化事業団が実施した。
3. 本報告書における方位は真北を示し、表記した座標値は、国土座標（第V系）の座標値である。またレベルは海拔標高を示す。
4. 本報告書第3図の地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」（平成17年1月1日発行）を加筆して使用した。
5. 調査の実施に当たって、年代測定と樹種同定を古環境研究所に委託した。
6. 出土した石器の石材同定は、北九州市立自然史・歴史博物館学芸員 森康氏の鑑定による。また、同定方法については、肉眼と実体顕微鏡を用いた表面観察である。
7. 本報告書は、佐伯純也が執筆、編集した。
8. 発掘調査によって作成された図面、写真、出土遺物は、米子市教育委員会によって保管されている。
9. 現地調査及び報告書の作成には、多くの方々からご指導、ご支援を頂いた。明記して感謝いたします。（敬称略）

井上貴央、大川泰広、小口英一郎、河合章之、高橋章司、宮元香織、森康

凡 例

1. 発掘調査時、及び現地説明会において使用した遺構名、番号は、報告書作成時に変更している。
2. 遺跡の略称は「ME-13」である。
3. 本報告書における遺物・遺構番号は次のように記す。
Po：土器、土製品、陶磁器 S：石器、石製品
4. 本文中、挿図中及び写真図版の遺構・遺物番号は一致する。
5. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで表示した。
6. 遺物実測図の縮尺は、土器、陶磁器が4分の1。石器が1分の1、2分の1、4分の1である。

目 次

序

例言、凡例

目 次

図版目次

写真目次

表 目 次

第1章 経過

- 第1節 調査の経過 1
- 第2節 発掘調査の経過 1
- 第3節 整理作業の経過 1
- 第4節 調査体制 2

第2章 遺跡の位置と環境

- 第1節 地理的環境 3
- 第2節 歴史的環境 4
- 第3節 目久美遺跡の既往の調査 11

第3章 発掘調査の方法と成果

- 第1節 調査の方法 13
- 第2節 遺跡の層序 15
- 第3節 縄紋時代前期～後期の調査 15
- 第4節 縄紋時代晩期～弥生時代前期の調査 33
- 第5節 弥生時代中期の調査 37
- 第6節 遺構に伴わない遺物 43

第4章 理化学的分析

- 第1節 目久美遺跡第13次調査の放射性炭素年代測定（株式会社古環境研究所） 45
- 第2節 目久美遺跡第13次調査における種実同定（株式会社古環境研究所） 48

第5章 総括

- 第1節 出土縄紋土器の編年観 56
- 第2節 弥生時代中期の水田遺構 58
- 第3節 自然科学分析 58
- 第4節 結語 60

図版目次

第1図	鳥取県の位置図	3
第2図	目久美遺跡の位置図	3
第3図	目久美遺跡周辺の遺跡分布図	7、8
第4図	目久美遺跡発掘調査地点図	9、10
第5図	目久美遺跡調査地点座標図	12
第6図	調査区割図	13
第7図	調査区南側断面図	14
第8図	縄紋時代前期層の等高線図	16
第9図	暗黒灰色砂質土層の遺物分布図	17
第10図	暗黒灰色砂質土層出土遺物1	18
第11図	暗黒灰色砂質土層出土遺物2	19
第12図	暗黒灰色砂質土層出土遺物3	20
第13図	暗黒灰色砂質土層出土遺物4	21
第14図	暗黒灰色砂質土層出土遺物5	22
第15図	暗黒灰色砂質土層出土遺物6	23
第16図	暗黒灰色砂質土層出土遺物7	24
第17図	暗黒灰色砂質土層出土遺物8	25
第18図	暗黒灰色砂質土層出土遺物9	26
第19図	暗黒灰色砂質土層出土遺物10	27
第20図	暗黒灰色砂質土層出土遺物11	28
第21図	暗黒灰色砂質土層出土遺物12	29
第22図	暗黒灰色砂質土層出土遺物13	30
第23図	暗黒灰色粘土層の遺物分布図	31
第24図	暗黒灰色粘土層出土遺物1	32
第25図	暗黒灰色粘土層出土遺物2	33
第26図	褐色粘土層出土遺物	33
第27図	黒色粘土層上面遺構平面図	34
第28図	黒色粘土層上面足跡平面図	35
第29図	黒色粘土層出土遺物	36
第30図	第1水田面遺構平面図	38
第31図	水路1の平面図	39
第32図	水路1と大畦畔1・2の断面図	40
第33図	小畦畔1と水路2の平・断面図	40
第34図	第1水田面出土遺物	41
第35図	水路1出土遺物	42
第36図	洪水堆積層出土遺物	43
第37図	遺構に伴わない遺物	44
第38図	目久美遺跡の弥生時代中期後半の水田	59

写真図版

- 写真図版1 1. 1・2区水田面(南西より) 2. 水路1完掘(西より)
- 写真図版2 1. 調査風景(北東より) 2. 水路1検出(北より) 3. 水田面完掘(南西より)
- 写真図版3 1. 水路1完掘(西より) 2. 水路1完掘(東より) 3. 水路1完掘(北より)
- 写真図版4 1. 水路1断面C(西より) 2. 水路1断面A(東より) 3. 水路1断面B(北東より)
- 写真図版5 1. 3区水田検出(北より) 2. 1区黒色粘土層上面足跡検出(北より) 3. 1区黒色粘土層上面足跡完掘(東より)
- 写真図版6 1. 2区黒色粘土層上面足跡検出(北より) 2. 1区黒色粘土層上面足跡検出(北より) 3. 1区黒色粘土層上面足跡検出(東より)
- 写真図版7 1. 1区黒色粘土層上面足跡検出(南東より) 2. 1グリッドの調査風景(北より) 3. 1グリッドの上層断面(北より)
- 写真図版8 1. 1グリッドの下層断面(東より) 2. Po.68出土状況(南より) 3. Po.69出土状況(南より)
- 写真図版9 1. Po.3出土状況(北より) 2. Po.61出土状況(北より) 3. Po.42出土状況(北より)
- 写真図版10 1. 2区縄紋時代層完掘(北より) 2. 3区縄紋時代層完掘(北より) 3. 3区縄紋時代層完掘(北より)
- 写真図版11 1. 縄紋時代層完掘(西より) 2. 排土の搬出状況(東より) 3. 縄紋時代層の調査風景(北より)
- 写真図版12 縄紋時代層出土遺物
- 写真図版13 縄紋時代層出土遺物
- 写真図版14 縄紋時代層出土遺物
- 写真図版15 縄紋時代層出土遺物
- 写真図版16 縄紋時代層出土遺物
- 写真図版17 黒色粘土層・水田出土遺物
- 写真図版18 黒色粘土層・水田・水路1・洪水層・遺構外出土遺物・石鏃
- 写真図版19 目久美遺跡第13次調査の種実 I
- 写真図版20 目久美遺跡第13次調査の種実 II
- 写真図版21 目久美遺跡第13次調査の種実 III

表目次

表1	目久美遺跡13次調査出土土器・土製品観察表	61
表2	目久美遺跡13次調査出土土器・土製品観察表	62
表3	目久美遺跡13次調査出土土器・土製品観察表	63
表4	目久美遺跡13次調査出土土器・土製品観察表	64
表5	目久美遺跡13次調査出土石器観察表	65
表6	目久美遺跡13次調査出土石器観察表	66
表7	目久美遺跡13次調査出土金属製品観察表	66

第1章 経過

第1節 調査の経過

本発掘調査は、鳥取県が進める3・4・20車尾大谷町線地方道路交付金工事を原因とする、鳥取県米子市日久美町の工事予定地内に存在する埋蔵文化財について実施したものである。

この車尾大谷町線の道路工事については、これまで路線上に位置する遺跡の取り扱いについて関係機関で協議され、平成7年度より長砂第3遺跡、長砂第4遺跡、大谷遺跡、日久美遺跡第5次、6次、8次～10次、12次～18次調査の各事業が財団法人米子市教育文化事業団により実施されている。

今回、発掘調査を実施した第13次調査地点は、平成17年度に実施した、第12次調査の2工区と3工区の間地点に位置する。第12次調査では、縄文時代の包含層と弥生時代の水田、水路が検出されていることから、この地点においても遺跡が存在するものと予想された。このため、鳥取県と米子市教育委員会が協議を行い、鳥取県は文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会に提出し、発掘調査の実施を財団法人米子市教育文化事業団が受託し、調査を実施することとなった。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は、工事対象区間の240㎡を対象とした。現地調査は、平成18年6月26日より開始し、平成18年9月29日に終了した。

現地での調査は、鋼矢板の設置工事が終了してから、表土を重機にて掘削し、人力による包含層掘削、遺構検出作業を行い、測量、写真撮影などを行った。

自然科学分析に関しては、年代測定、種実同定を専門業者に委託した。

第3節 整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、平成18年度（2006年度）は、現地の調査と並行して、一部の遺物の洗浄、注記、実測作業を行った。平成19年度（2007年度）は、平成18年度（2006年度）の残りの整理作業及び遺物の実測、拓本、トレース作業を進めた。平成21年度（2009年度）には、遺物の図面作成と原稿の執筆、遺構図面のトレース、遺物の写真撮影を行い、報告書の刊行に至った。

第4節 調査体制

平成18年度（2006年度）・平成19年度（2007年度）

事業主体 財団法人 米子市教育文化事業団
理 事 長 小林道正（財団法人米子市教育文化事業団事務局長）
専 務 理 事 小林道正（兼任）
埋蔵文化財調査室
室 長 長谷川明洋（米子市教育委員会文化課長）
主任調査員 平木裕子
非常勤職員 田中昌子
事業担当 調 査 員 佐伯純也
嘱 託 職 員
（調査補助員）森田静香
秦 美香

平成21年度（2009年度）

事業主体 財団法人 米子市教育文化事業団
理 事 長 杉原弘一郎（財団法人米子市教育文化事業団事務局長）
常 務 理 事 中村智至
埋蔵文化財調査室
室 長 長谷川明洋（米子市教育委員会文化課長）
事 務 長 小原貴樹
統括調査員 平木裕子
非常勤職員 田中昌子
事業担当 主任調査員 佐伯純也
嘱託職員
（調査補助員）森田静香

調査協力・指導・管理・助言 米子市教育委員会

第2章 遺跡の位置と環境

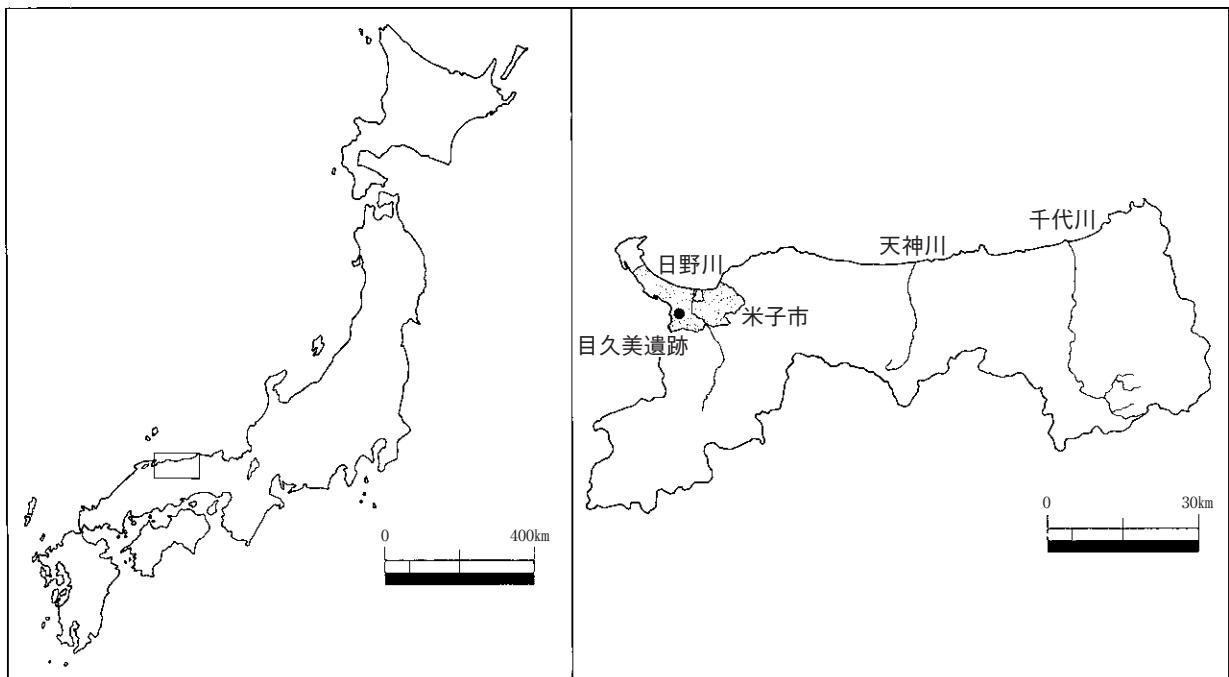
第1節 地理的環境

目久美遺跡は、鳥取県米子市目久美町に所在する、縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。米子市は、総面積132.21平方km、人口約15万人を有する鳥取県西部地方の中核都市であり、古代の行政区分では、伯耆国会見郡、汗入郡に属する地域であった。地形的には、米子市の東南側に位置する大山（標高1,709m）の造山活動によって形成された火山灰台地と、市の中心を北流する日野川の沖積作用によって形成された米子平野部と弓ヶ浜半島部に大別される。

遺跡は、JR米子駅の東南約500mの地点に位置し、遺跡の南側に位置する行者山（標高128m）から伸びる丘陵裾部一帯に展開しているものと考えられる。調査地の北西部には、足尾山と呼ばれる小規模な独立丘陵があり、山頂には目久美神社が置かれている。明治時代末期に撮影された写真1には、調査地点の東側に行者山から伸びる小丘陵が存在したことや、足尾山の北側にも同様の小規模な独立丘陵が点在したことを示している。現在の目久美遺跡周辺は、昭和8年に開削された新加茂川や、加茂川放水路、国道180号線などが建設され、写真1が撮影された当時とは、全く景観を異にしており、時間の経過を感じさせるものとなっている。



写真1 明治時代の目久美
（『新修米子市史』第13巻より）



第1図 鳥取県の位置図

第2図 目久美遺跡の位置図

第2節 歴史的環境

旧石器、縄紋時代

目久美遺跡において、人類の生活痕跡が認められるのが縄紋時代早期末以降と推定されている。縄紋海進期には、この目久美遺跡も海に面した集落だったらしく、第1次調査で出土した多量の石錘や石鏃、動物遺体などから、縄紋時代の目久美遺跡周辺は豊かな自然資源に恵まれた環境に位置していたことが推察される。

旧石器時代の資料は、諏訪西山ノ後遺跡（34）において、ローム層からナイフ形石器が出土し、後期旧石器時代にまで遡る遺跡の存在が確認されている。また大山山麓の原畑遺跡（55）や泉中峰遺跡（51）からは、ナイフ形石器が採集されており、少しずつではあるが旧石器時代の様相が明らかとなってきた。また、尖頭器が奈喜良遺跡（15）や陰田第6遺跡（18）、橋本徳道西遺跡（24）などで出土しており、狩猟生活の痕跡を窺うことができる。縄紋時代早期には、大山の西麓、標高75m付近の微高地上に位置する上福万遺跡（43）や、泉中峰遺跡（51）、新山山田遺跡（20）で押型紋土器が確認されており、これらが米子市内最古の土器を持つ集落と考えられる。前期の遺跡は、目久美遺跡のほか、陰田第9遺跡（16）、吉谷銭神遺跡（22）、鮎ヶ口遺跡（59）、中期には目久美遺跡、陰田第7遺跡（17）、後期には目久美遺跡、古市河原田遺跡（21）、河原田遺跡（60）があり、これらの遺跡からは土器や石器などの遺物が出土している。縄紋時代の遺構に関する資料は、落とし穴状の土坑以外は数が少なく、配石・集石遺構、貯蔵穴などが見つかっているに過ぎない。縄紋時代の住居跡については、明確な時期がはっきりしないものの、平地式住居と見られる遺構が岡成第9遺跡（47）で確認されているほか、泉中峰遺跡（51）から周囲に小ピットが巡る堅穴が見つかっており、形態的な特徴から住居跡の可能性が指摘されている。

弥生時代

縄紋時代晩期から弥生時代前期には、海退によって生じた低湿地を利用した農耕が行われていたらしく、目久美遺跡をはじめとして長砂第4遺跡、米子城跡21遺跡（5）などの低湿地遺跡で、弥生時代前期の粘土層から、プラントオパールを検出例が見られる。また、この頃から平野部に立地する遺跡の数が増加しており、集落の選地にあたって、低湿地に隣接する地点が好んで選ばれたためと考えられる。こうした遺跡数の増加も、各地に分散する低湿地の開発に伴って進行した現象であろう。弥生時代中期前葉段階の資料は、目久美遺跡、長砂第1遺跡（8）、古市河原田遺跡（21）など少数の遺跡で見られる。中期中葉から後葉にかけては、集落の規模が拡大する一方で、妻木晩田遺跡（73）や陰田第6遺跡（18）、青木遺跡（14）のように丘陵部に集落を形成する動きが見られる。後期には日野川右岸の尾高浅山遺跡（46）、日下寺山遺跡（44）のような丘陵に環壕を巡らす遺跡が出現し、政治的な緊張状態のあったことが推察される。

目久美遺跡で本格的な水田が形成されるのが弥生時代中期以降である。第1次調査では、3時期にわたって耕作された水田が確認されたほか、木製農耕具、石包丁、石鍬などの遺物が出土している。しかしながら、後期に入ると遺物の出土量は減少し、水田も放棄される。第6次調査では、弥生時代中期末までに堆積した洪水砂層と、その層を掘込んだ幅6m、深さ3mの水路が検出されており、その水路も再び洪水砂で埋もれている状況が確認されている。また目久美遺跡の東側に隣接する池ノ内

遺跡（2）では、弥生時代後期から水田の耕作が始まっており、耕作地が目久美遺跡から池ノ内遺跡へ移動しているものと考えられる。このように、弥生時代後期初頭段階の目久美遺跡周辺において、何らかの自然災害が起これ、集落の移動を余儀なくされたものと考えられ、陰田第6遺跡（18）などの中期集落の多くが丘陵部に立地している事実とも関連があるものと推定されている。

古墳時代以降

目久美遺跡では、古墳時代前期から後期にかけての遺物は少量ながらも出土しており、近隣に該期の遺跡が存在するものと考えられる。また第10次調査では、古墳時代前期のものと考えられる水田が見つかっている。

周辺では、弥生時代後期から古墳時代後期の水田が確認された池ノ内遺跡（2）や、古墳時代中期の集落遺跡である長砂第3遺跡（7）が見つかっている。古墳については、目久美遺跡の東、約1kmの地点に八神鏡が出土したことで知られる水道山古墳があり、さらに南には宗像古墳群（11）、東宗像古墳群（10）などの後期群集墳が見られる。

古代には、目久美遺跡のある米子平野西部は、和名抄に記載のある「会見郡半生郷」に属する地域と考えられている。ただし、これまでに半生郷の存在を裏付ける直接的な資料は得られておらず、その範囲については不明である。遺跡の動向としては、飛鳥・奈良時代の遺跡は、米子市内各所に分布しているが、特に奈良時代後半期に集落の数、規模ともに増加する傾向が示されている。また、製鉄に関連する遺跡が陰田広畑遺跡（19）などで見つかっており、この時期の集落の特色と言える。目久美遺跡では、第5次調査で墨書土器が出土しているほか木簡、人形などが見つかっており、近隣に奈良・平安時代の施設が存在しているものと考えられる。また、平安時代後期段階の資料はあまり見つかっておらず、遺跡としての連続性がつかみにくい状況である。

中世の様相は、西伯耆に関連する文献史料が少なく、不明な部分が多いが、尾高城跡（48）の調査で鎌倉時代の在地領主の屋敷と見られる遺構が見つかっている。室町時代には、伯耆国守護の山名氏一族がこの地を代々支配していたが、応仁の乱以降の戦火は山陰にも飛び火しており、大永4年には出雲の尼子氏が西伯耆に侵入し、さらなる混乱が続いた。16世紀末に至って、吉川広家が西伯耆の領主として湊山に米子城（5）の築城を始めるが、朝鮮出兵や大阪の陣など、社会的に不安定な状況が続いていたことから、築城は中々進展しなかったようである。

近世には、1600年に中村一忠が西伯耆の領主となり、この地を支配したが、1610年から加藤貞泰、池田由之へと国替が続いた後、1632年に鳥取藩主となった池田光仲の家臣荒尾氏が米子城預かりとなり、以後明治維新まで荒尾氏によって統治された。また、18世紀以降は米子城郭内の空屋敷や海浜部の砂丘地が新田開発され、農業生産の基盤が整備された。長砂から目久美にかけての地域も、地元の豪商、大寺屋による新田開発が行われ、整然とした水田風景が広がっていたものと考えられる。

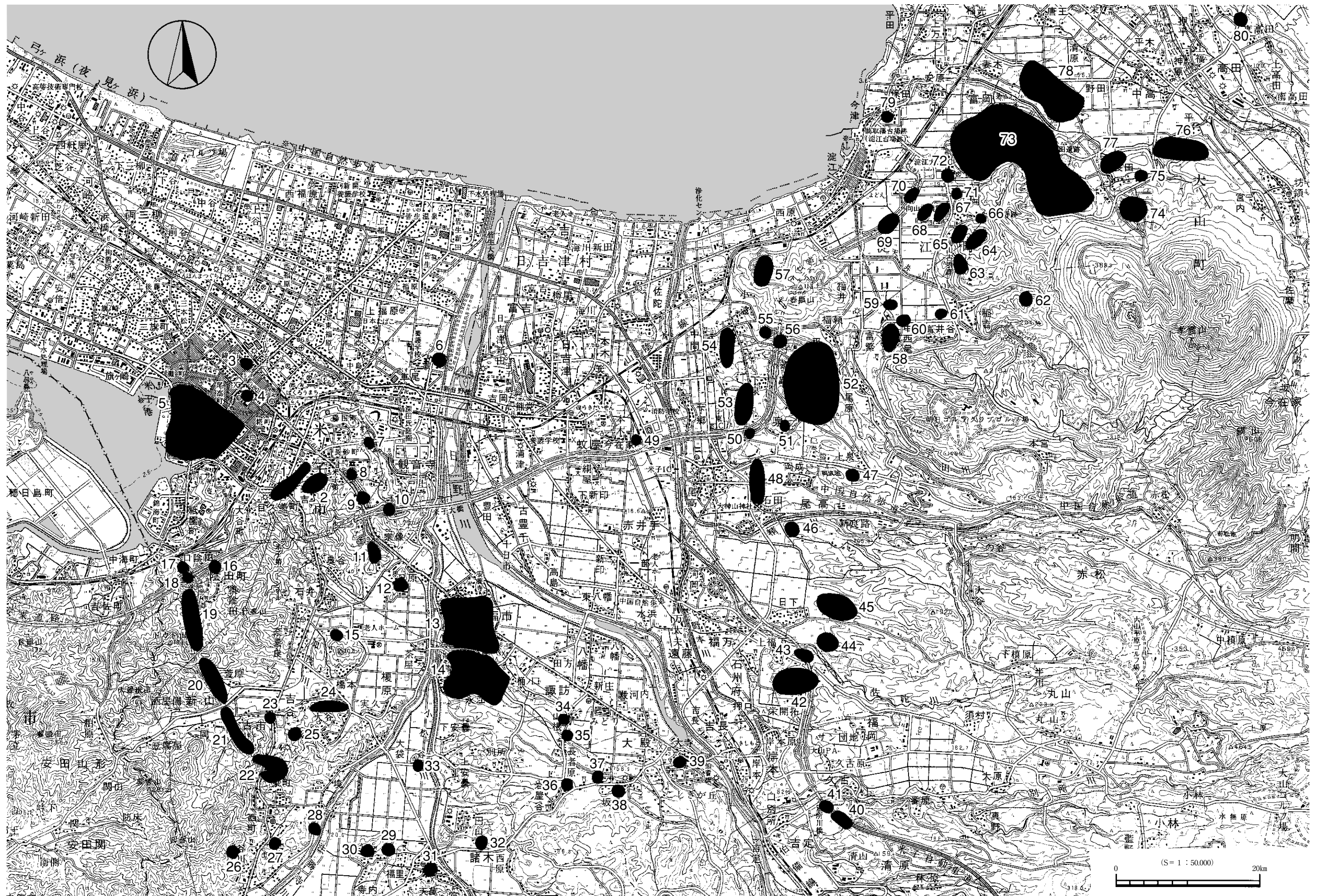
近代には、廃藩置県により、鳥取県が設置されたものの、明治9年には鳥根県と合併され、明治14年に再び鳥取県が再設置された。

参考文献

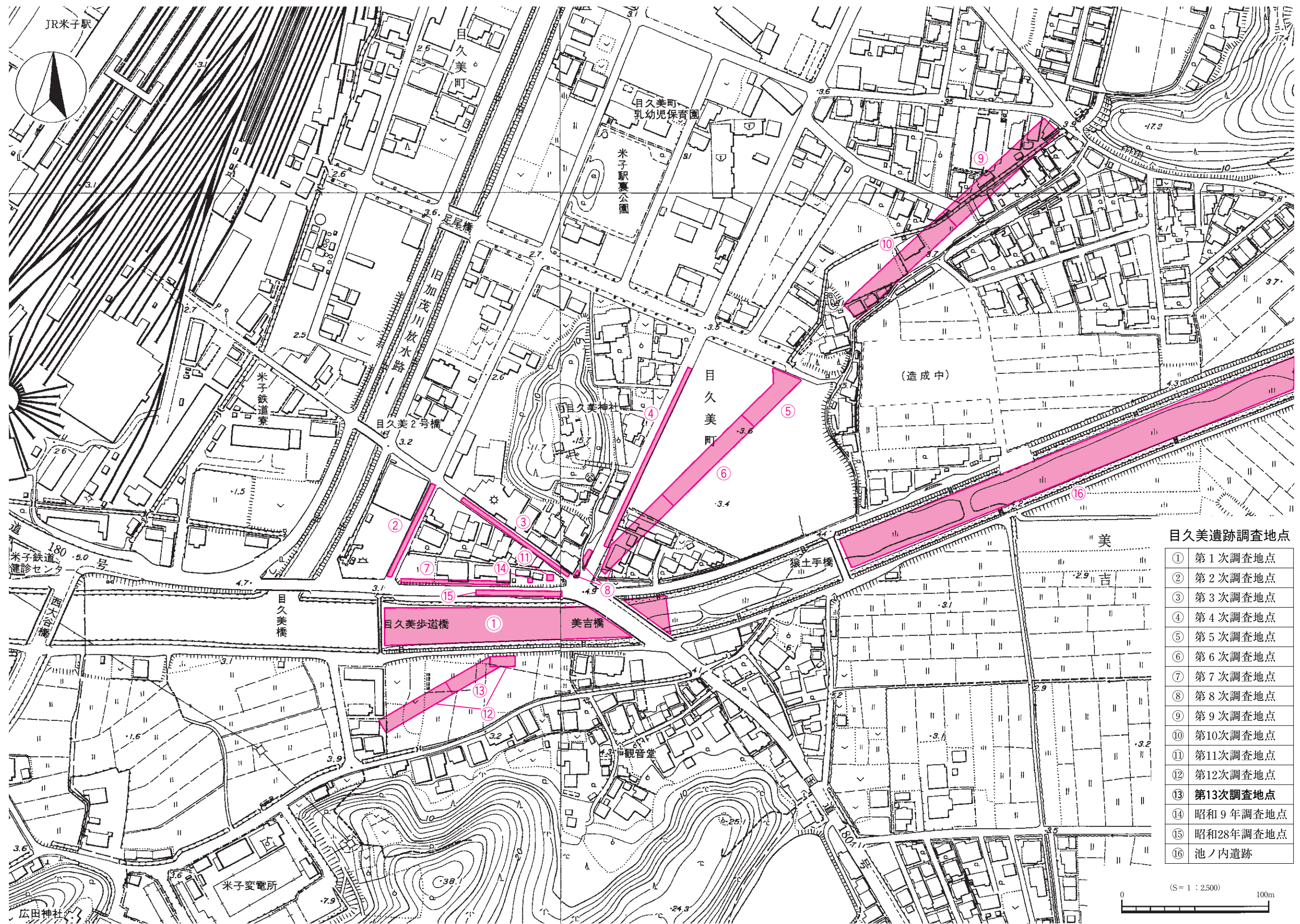
1996年 米子市史編さん協議会『新修米子市史』第13巻 米子市

目久美遺跡周辺の遺跡（番号は、第3図の遺跡番号と一致する。）

- | | |
|-------------|-------------|
| 1 目久美遺跡 | 42 石州府古墳群 |
| 2 池ノ内遺跡 | 43 上福万遺跡 |
| 3 錦町第1遺跡 | 44 日下寺山遺跡 |
| 4 角盤町遺跡 | 45 日下古墳群 |
| 5 米子城跡 | 46 尾高浅山遺跡 |
| 6 車尾西浜中遺跡 | 47 岡成第9遺跡 |
| 7 長砂第3遺跡 | 48 尾高城跡 |
| 8 長砂第1遺跡 | 49 今在家下井上遺跡 |
| 9 長砂第2遺跡 | 50 大下畑遺跡 |
| 10 東宗像遺跡 | 51 泉中峰遺跡 |
| 11 宗像古墳群 | 52 百塚遺跡群 |
| 12 日原6号墳 | 53 尾高古墳群 |
| 13 福市遺跡 | 54 中間古墳群 |
| 14 青木遺跡 | 55 原畑遺跡 |
| 15 奈喜良遺跡 | 56 小波遺跡 |
| 16 陰田第9遺跡 | 57 壺瓶古墳群 |
| 17 陰田第7遺跡 | 58 中西尾古墳群 |
| 18 陰田第6遺跡 | 59 鮒ヶ口遺跡 |
| 19 陰田遺跡群 | 60 河原田遺跡 |
| 20 萱原遺跡群 | 61 稲吉角田遺跡 |
| 21 古市遺跡群 | 62 四十九谷横穴墓群 |
| 22 吉谷遺跡群 | 63 城山古墳群 |
| 23 吉谷上原山遺跡 | 64 小枝山古墳群 |
| 24 橋本遺跡群 | 65 彼岸田遺跡 |
| 25 吉谷トコ遺跡 | 66 上淀廃寺 |
| 26 清水谷遺跡 | 67 向山古墳群 |
| 27 石佛前遺跡 | 68 瓶山古墳群 |
| 28 早里遺跡 | 69 井手脛遺跡 |
| 29 宮尾遺跡 | 70 福岡遺跡 |
| 30 三崎殿山遺跡 | 71 礎利遺跡 |
| 31 天万遺跡 | 72 晩田遺跡 |
| 32 諸木遺跡 | 73 妻木晩田遺跡 |
| 33 大袋丸山遺跡 | 74 源平山古墳群 |
| 34 諏訪西山ノ後遺跡 | 75 徳楽方墳 |
| 35 諏訪南山崎遺跡 | 76 平古墳群 |
| 36 長者屋敷遺跡 | 77 向山古墳群 |
| 37 坂長下屋敷遺跡 | 78 荘田遺跡群 |
| 38 坂中廃寺 | 79 今津岸の上遺跡 |
| 39 大寺廃寺 | 80 東高田遺跡 |
| 40 貝田原遺跡 | 81 茶畑第2遺跡 |
| 41 久古第3遺跡 | |



第3図 目久美遺跡周辺の遺跡分布図



目久美遺跡調査地点

- ① 第1次調査地点
- ② 第2次調査地点
- ③ 第3次調査地点
- ④ 第4次調査地点
- ⑤ 第5次調査地点
- ⑥ 第6次調査地点
- ⑦ 第7次調査地点
- ⑧ 第8次調査地点
- ⑨ 第9次調査地点
- ⑩ 第10次調査地点
- ⑪ 第11次調査地点
- ⑫ 第12次調査地点
- ⑬ 第13次調査地点
- ⑭ 昭和9年調査地点
- ⑮ 昭和28年調査地点
- ⑯ 池ノ内遺跡

第4図 目久美遺跡発掘調査地点図

第3節 目久美遺跡の既往の調査

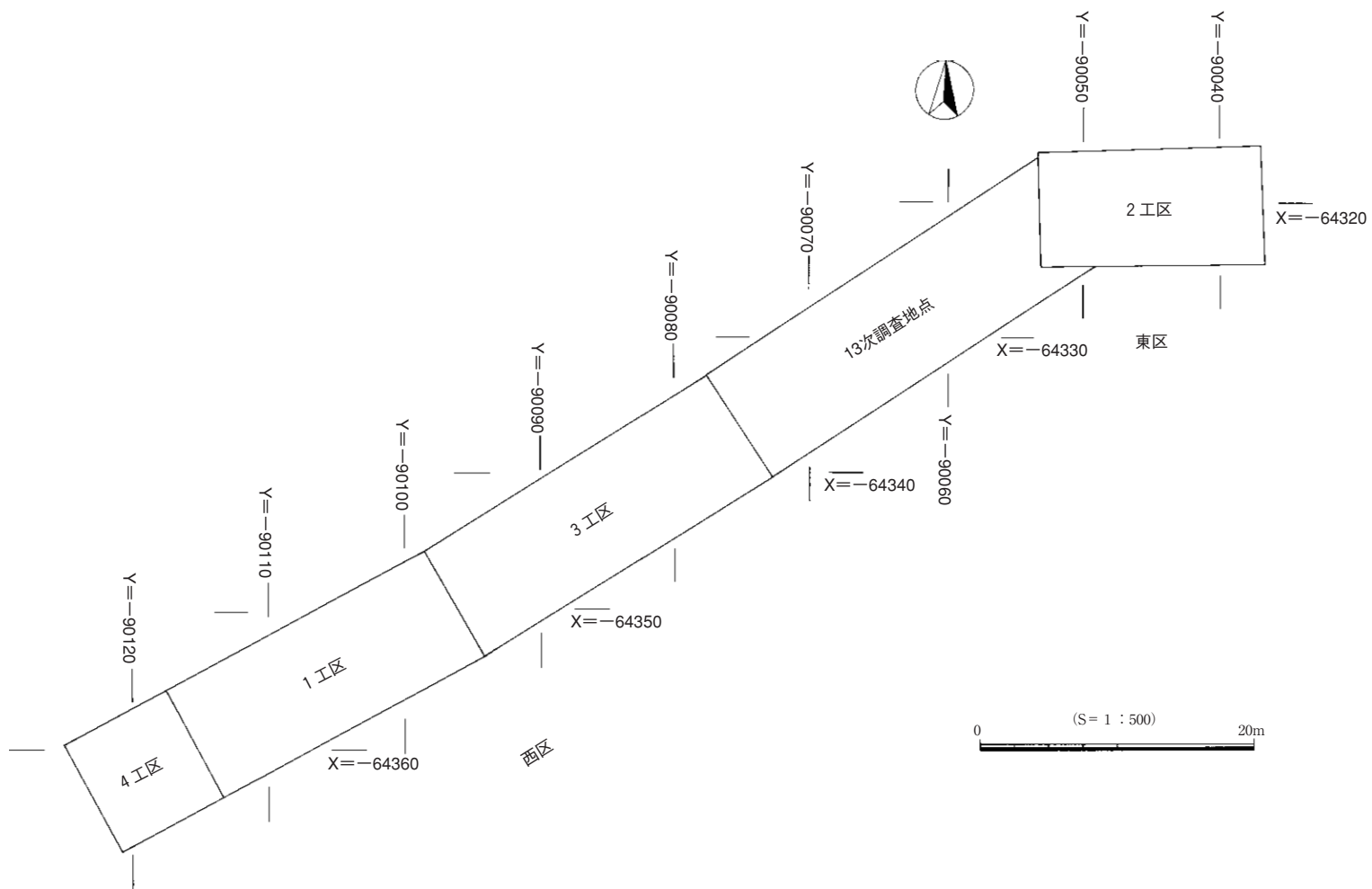
目久美遺跡は、1933（昭和8）年に行われた新加茂川開削工事中に地元在住の清水安造氏によって土器が発見され、世に知られるようになった遺跡である。1934（昭和9）年には、京都大学教授梅原末治氏によって発掘調査が行われ、縄紋時代から弥生時代の土器が層位的に堆積している状況が確認された。1953（昭和28）年には、県道の路線変更と拡幅工事のため、佐々木古代文化研究室により、新加茂川右岸の一部が調査された。この調査では、縄紋時代前期の土器、フナクイムシの生痕のある流木、弥生時代前期から中期の土器、石器、木製品が多数出土した。

1973（昭和47）年には、国道9号線米子バイパス建設に伴う遺跡分布調査が鳥取県教育委員会によって実施され、目久美遺跡、池ノ内遺跡の試掘調査が行われた。この報告で、豊島吉則氏により地形、地質に関する考察が行われた。1973（昭和48）年には、鳥取県による新加茂川放水路計画の事業着工に伴う計画線上のボーリングと、試掘による埋蔵文化財調査が鳥取県遺跡調査会によって行われた。試掘調査では、遺跡の存在は確認されなかったものの、ボーリング調査により、目久美町および東山町の地形が豊島吉則氏により検討されている。

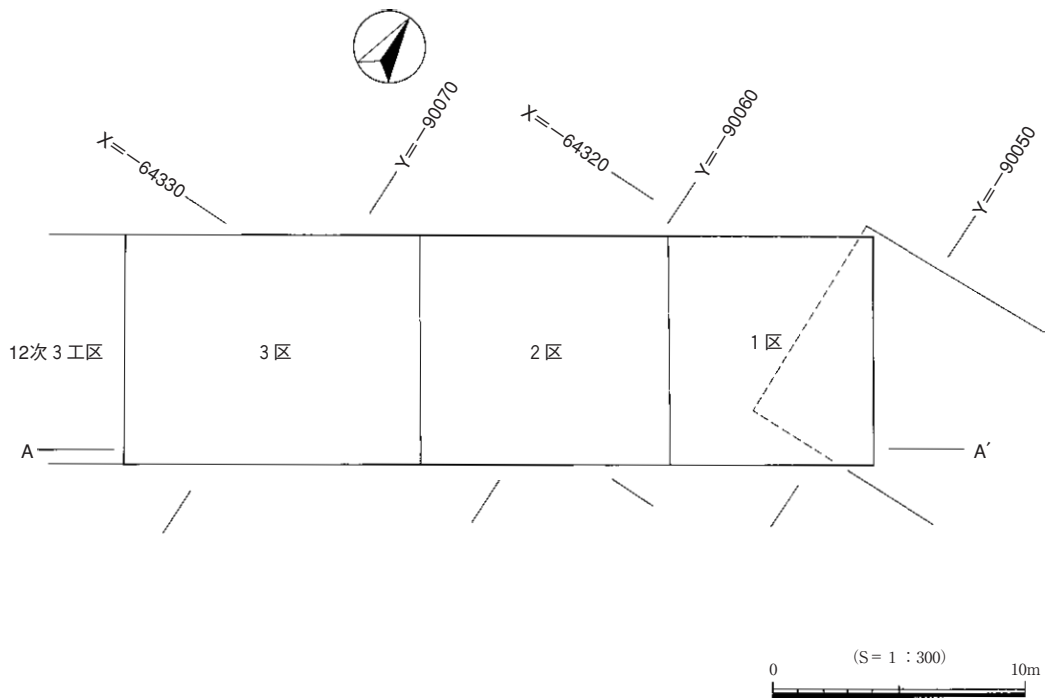
1982（昭和57）年には、新加茂川改良工事に伴う調査（1次調査）が、1984（昭和59）年には目久美遺跡の東に位置する池ノ内遺跡の調査が行われた。この時に行われた1次調査によって、縄紋時代前期初頭から後期に至る時期の遺物包含層や、弥生時代の水田遺構などが検出され、目久美遺跡の具体的な様相が判明した。

1988（昭和63）年以降は、1次調査地点の北側で、下水道工事や住宅建設に伴う調査が相次いで実施され、2次、3次、4次、7次、11次の各調査が行われている。これらの調査は、面積的に小規模なものであるが、2次、3次、11次調査では水田遺構を検出したほか、4次調査では弥生時代前期の遺物を多く含む遺物包含層が確認されており、集落の範囲の広がりを示すものとなった。

1996（平成8）年からは、車尾・大谷町線の道路工事に伴い、5次、6次、8次、9次、10次、12次の各次調査が行われた。1996（平成8）年から翌年にかけて実施した5・6次調査では、弥生時代後期に掘削された大型の水路を検出し、その下層では縄紋時代の海成層を確認した。6次調査地点の南側を調査した2001（平成13）年の8次調査では、弥生時代中期の水田と縄紋時代前期の海成層と波蝕台を検出し、自然環境の変化を窺わせる資料を得た。2001（平成13）年から翌年にかけて実施された、9・10次調査は目久美遺跡の北限に迫る調査であったが、各地点で縄紋時代から近現代にまで至る遺構や遺物を確認し、遺跡の範囲と年代の広がりを確認する調査となった。2005（平成17）年に実施した12次調査では、1次調査地点の南側を調査し、弥生時代水田のさらなる広がりが確認された。



第5図 目久美遺跡調査地点座標図



第6図 調査区割図

第3章 発掘調査の方法と成果

第1節 調査の方法

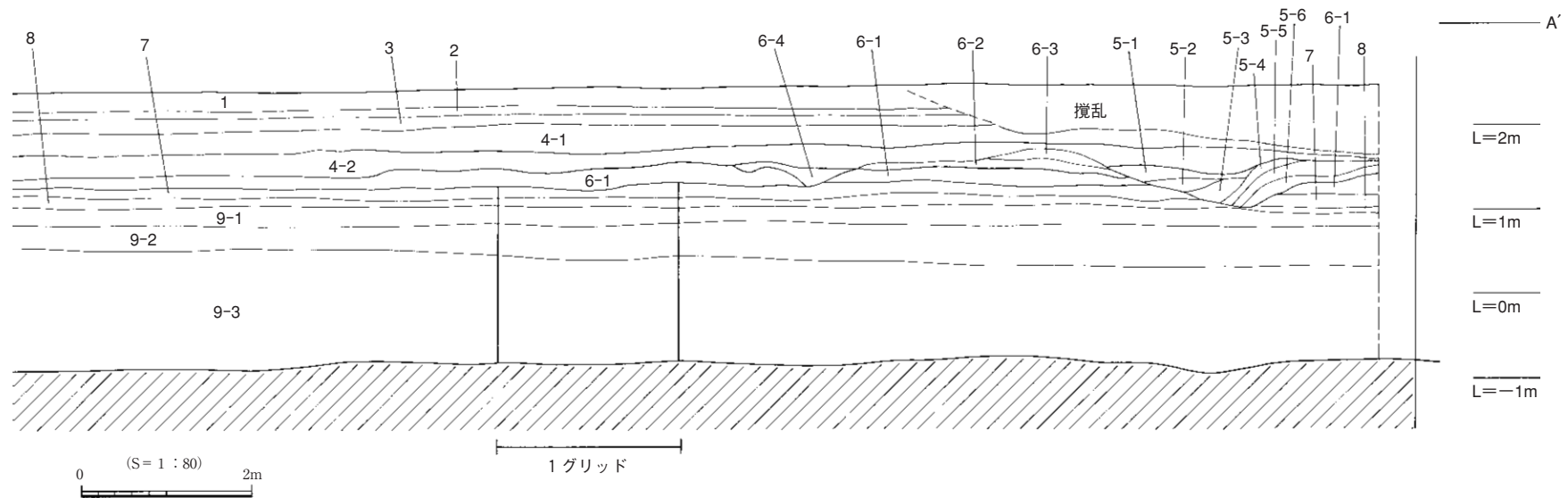
現地調査は、鋼矢板で調査区の安全を確保した上でを行い、縄紋時代層の調査では、H鋼による梁を2段の高さに設置して行った。また、調査区の周囲には、単管パイプによる転落防止柵を設置した。調査区の区割りは、10mのメッシュで、3区画分を設定している。

発掘調査では、現代の水田耕作土や造成土を重機にて掘削したのち、人力にて遺物包含層を掘削して遺構を検出した。また、排土の処理は一輪車を使用して、重機により調査区外へ排出した。

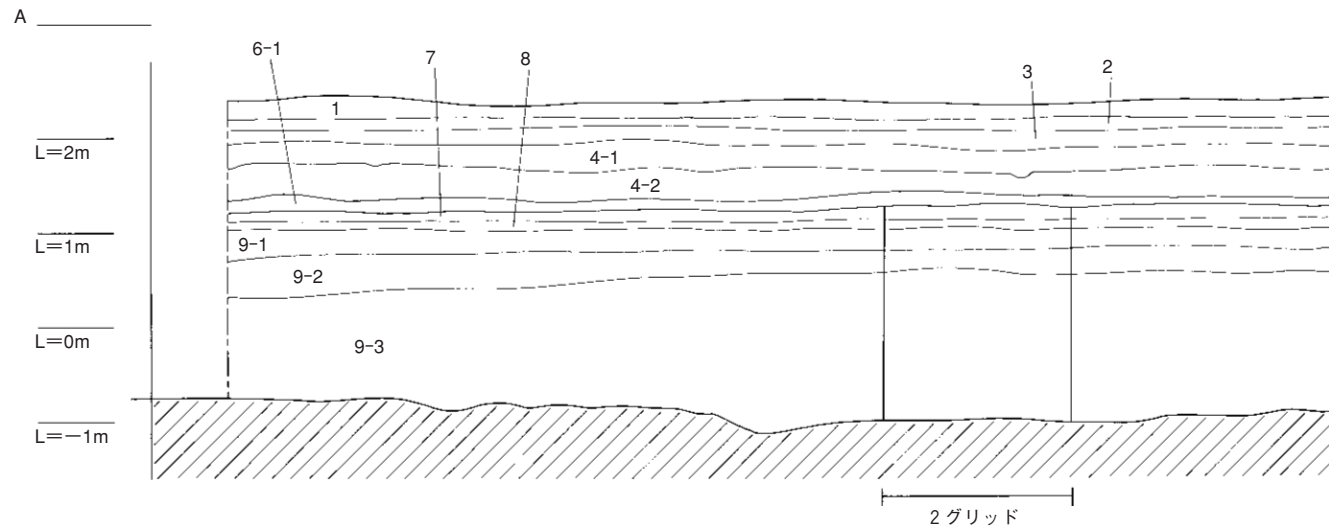
調査地は、低湿地遺跡であるため、調査区の周囲に排水溝を巡らし、調査区内まで仮設電気を引き込み、フロート式の水中ポンプを設置して常時湧き出してくる水を汲み上げた。また、排水中の泥を分離、沈殿するためのノッチタンクも設置し、周辺環境への影響を極力抑えた。

縄紋時代層の調査では、微細な遺物の回収を行うため、グリッドを2箇所設定し、柱状に掘り残しながら調査を行い、中心部の土砂を水洗選別した。

検出した遺構、遺物の記録には平板とトータルステーションを用い、座標値を記録した。写真撮影は、現地では35mmと4×5版のカメラを併用し、白黒、リバーサルフィルムで撮影した。またサブカメラとしてカラーフィルム、デジタルカメラも使用した。遺物撮影は、4×5版のカメラを使用し、白黒、リバーサルフィルムで撮影した。



- 1 水田土 (現代)
- 2 暗オリーブ色粘土
- 3 暗灰褐色粘質土
- 4-1 暗灰色砂 (洪水層)
- 4-2 暗黒灰色粘土
- 5-1 暗黒灰色粘土 (水路1 埋土)
- 5-2 暗白色粗砂 (水路1 埋土)
- 5-3 灰色シルト (水路1 埋土)
- 5-4 淡黒灰色粗砂 (水路1 埋土)
- 5-5 黒灰色粘土 (水路1 埋土)
- 5-6 暗灰色粗砂 (水路1 埋土)
- 6-1 黒色粗砂
- 6-2 白色粗砂
- 6-3 暗黒灰色粘土
- 6-4 暗黒茶色粘土
- 7 黒色粘土
- 8 褐色粘土 (腐植を多く含む)
- 9-1 暗黒灰色粘土 (灰色細砂交じり)
- 9-2 暗黒灰色粘土 (腐植を多く含む)
- 9-3 暗黒灰色砂質土



第7図 調査区南側断面図

第2節 遺跡の層序（第7図）

目久美遺跡は、標高4m程度の水田地帯に位置しており、現地の現況は水田である。調査区内の層序は、大別すると9層に分けることが可能であり、上層から下層まで現代水田から弥生水田、縄紋時代の包含層へと変化している。現地表面の標高は2.4m程度であり、基盤層までは3m以上の厚さで堆積している。以下にその特徴を述べる。

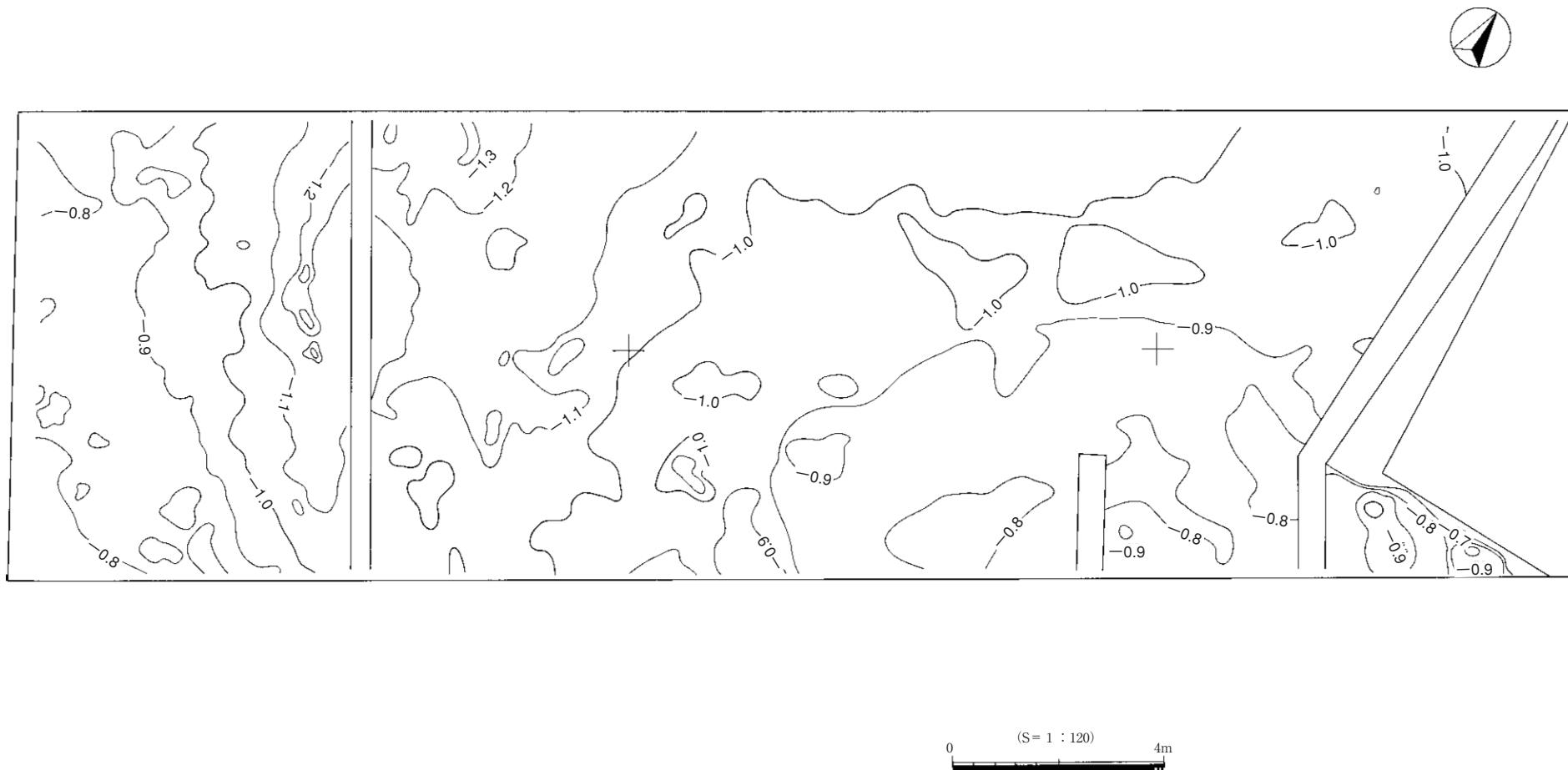
- 1層 現代の水田土である。
- 2層 硬くしまった粘土層で、近世の水田層か。時間が経つと、暗オリーブ色を呈する。
- 3層 暗灰褐色の粘質土層で、砂粒を含む。
- 4層 灰色の細砂と粘土がラミナ状に堆積した層で、弥生時代中期の水田を被覆している。弥生時代後期初頭から前半頃に堆積した洪水層と考えられる。
- 5層 水路1の堆積土である。
- 6層 弥生時代中期の水田を構成する層で、大畦畔と水路2を含む。
- 7層 弥生時代前期から中期の遺物を含む黒色粘土層で、粘性が高い。
- 8層 腐植を多く含む褐色の粘土層で、縄紋時代晩期の土器を含む。
- 9層 縄紋時代前期から後期の堆積層で、さらに3つの層に細分される。上層は、暗黒褐色の粘土で、灰色の細砂が混じり、縄紋時代後期の遺物を含む。中層は、上層と同じ色調であるが、やや粘性が低く、遺物をほとんど含まない。下層は、暗黒褐色の砂質土で、砂粒を多く含む。縄紋時代前期から中期の遺物包含層である。

第3節 縄紋時代前期～後期の調査

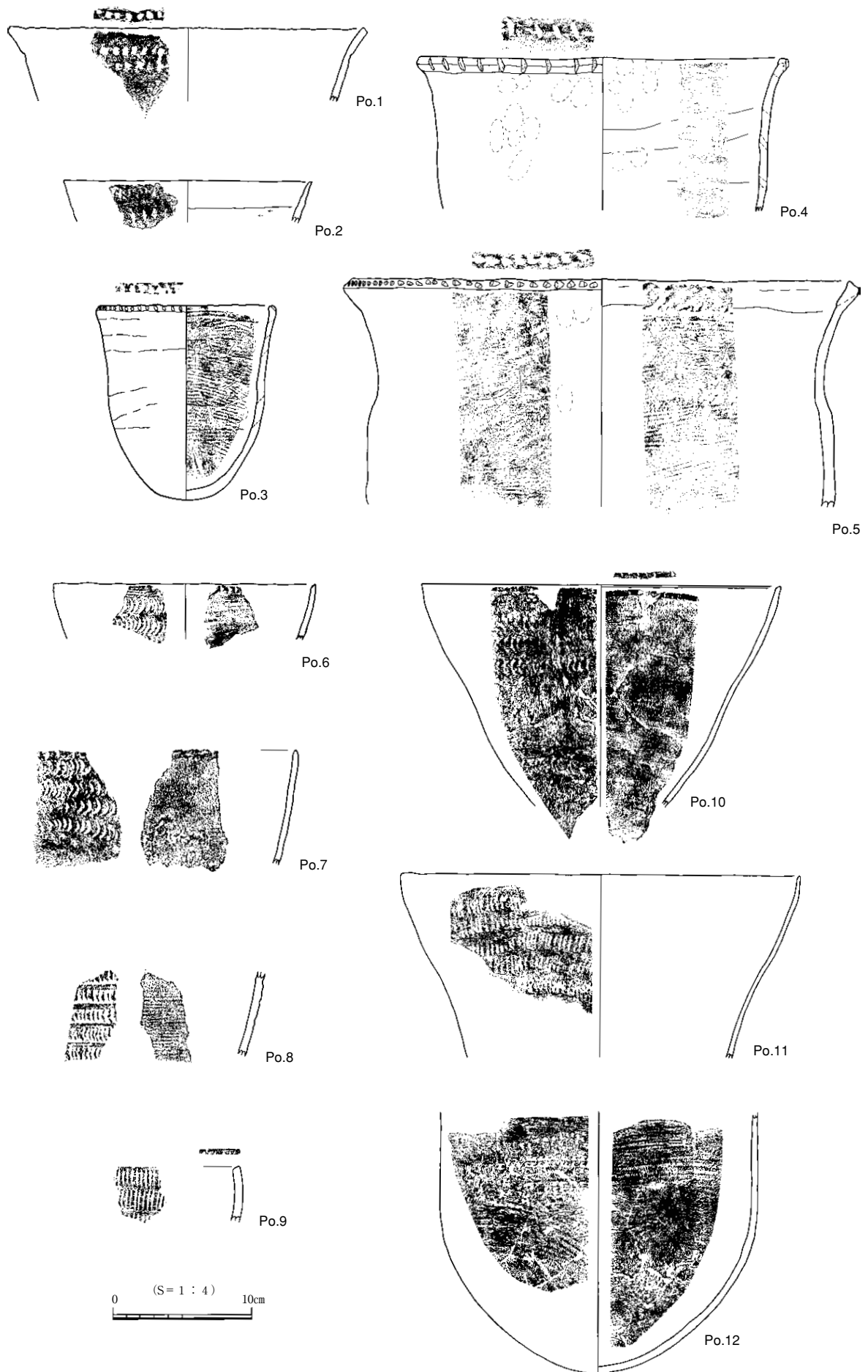
縄紋時代の堆積層は、前期から後期、晩期まで2mほどの厚さで堆積しており、比較的下層のほうに遺物を含む割合が高くなる。縄紋層の層序は、最下層に暗黒褐色の砂質土が1m程度堆積し、上層では縄紋時代後期の遺物を含む暗黒灰色の粘土へと徐々に変化している。さらに上部には植物の腐植を多く含む褐色の粘質土層があり、縄紋時代晩期頃の堆積層と考えられている。調査地点の環境の変遷は、縄紋海進期の前期から中期にかけては、砂質傾向の強い土壌であったものが、縄紋後期頃を境に粘質土へと変化しており、海岸の岩礁地から干潟へと環境が変化したものと考えられる。

遺物出土状況（第9図）

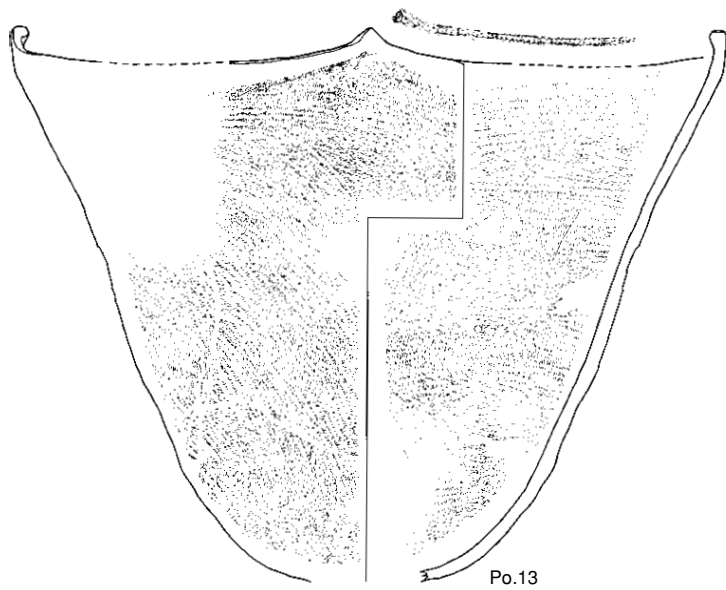
遺物の出土状況を見ると、下層の遺物分布密度がやや高くなっている。遺物密度の高い地点には、食物残渣と見られる動物骨が散布しており、こうしたゴミを廃棄する場所であったと考えられる。出土遺物は、土器は深鉢を主体とするが、小形製品や注口土器の破片も出土している。年代的には、縄紋時代前期から後期まで出土しているが、主体となるのは粗製の貝殻条痕紋土器である。また、平成17年度に実施した第12次調査の3工区よりも古相の遺物が出土しており、時代ごとに遺物の分布域が移動していることを示している。石器については、楕円形の円礫の両端部を打ち欠いて作った打欠石錘が多数出土しており、この場所が海浜部に面した遺跡であった時代の遺物と考えられる。



第8図 縄紋時代前期層の等高線図（標高の単位はmを示す。）



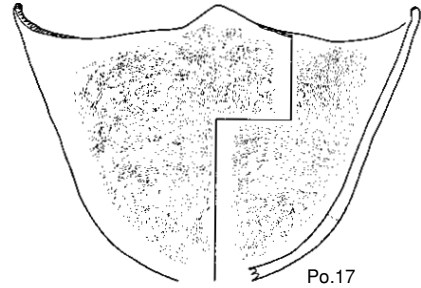
第10図 暗黒灰色砂質土層出土遺物 1



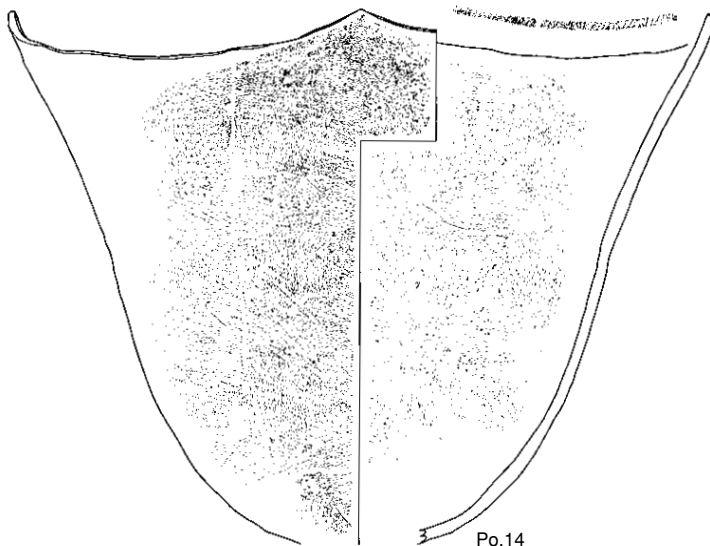
Po.13



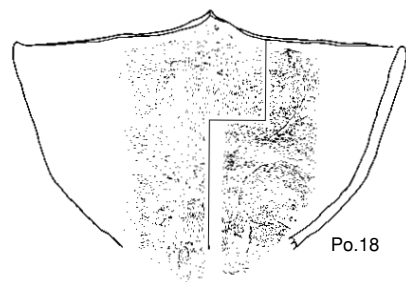
Po.16



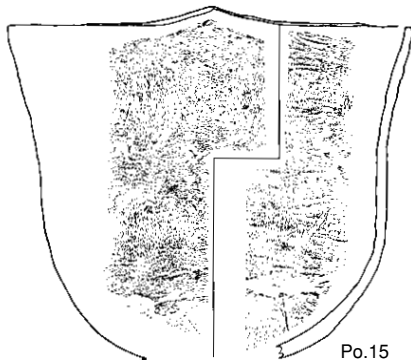
Po.17



Po.14



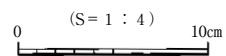
Po.18



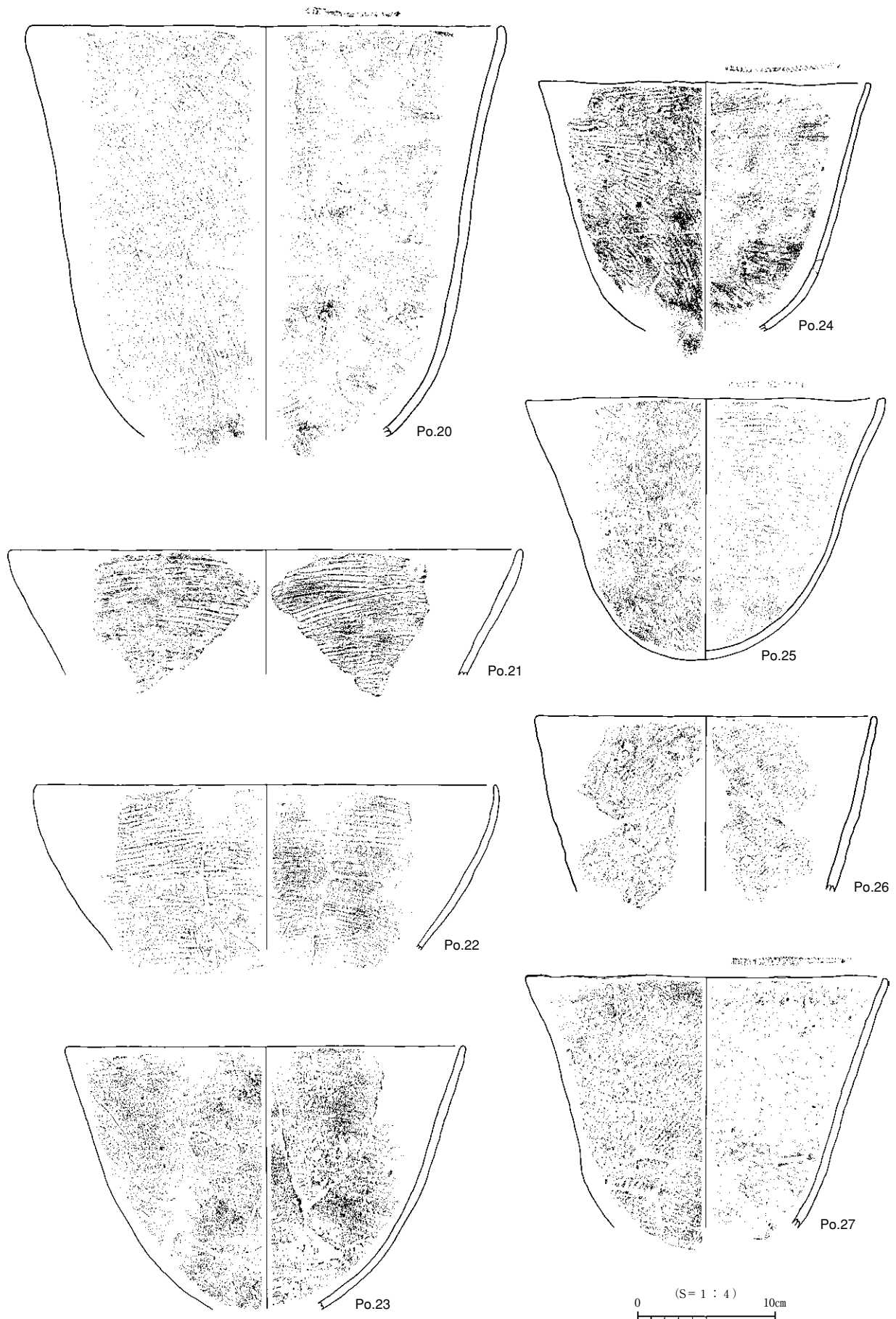
Po.15



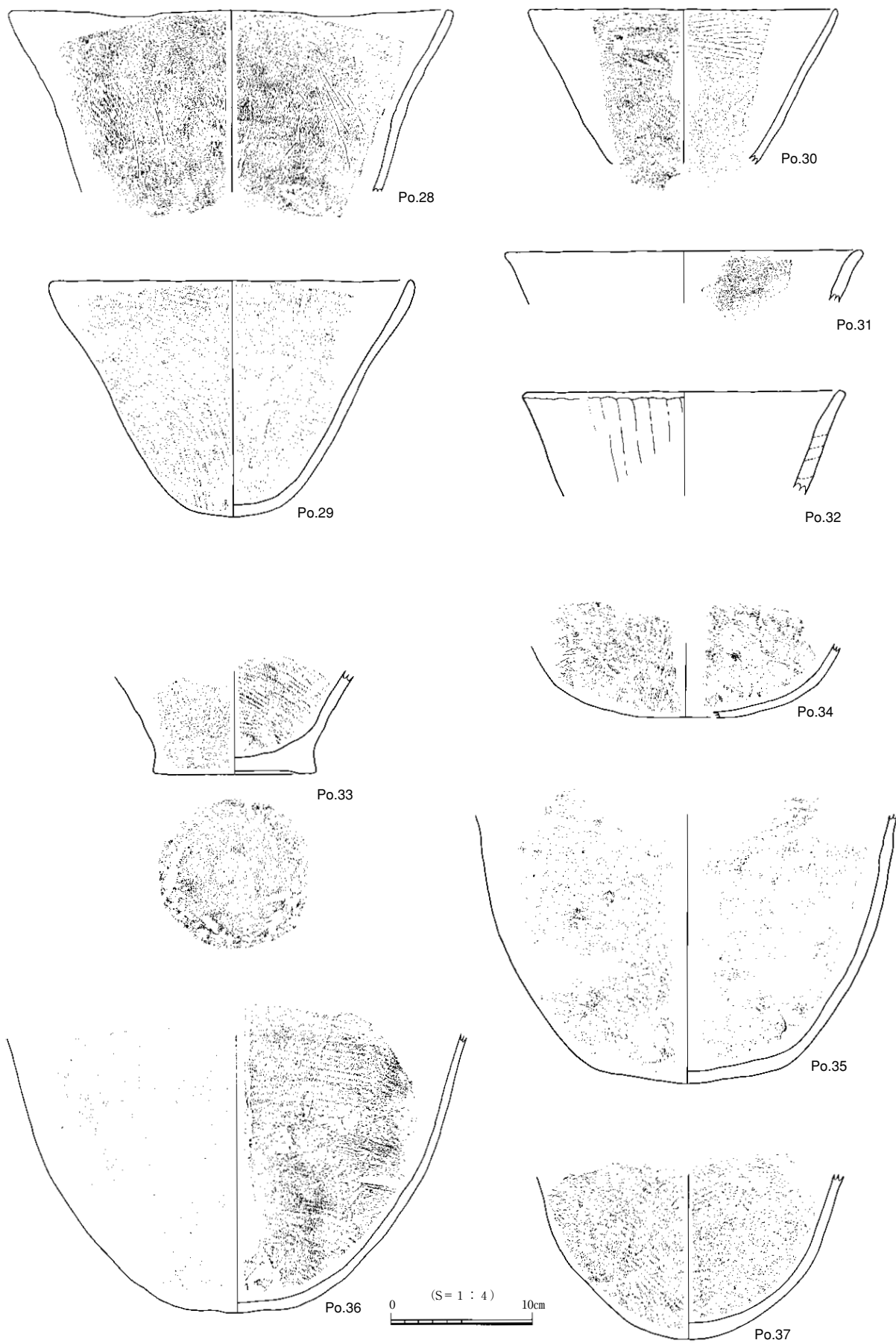
Po.19



第11図 暗黒灰色砂質土層出土遺物 2



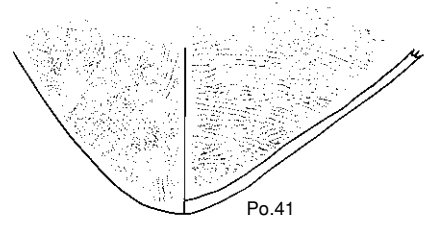
第12図 暗黒灰色砂質土層出土遺物 3



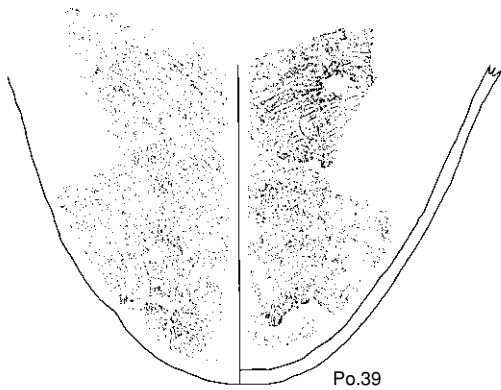
第13圖 暗黒灰色砂質土層出土遺物 4



Po.38



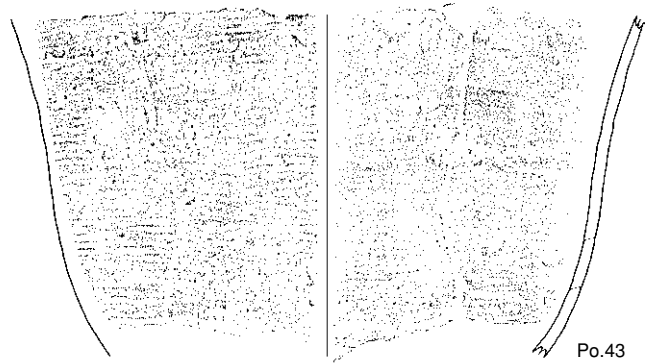
Po.41



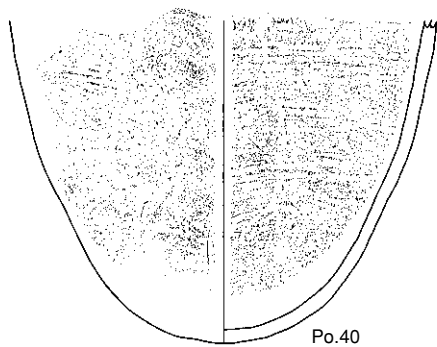
Po.39



Po.42



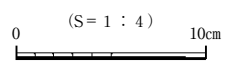
Po.43



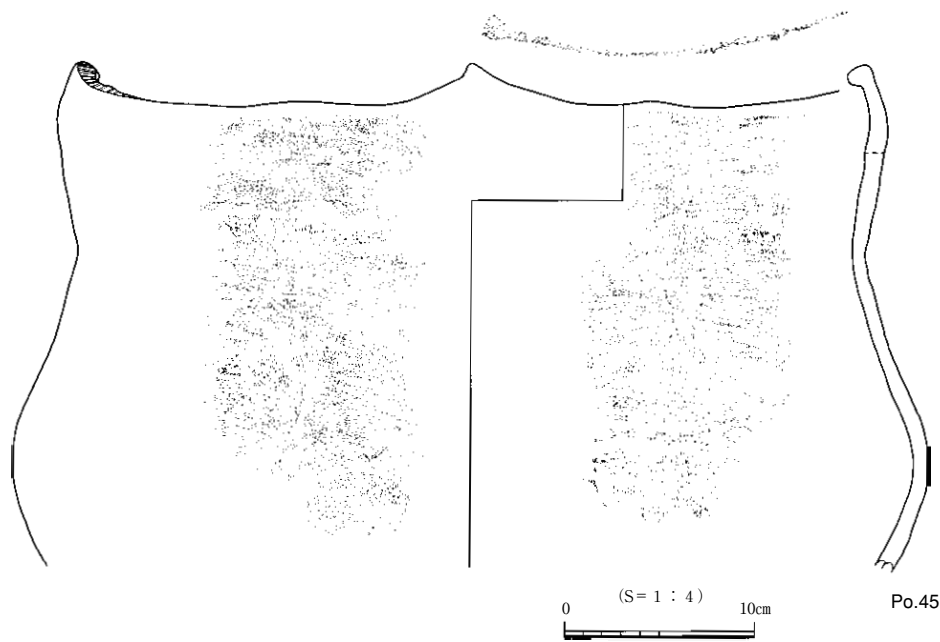
Po.40



Po.44



第14图 暗黒灰色砂質土層出土遺物 5



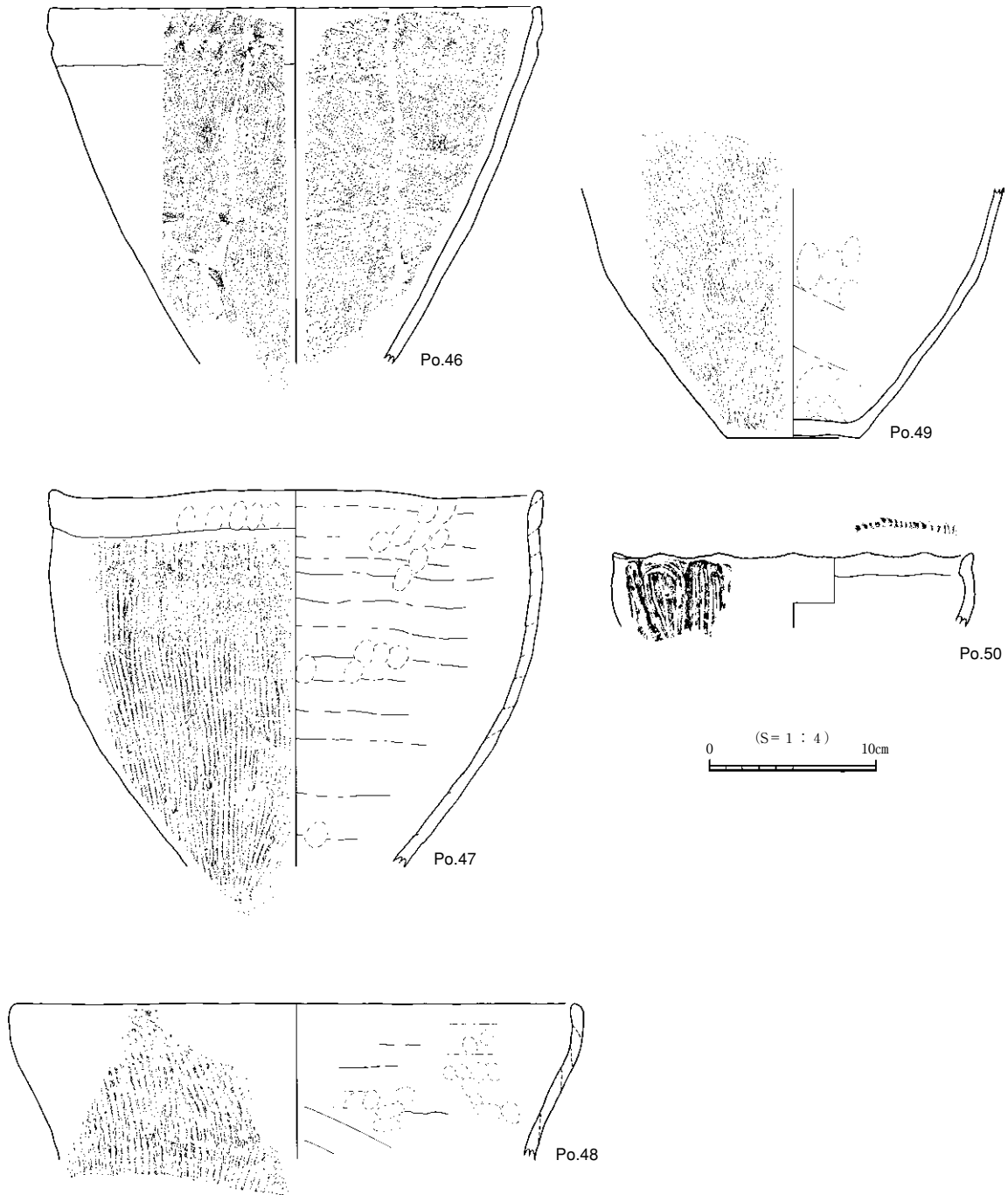
第15図 暗黒灰色砂質土層出土遺物 6

出土遺物 (第10～25図)

Po.1は、口縁部が大きく外反する深鉢で、口縁直下に半裁竹管状の工具を用いた刺突紋が連続して巡る。Po.2は、口縁が外反気味に伸びる深鉢で、外面に板状工具による刺突紋を施す。Po.3は、口径13cm、高さ14cmの小形の深鉢で、砲弾型の器形に口縁端部には刺突が巡る。体部内面には、横方向の貝殻条痕が残る。外面はナデ調整されるが、粘土の積み上げ痕跡が観察できるほど粗い調整である。Po.4も同様の器形と考えられるが、内外面ともナデ調整されている。Po.5は、頸部から口縁部にかけて大きく外反する深鉢で、口縁端部はやや面を持ち、刺突が施される。

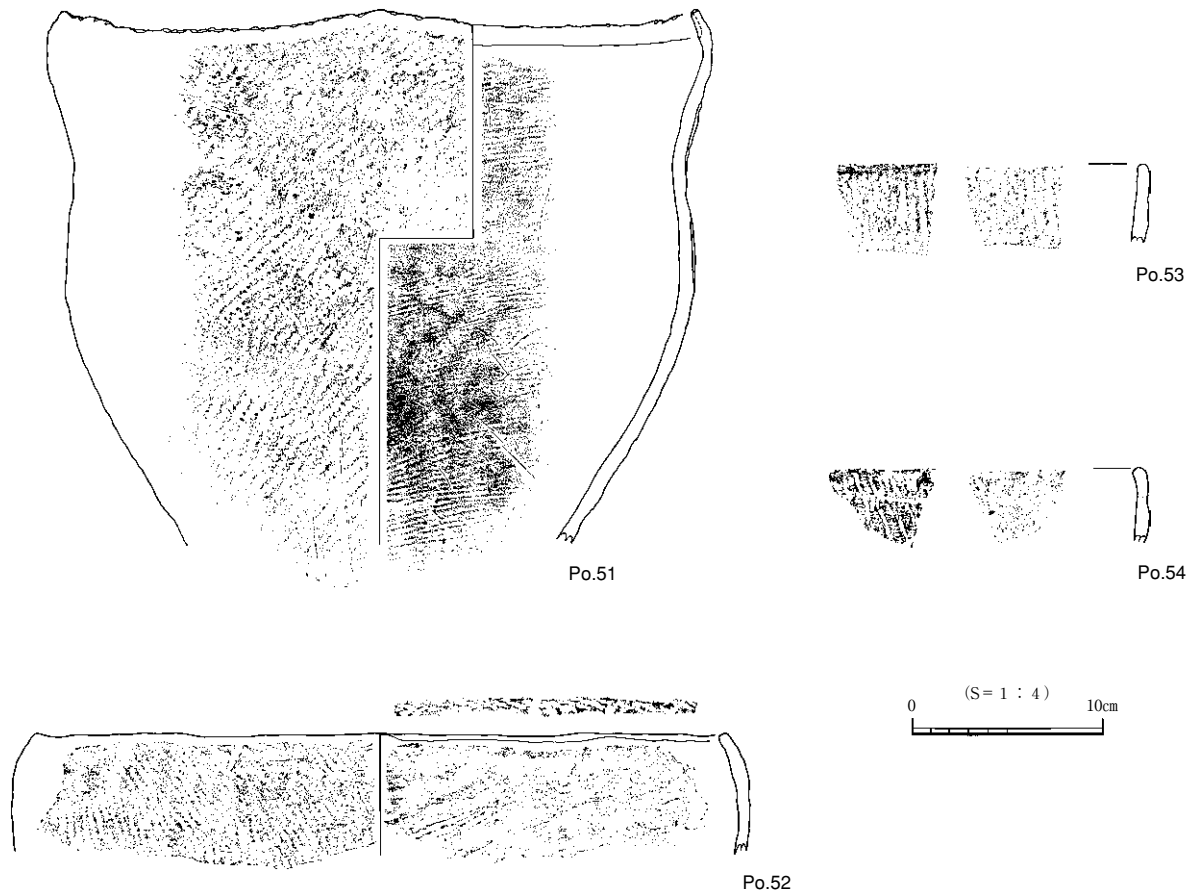
Po.6はやや薄手の浅鉢で、外面に逆「C」字状の刺突紋が二段にわたって施される。Po.7も薄手の深鉢であるが、四段にわたって逆「C」字状の刺突紋が施されている。Po.8も、「C」字状の爪形紋が5段確認できる。Po.9は板状工具による刺突紋が三段にわたって施される。Po.10は、「C」字状の刺突紋が施される深鉢である。Po.11は、薄手の深鉢で、貝殻腹縁による刺突紋を施す。Po.12は、丸底の深鉢底部で、体部外面に竹管状工具の内面を用いた「C」字状の連続刺突紋を施す。

Po.13からPo.45は、粗製の貝殻条痕紋土器で、出土遺物の大半を占める。Po.13からPo.19は、砲弾型の器形で、口縁が波状を呈する一群である。Po.20からPo.32は、口縁部が直線的な深鉢である。貝殻による調整も、斜め方向に削り上げるものや、横方向に施されるものなどバリエーションが見られる。Po.33からPo.44は底部から体部の器形が判るもので、Po.33のような平底のものも存在するが、少数派である。Po.45も貝殻条痕紋の深鉢だが、器形は体部から口縁に向かって屈曲し、口縁端部内面が肥厚する点に特徴が見られる。口縁端部には刺突が施される。Po.46、Po.47は、砲弾型の器形で口縁部がやや肥厚する。体部外面は、縦方向に貝殻条痕紋が施される。Po.48は、口縁部がラッパ状に広がり、端部は真直ぐ立ち上がる深鉢で、縦方向の貝殻条痕紋が施される。Po.49は、平底の底部で、外面には縦方向に条痕調整される。Po.50は花卉状に広がる口縁を持ち、外面には、ヘラ条工具により蓮弁状の紋様が施される。船元Ⅲ式期に並行するものと考えられる。



第16図 暗黒灰色砂質土層出土遺物 7

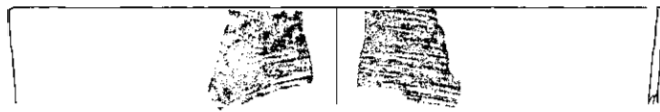
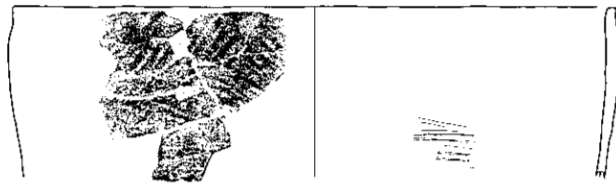
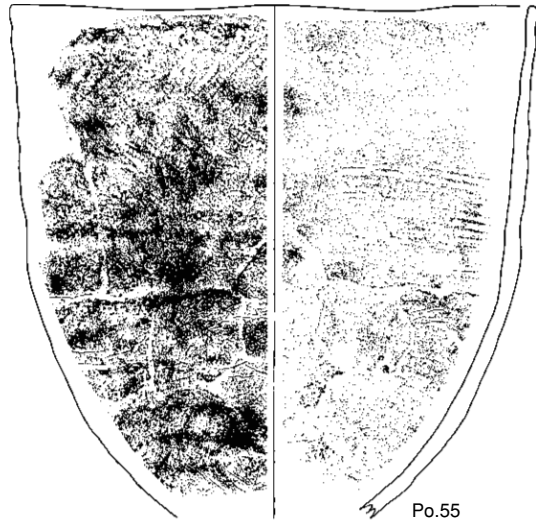
Po.51は、外面全体に撚糸によるLR縄紋が施される深鉢で、口縁部は波状を呈する。内面は、貝殻条痕紋により調整されている。船元I式の古段階に相当するものと考えられる。Po.52は、口縁部が内彎気味に立ち上がる深鉢で、外面にLRの単節縄紋が施される。内面には貝殻条痕が残る。Po.53、Po.54は、深鉢の口縁部細片で、外面に撚糸紋が施されている。Po.55は砲弾型の深鉢で、口縁部直下外面に羽状縄紋を施す。内面には貝殻条痕が残るが、全体的にナデ調整されている。Po.56も同様に外面に羽状縄紋が施されている。Po.57は口縁部が真直ぐ立ち上がる深鉢で、内外面とも貝殻条痕による調整が確認される。Po.58と同一地点で取上げたが、同一個体ではなかった。



第17図 暗黒灰色砂質土層出土遺物 8

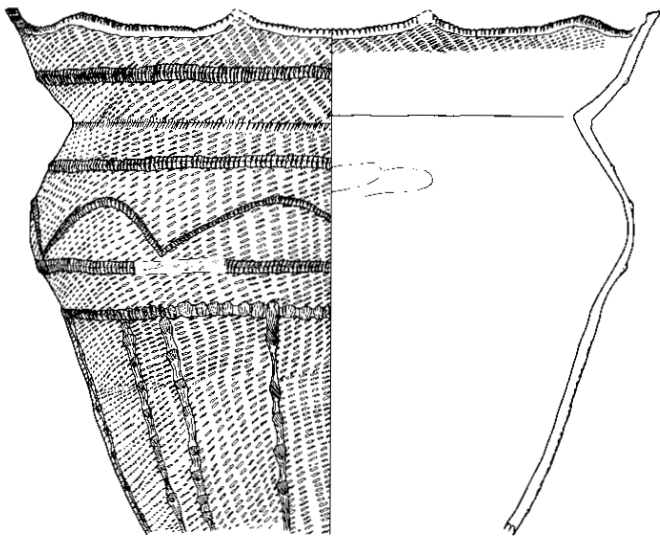
Po. 58は、砲弾型の深鉢で、口縁部直下に半円と渦巻き状の紋様帯が巡る。下半部には羽状縄紋が施されている。Po. 59はキャリパー型の深鉢で、外面に縄紋が施された後、細い突帯を貼り付け、そこに刺突を施す。突帯による紋様は、上部が半円状の紋様、下部は縦方向に割り付けられる。刺突には、上半部はヘラ状の工具を用い、下半部は貝殻を使用している。Po. 60も同様の器形だが、細い突帯で三角状の紋様を施す。Po. 61は、タマネギ型の器形で、外面に縄紋が施され、体部の上半に円弧状に4条の突帯が貼り付けられる。突帯の貼付には半裁竹菅状の工具を連続して押し付け、周囲にはみ出した粘土と刺突の痕跡が残る。Po. 62は球形の深鉢で、体部外面に縄紋が施される。Po. 63は、表面の風化が著しいが、突帯に刺突が施されている。

S. 1は、黒曜石製のスクレイパーである。S. 2は、二次的に加工された黒曜石製の剥片である。S. 3は、サヌカイト系の石材で作られたスクレイパーで、縦匙状を呈する。S. 4は大半が欠損しているが、明瞭な擦り跡の残る円礫で、砥石と考えられる。S. 5からS. 20は、楕円形の礫を使用した打欠石錘である。重量は100gから400gまでとやや幅がある。

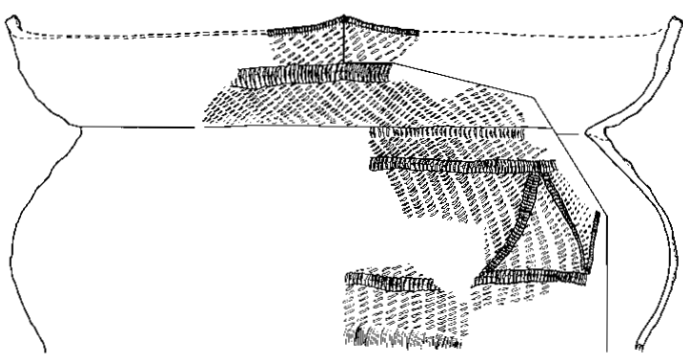


(S=1:4)
0 10cm

第18図 暗黒灰色砂質土層出土遺物 9

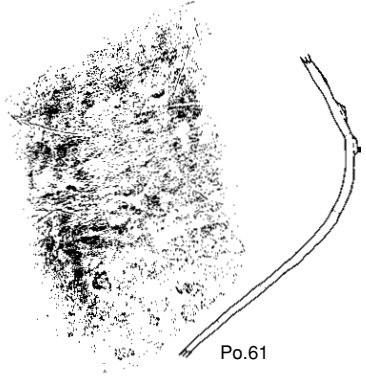


Po.59

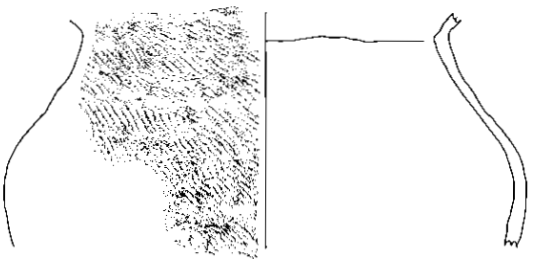


Po.60

(S=1:4)
0 10cm



Po.61

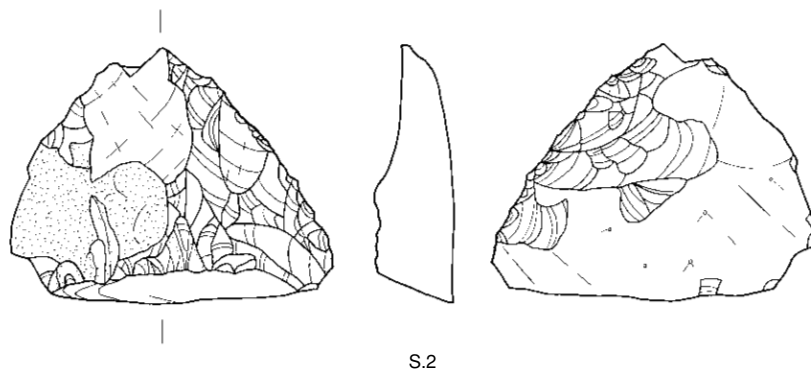
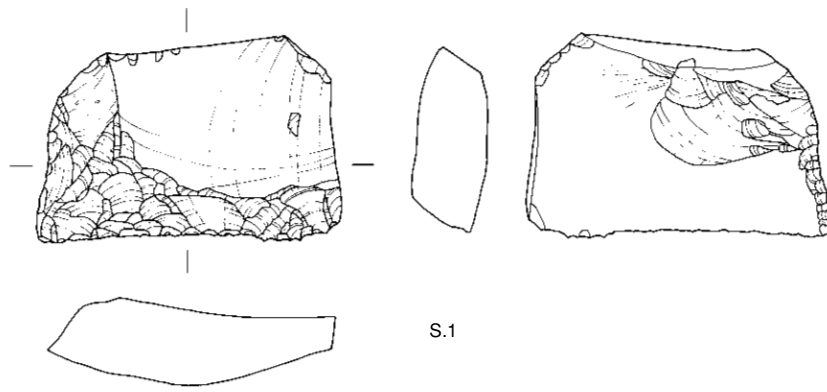


Po.62

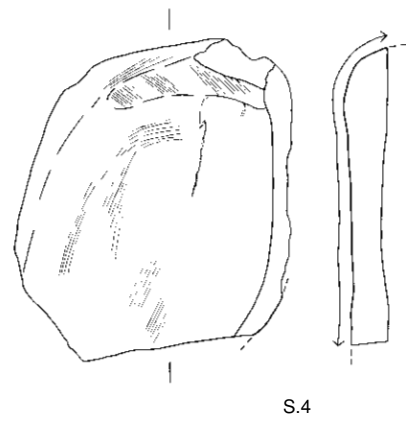
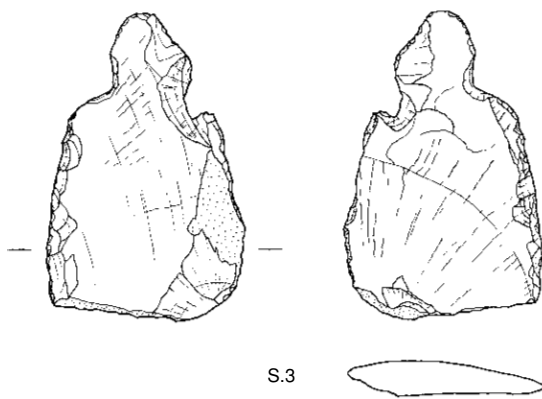


Po.63

第19図 暗黒灰色砂質土層出土遺物10

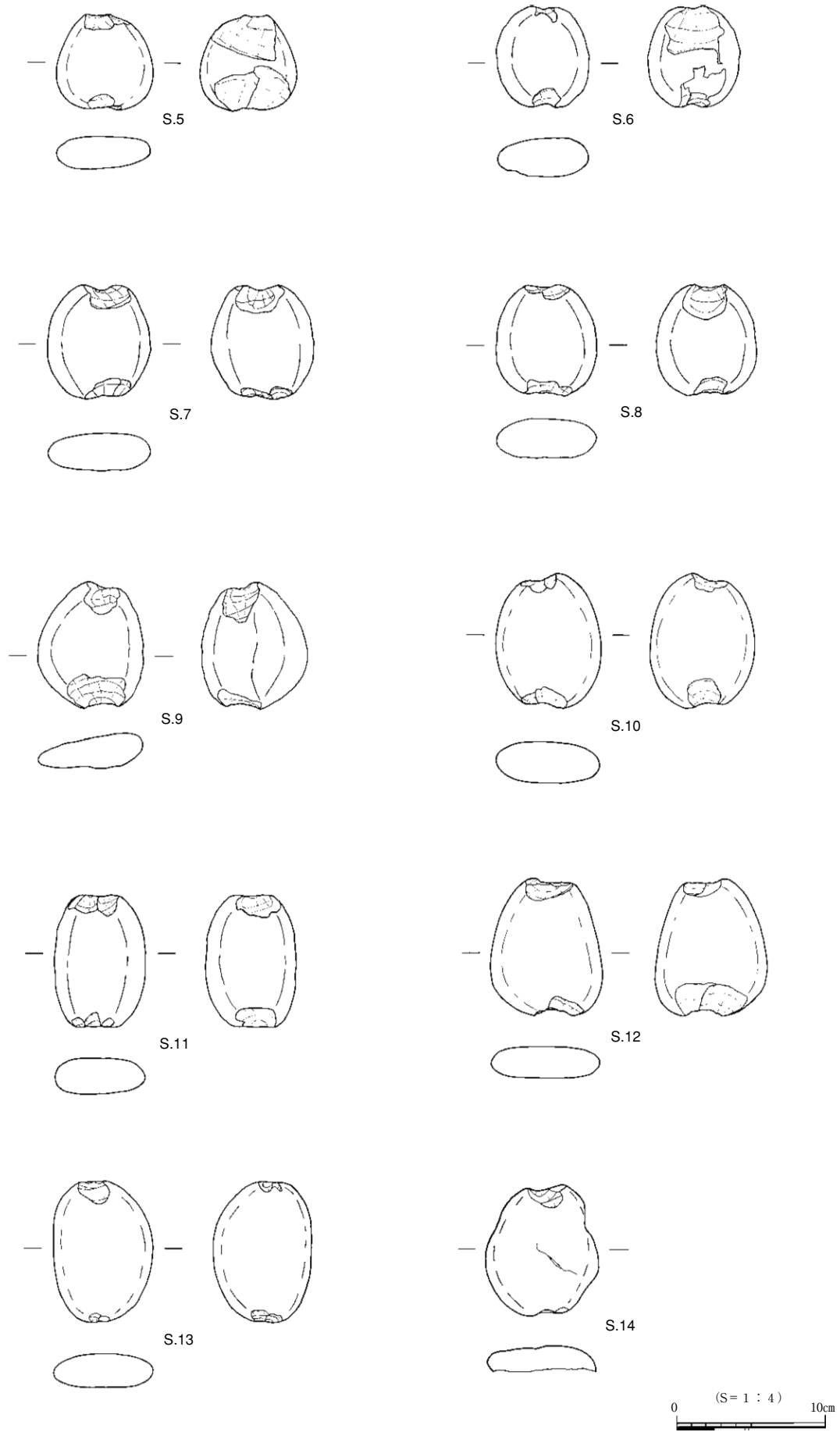


(S = 1 : 1)
0 2cm

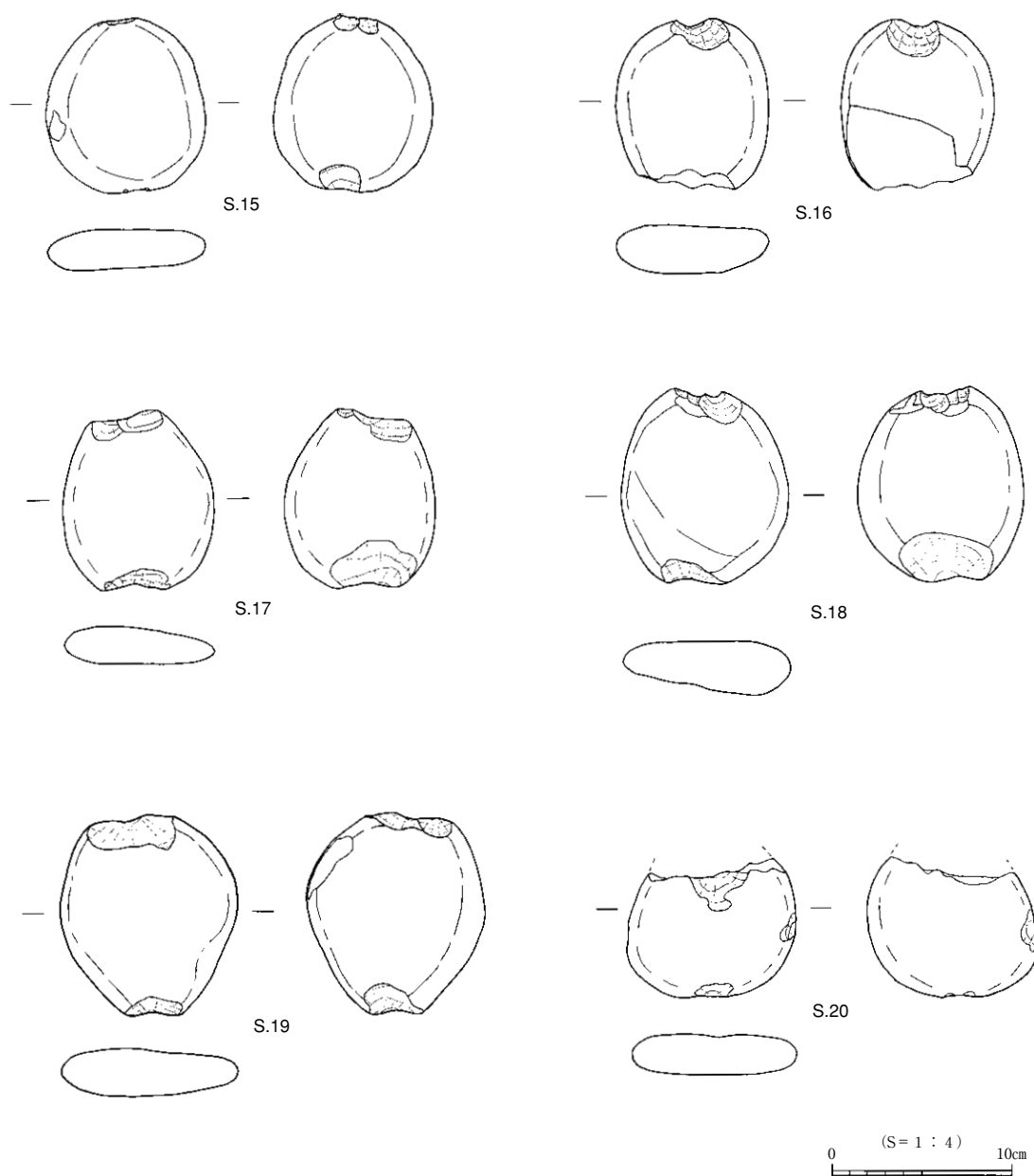


(S = 1 : 2)
0 5cm

第20図 暗黒灰色砂質土層出土遺物11



第21図 暗黒灰色砂質土層出土遺物12

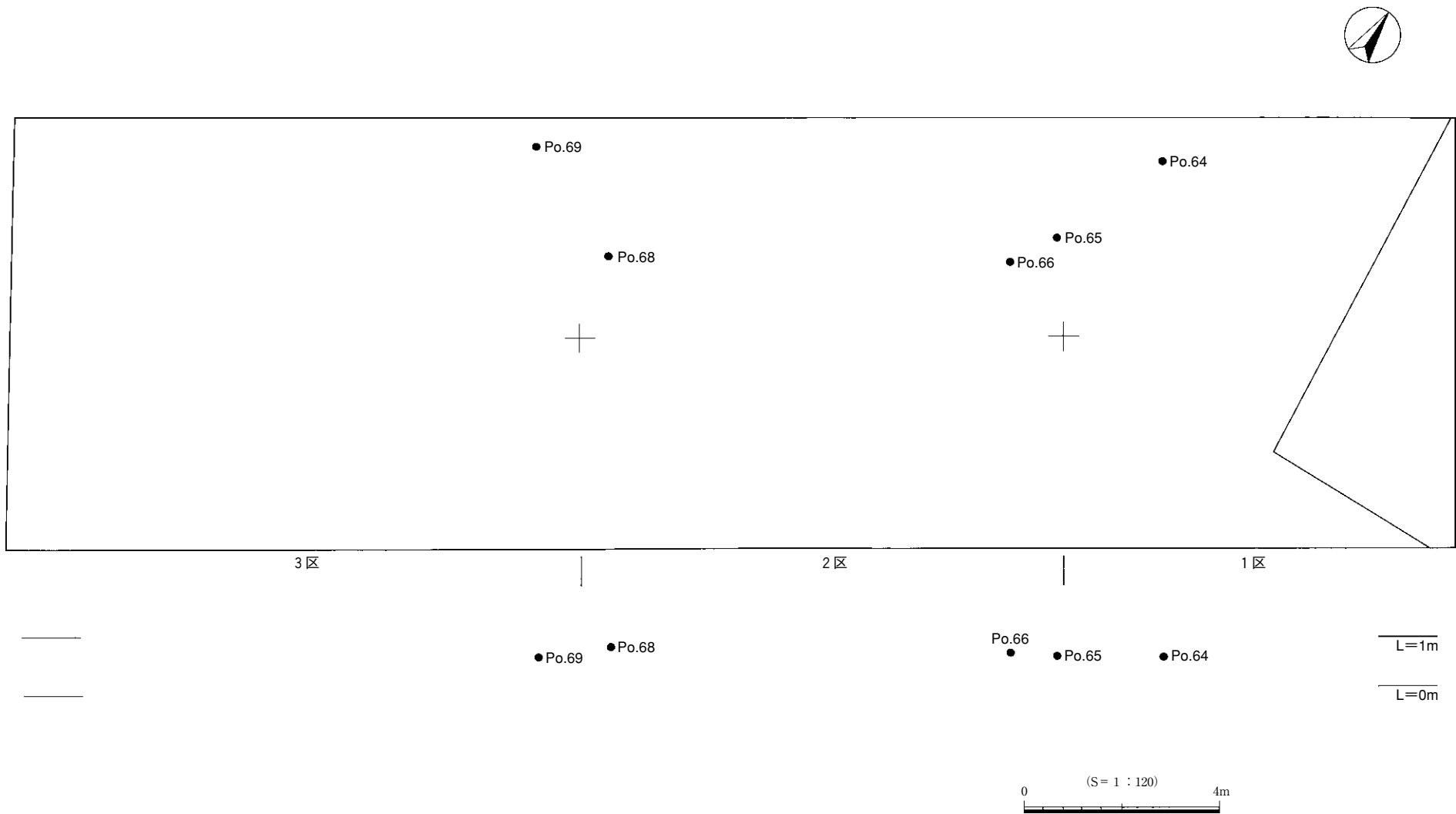


第22図 暗黒灰色砂質土層出土遺物13

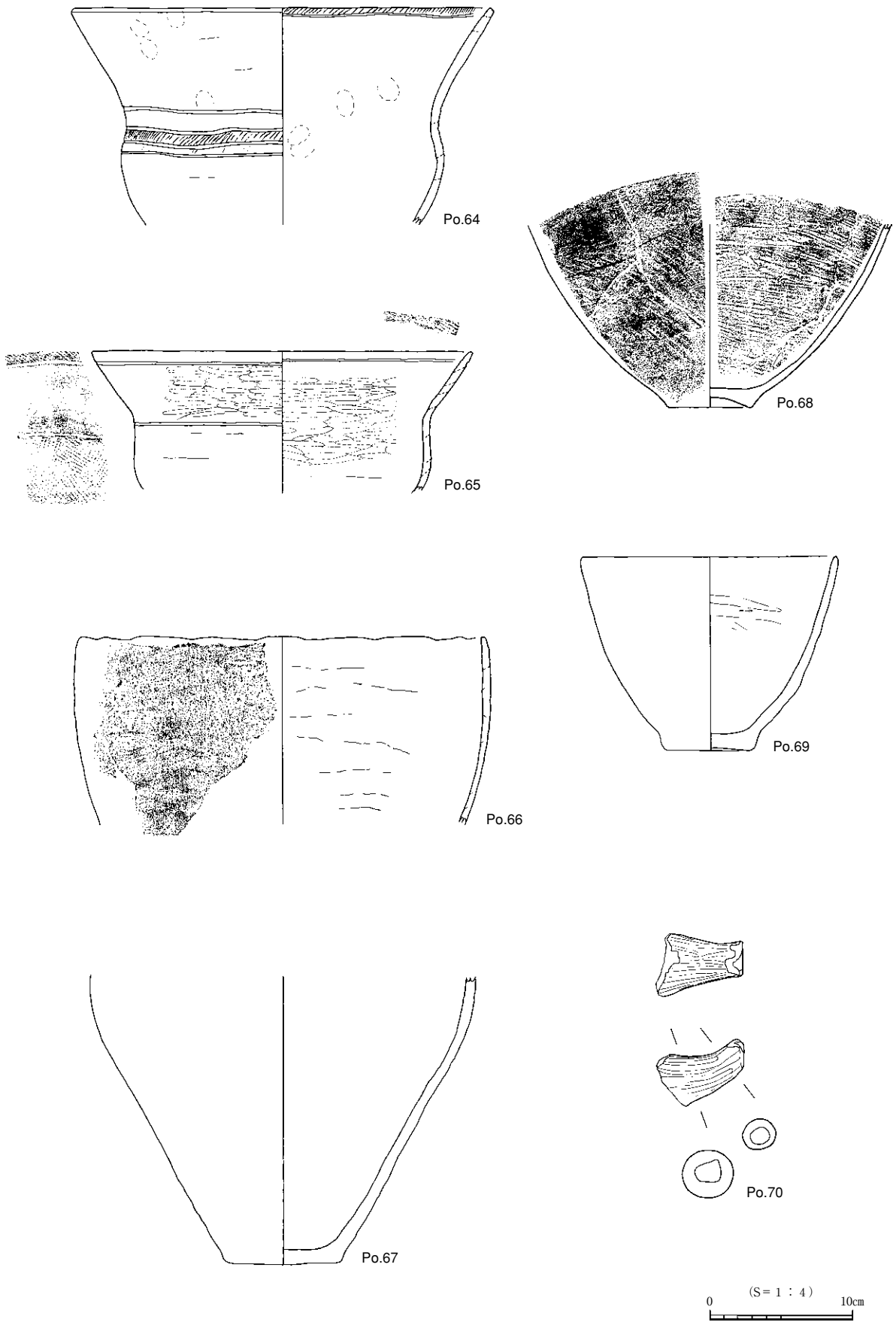
Po. 64からPo. 70、S. 21からS. 23は、暗黒灰色粘土層から出土した遺物である。

Po. 64は、頸部に4条の沈線紋が巡る深鉢である。沈線紋の中心には板状工具による刺突が施されており、磨消縄紋を志向している。口縁端部内面にも同様に沈線と刺突が施されている。Po. 65は、口縁がラッパ状に開く浅鉢で、内外面に横方向のミガキが施され、口縁部の内外面と頸部外面に1条ずつ沈線紋が巡る。Po. 66は、粗製の深鉢で、内外面ともナデによって調整されている。Po. 67、Po. 68は、深鉢の底部である。Po. 69は、小形の深鉢で、内面はナデ調整される。Po. 70は、注口土器の破片で、外面にミガキを施す。

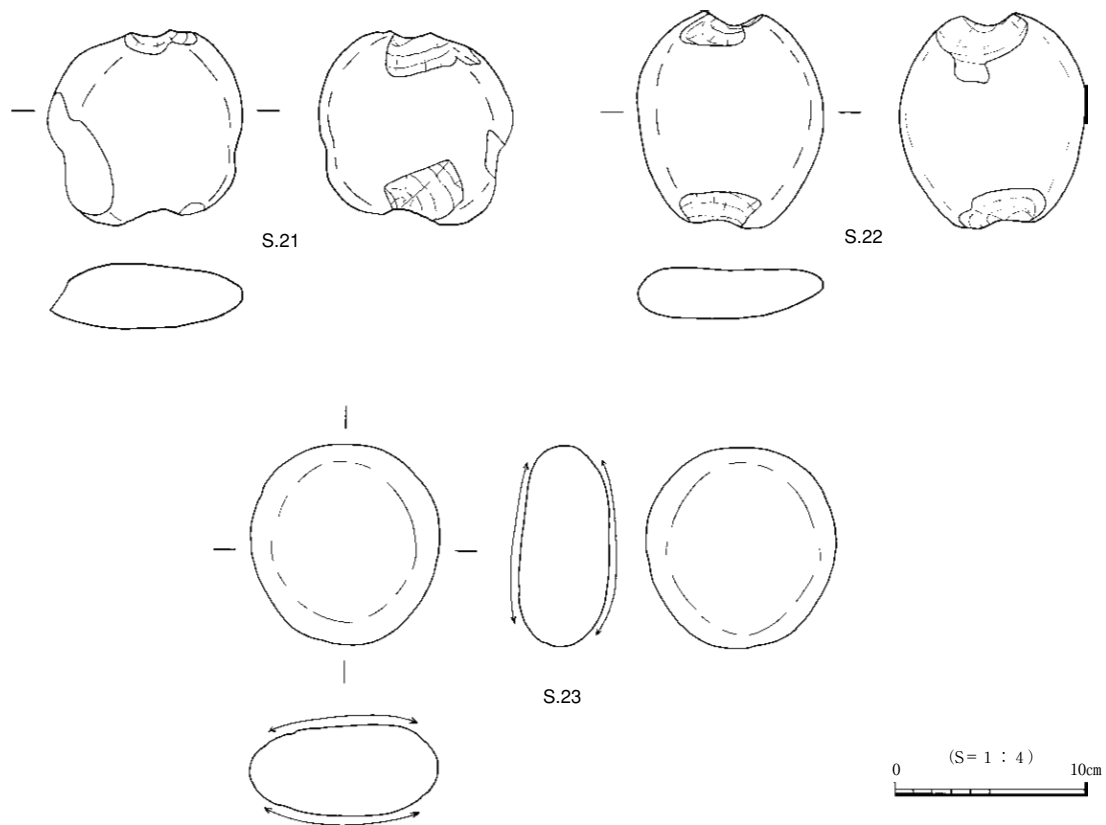
S. 21、S. 22は、楕円形の礫を使用した打欠石錘である。S. 23は、円礫の両面を使用したすり石である。



第23図 暗黒灰色粘土層の遺物分布図



第24図 暗黒灰色粘土層出土遺物 1



第25図 暗黒灰色粘土層出土遺物 2

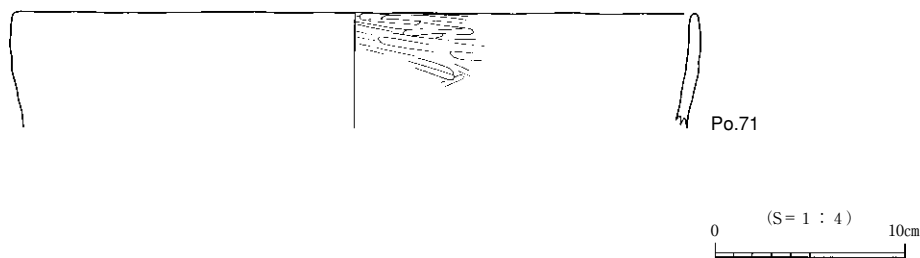
第4節 縄紋時代晩期～弥生時代前期の調査

縄紋時代晩期から弥生時代前期の調査では、第7層の黒色粘土層上面において、多数の足跡を検出した。平成17年度に実施した12次調査3工区の調査では、第3水田面とした層から、多数の足跡や水路とともに自然木や破損した木製品を埋め込んだ木列を検出しており、今回の足跡もこの層に相当する面で検出されている。この第7層からは、弥生時代前期から中期後半の遺物が出土しているが、いずれも細片であり、上層の水田耕作中に混入したものと考えられる。

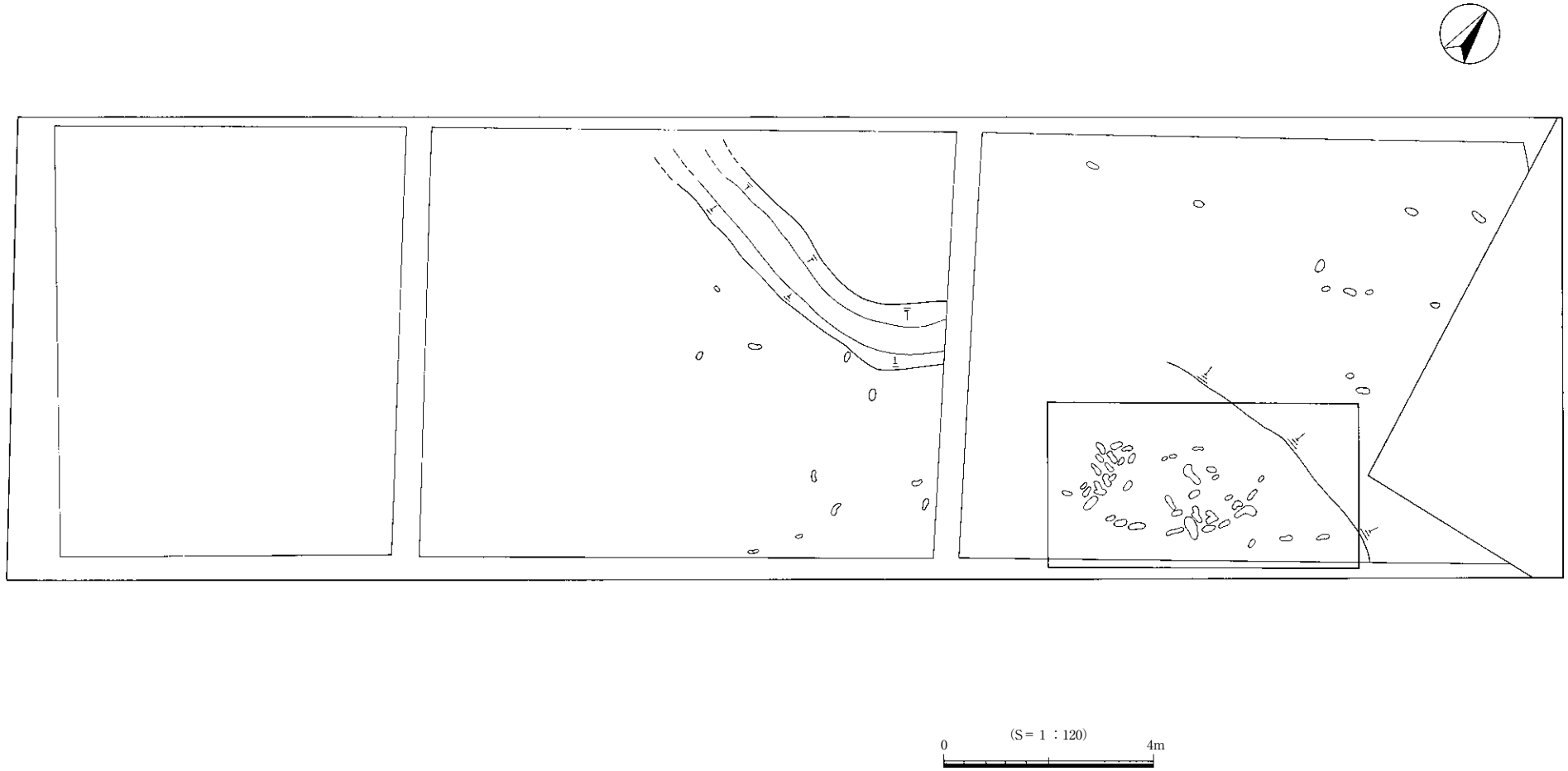
検出遺構 (第27・28図)

1区と2区において足跡を検出したのみで、その他の遺構は見つけられなかった。

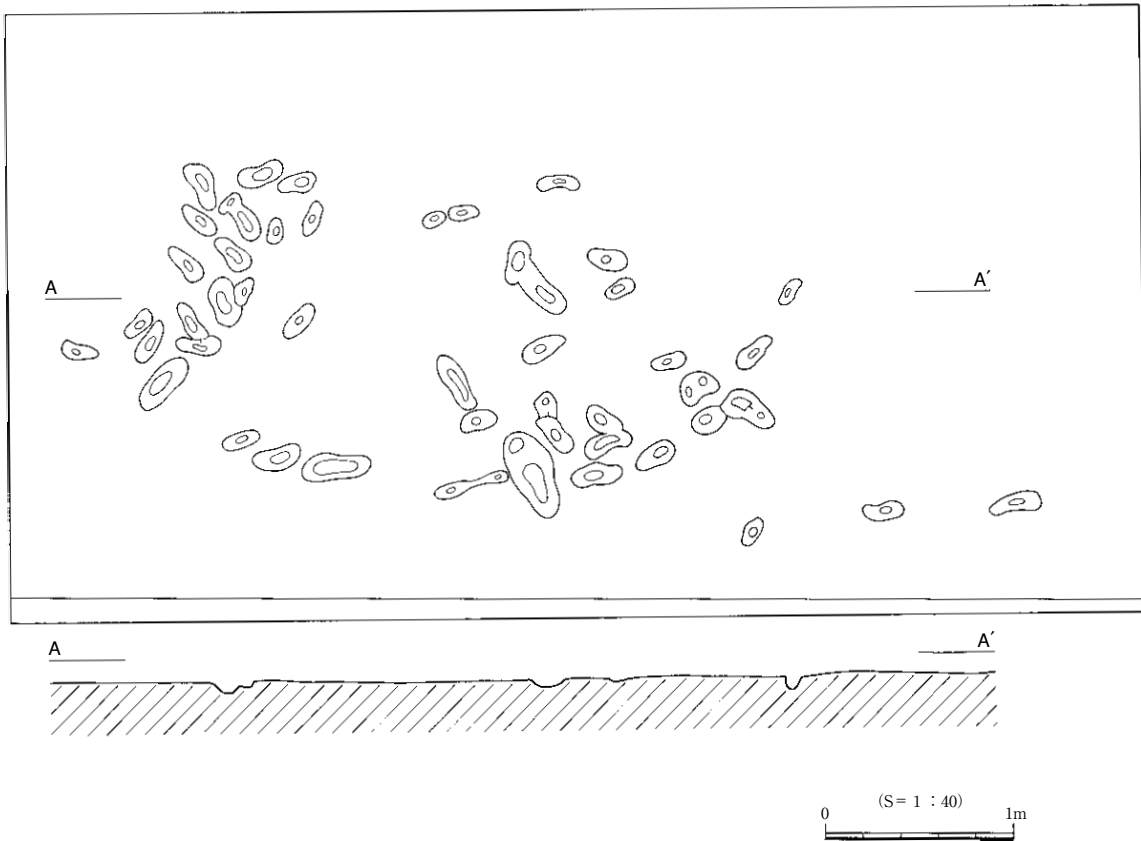
足跡は、全体的にまばらにしか検出できなかったが、1区の南側ではやや密集した状況で確認した。サイズは、概ね10cmから40cm程度で、深さは5cm程度が多かった。足跡内からの出土遺物は無く、形成された時期がはっきりしないが、足跡の形成された第7層の下層、第8層の褐色粘土層からPo.71が出土しており、縄文時代晩期以降に形成されたものと考えられる。



第26図 褐色粘土層出土遺物



第27図 黑色粘土層上面遺構平面図

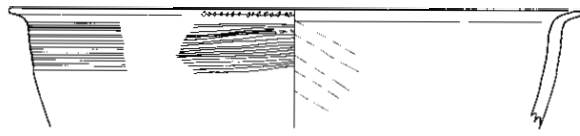


第28図 黒色粘土層上面足跡平面図

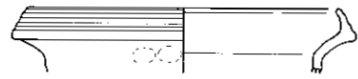
出土遺物 (第26・29図)

Po. 71は、第8層から出土した口縁部が真直ぐ立ち上がる深鉢で、内面はミガキ調整されている。

Po. 72~Po. 77、S. 24~S. 27は、第7層から出土した遺物である。Po. 72は、口縁端部が「く」字に曲がる甕で、口縁直下に9条の凹線紋と、口縁端部に刺突が施される。Po. 73は、「く」字状の口縁を持つ甕で、口縁端部を上方に摘み上げる。Po. 74は、口縁端部が上方に肥厚する甕で、3条の凹線が巡る。Po. 75は、口縁端部が内彎気味に大きく立ち上がる壺で、口縁部に3条の凹線が巡る。Po. 76は、内面をヘラケズリし、外面に縦方向のヘラミガキを施す底部片である。Po. 77は、真直ぐ立ち上がる鉢状の器形で、口縁端部は「T」字状に肥厚する。高坏か。S. 24は、サヌカイト製の打製石器で、石包丁か。S. 25は、刃部の大半を欠損している磨製石斧である。S. 26は、全体に擦痕の残る大形石包丁の刃部片である。表面には、製作時に付いたと見られる多数の線状痕が確認できる。S. 27は、黒曜石製の石鏃である。



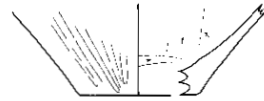
Po.72



Po.75



Po.73



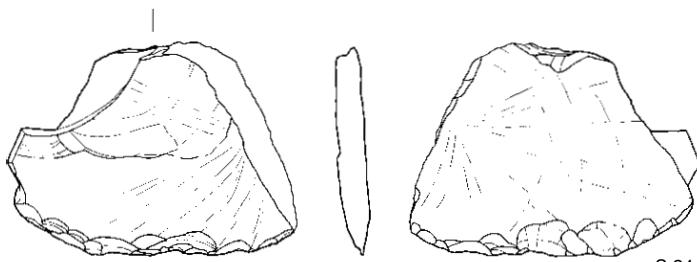
Po.76



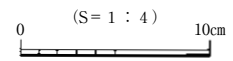
Po.74



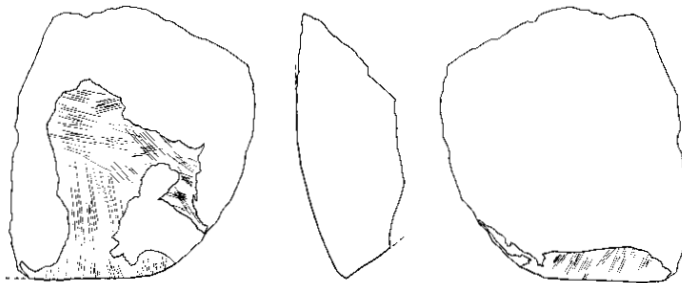
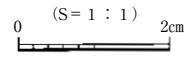
Po.77



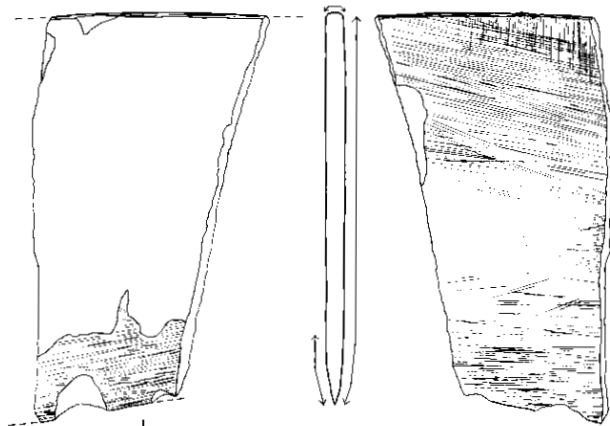
S.24



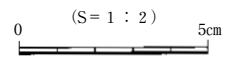
S.27



S.25



S.26



第29図 黑色粘土層出土遺物

第5節 弥生時代中期の調査

弥生時代中期の調査では、水田跡と蛇行する水路を検出した。第12次調査の2工区では、粗砂が面的に堆積した層において畦畔を検出しており、都合3面の水田を確認したが、本調査区では粗砂の一部を検出したのみで、面的な広がりには確認できなかった。また、水田面も1面しか確認できず、水路1を挟んだ南北で、水田の様相が異なっているものと考えられた。

検出遺構（第30～33図）

水田 水路1の両岸に作られた大畦畔と、小畦畔によって区画される水田遺構である。水路1の北側では、粗砂が水平堆積している状況を確認し、12次調査で確認された第1水田の続きと考えられた。しかし、小畦畔1まで続くものではなく、途中で途切れていることから、洪水によって堆積した砂を完全には除去せず、そのまま水田耕作土として利用したもの推測された。水路1の南側の水田では、水路2と足跡を検出したほか、小畦畔2とした畦畔状の高まりを確認したに止まった。12次調査の第3工区でも、同様に畦畔の盛り上がりは確認されたのだが、全体的に保存状態が悪く、畦畔内に埋め込まれた芯材のみを検出した事例もあったことから、洪水などの災害によって、畦畔が流出しているものと考えられる。水田の廃絶時期は、出土した遺物から弥生時代中期後半頃と考えられる。

大畦畔1 水路1の北側に作られた、最大幅2m、高さ40cmの畦畔である。

大畦畔2 水路1の南側に作られた、最大幅1.5m、高さ40cmの畦畔である。

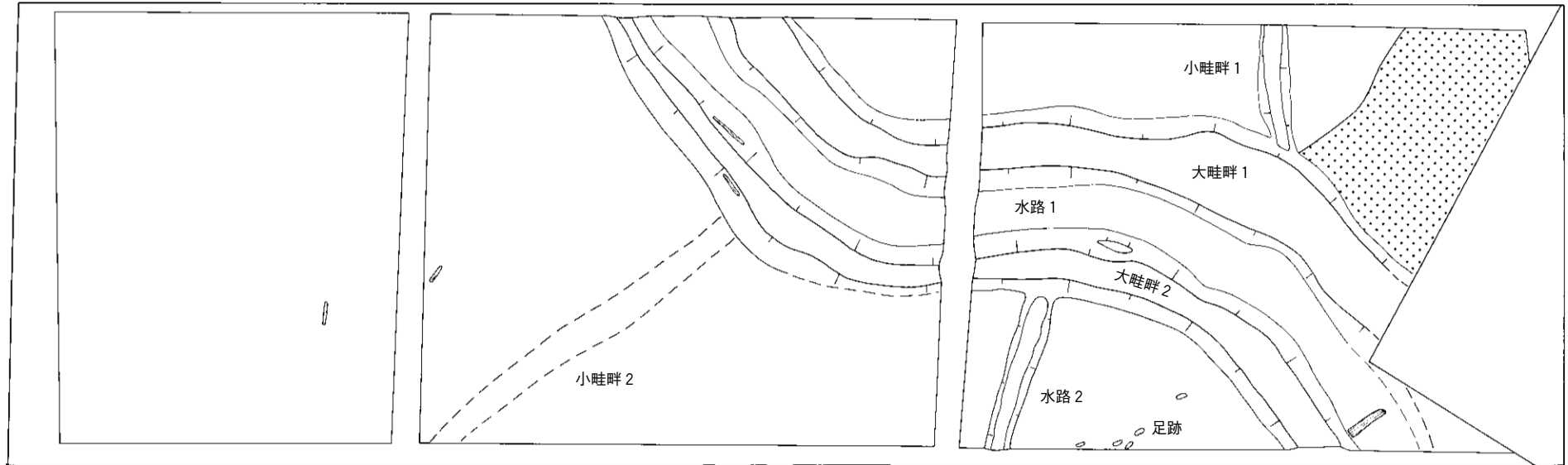
小畦畔1 大畦畔1から北に伸びる、幅50cm、高さ10cmの小規模な畦畔である。

小畦畔2 2区において検出した、大畦畔2から南に向かって伸びる畦畔状の盛り上がりであるが、高さが1cmにも満たないため、第30図では点線によって表現している。恐らく、洪水などの災害によって流出した畦畔の痕跡と考えられる。

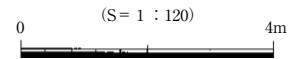
水路1 長さ16mにわたって検出した、東西方向に蛇行しながら伸びる水路である。水田面から約40cm程の盛土をして、大畦畔1・2を作り、内部を水路としている。水路の深さは、大畦畔の上面から水路底まで50cm前後である。水路内の埋土は砂が主体であり、互層状の堆積状況を示すことから、水路内には水が流れていたと考えられる。水路内からの出土遺物は、弥生土器の壺（Po.96、Po.97）や、高坏（Po.98）などであるが、水田面から出土した遺物の時期とは、それほど差が無いものと考えられる。

この水路は、第1次調査で検出された水田へと伸びており、これら水田区画への水の供給を行う用水路であったと推測される。

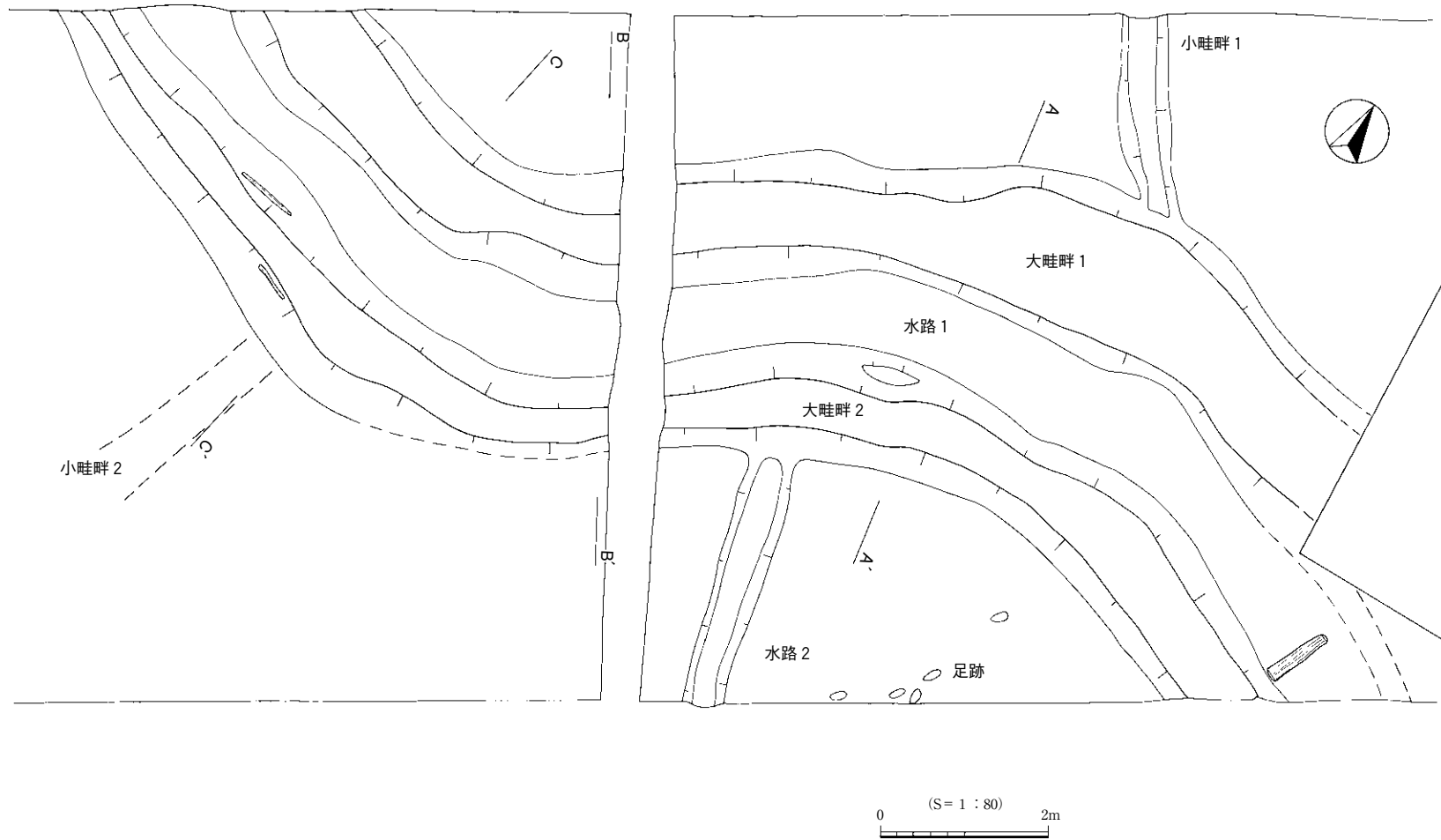
水路2 大畦畔2の南側に伸びる、水路状の落ち込みである。検出した長さは約3m、幅は50cm、深さ10cm程度で、遺構内から遺物は出土しなかった。恐らく、水路2の両岸に小畦畔が存在したのと考えられるが、調査後の測量でも盛り上がりは確認できず、この水路の用途は不明である。



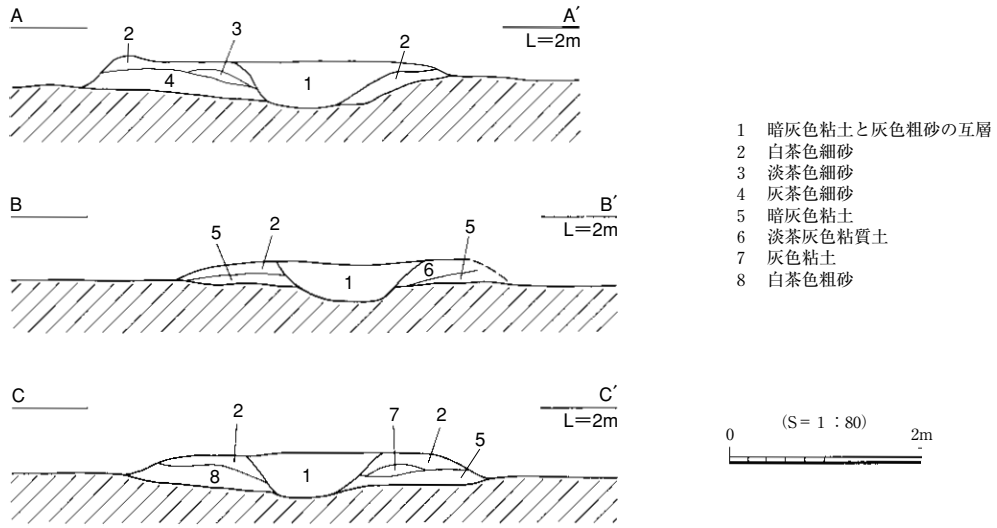
図中の網掛けは、粗砂が被覆している範囲を示す。



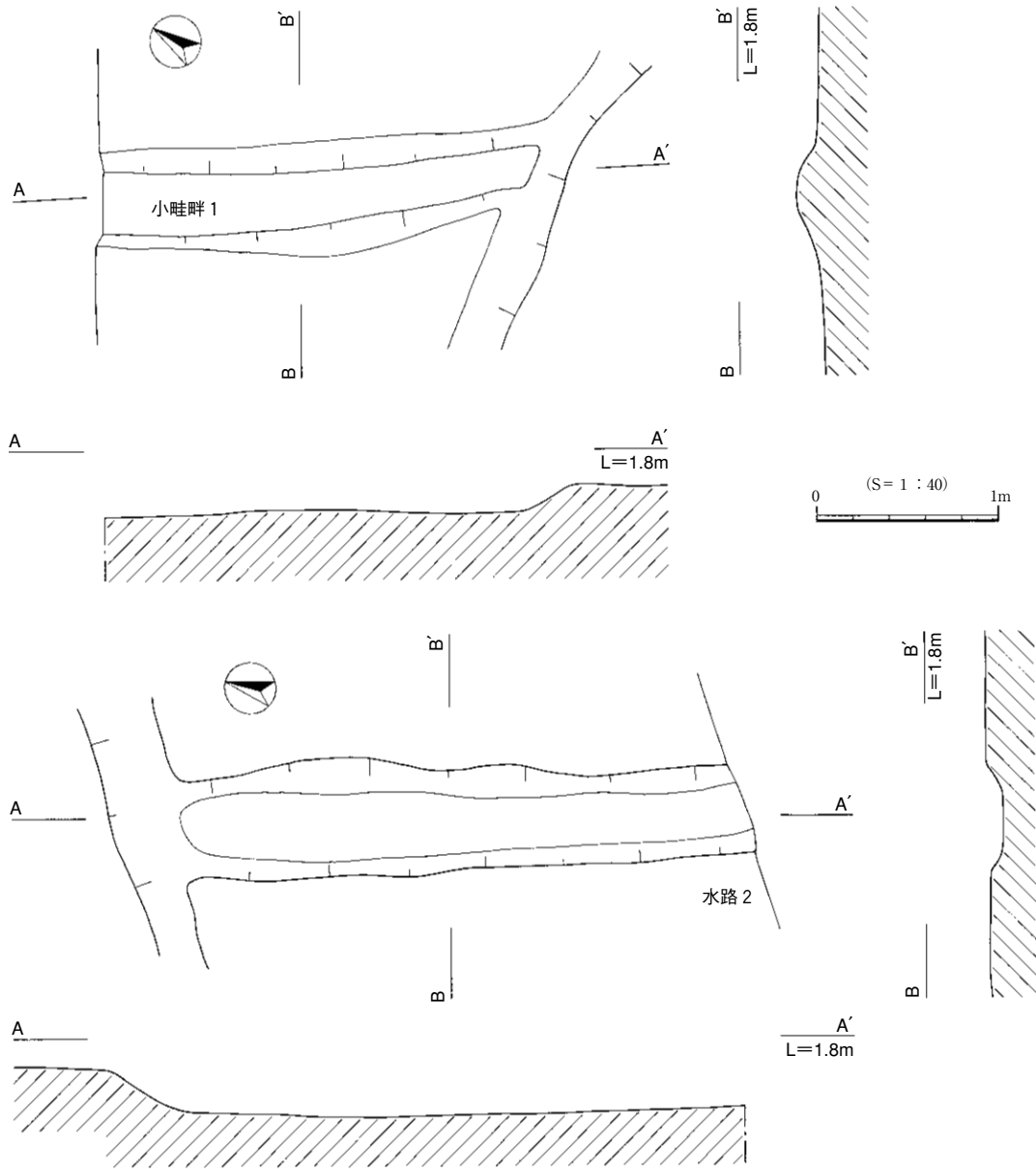
第30図 第1水田面遺構平面図



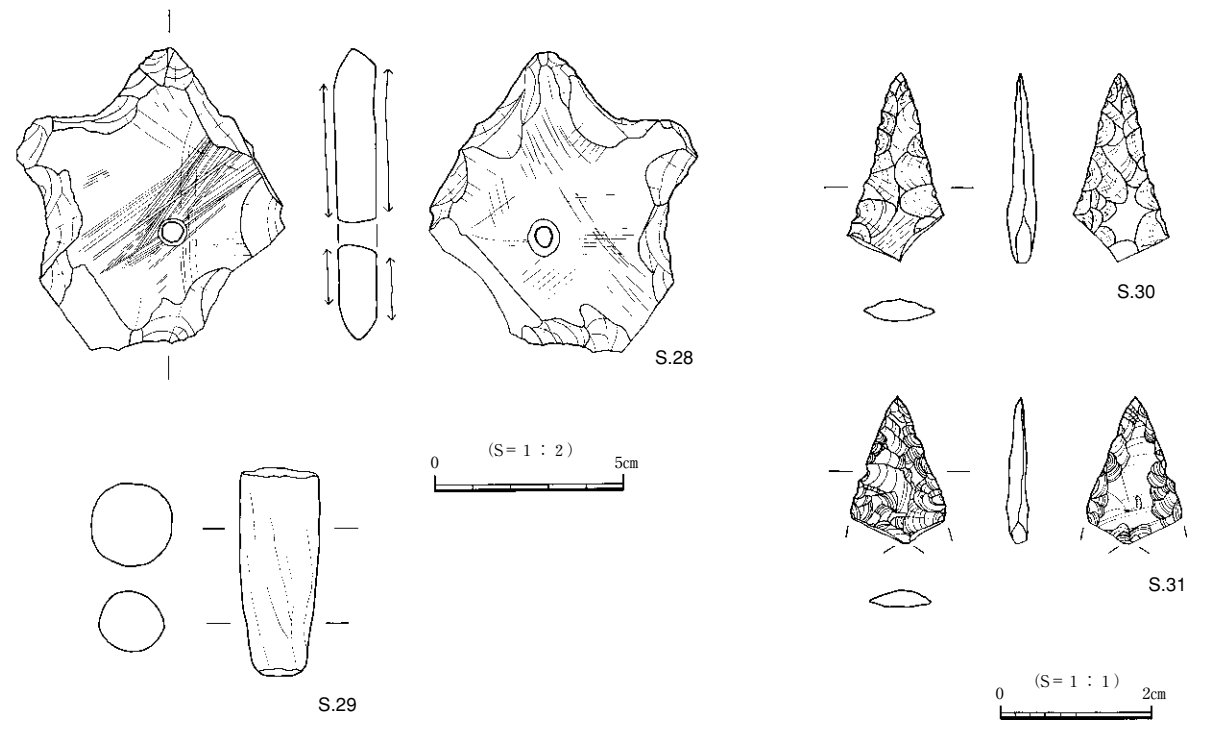
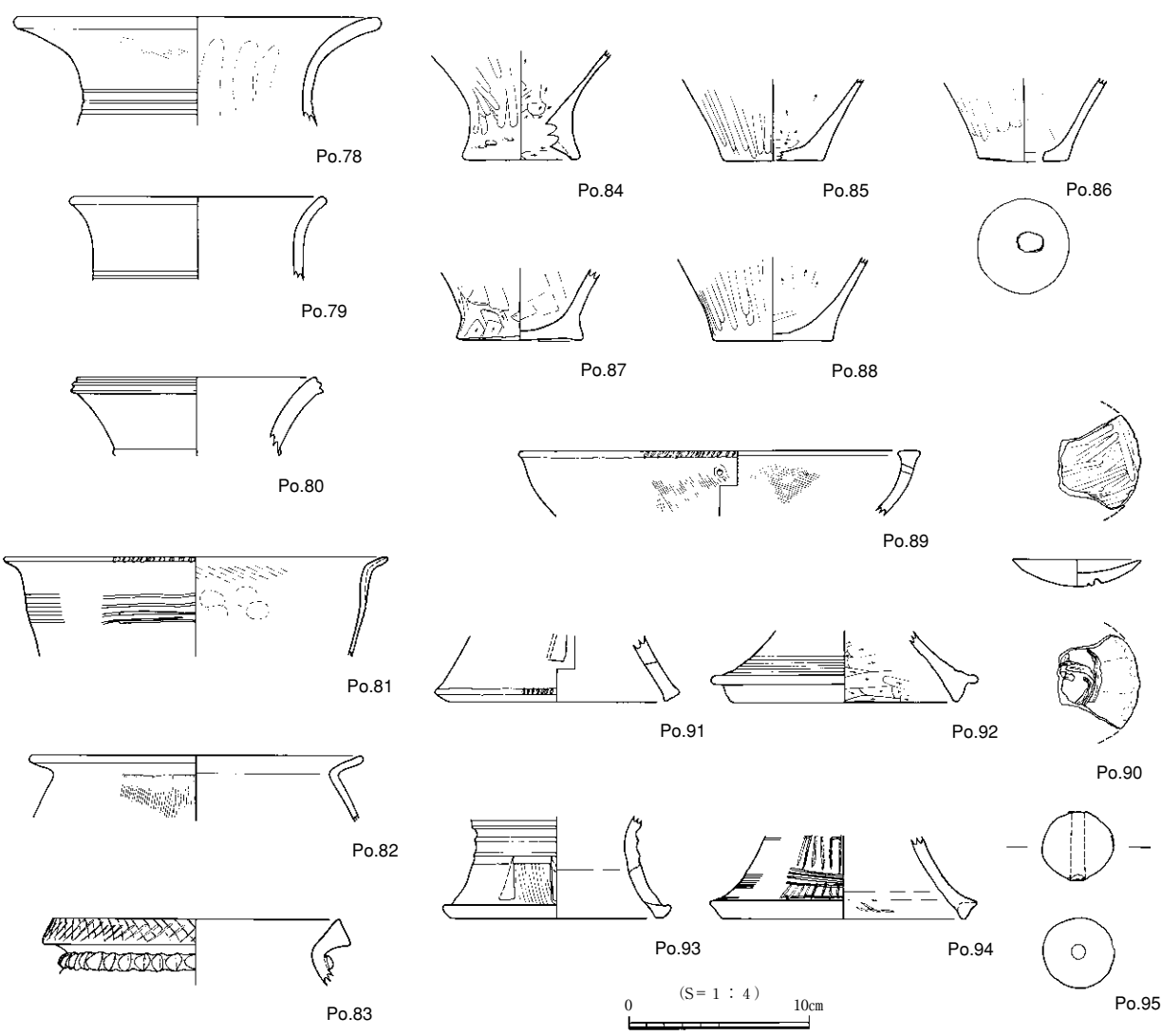
第31図 水路 1 の平面図



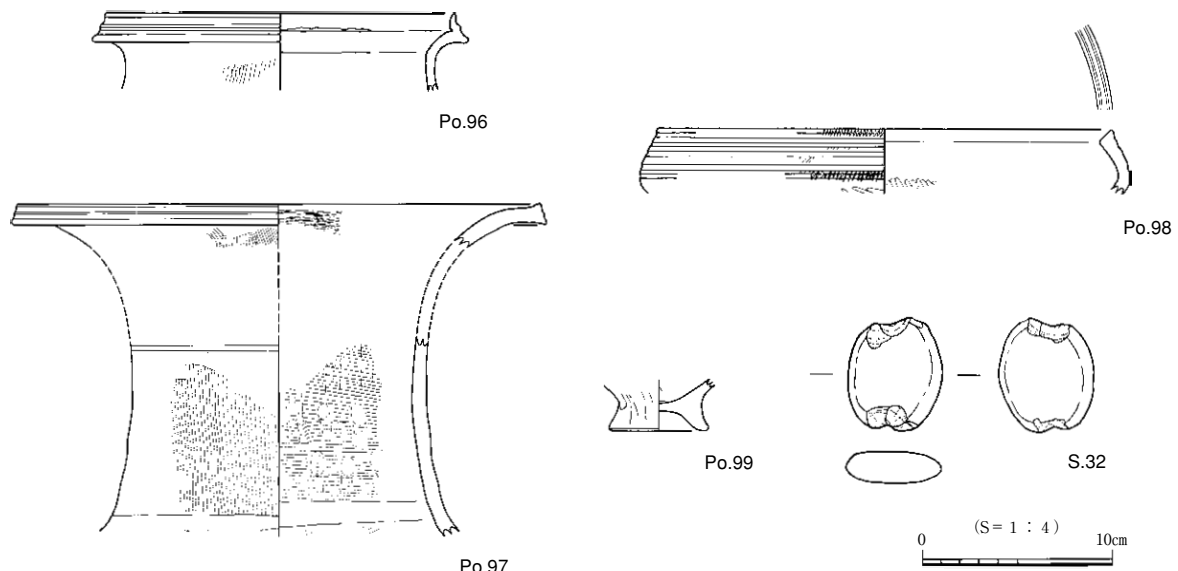
第32図 水路1と大畦畔1・2の断面図



第33図 小畦畔1と水路2の平・断面図



第34図 第1水田面出土遺物



第35図 水路1出土遺物

出土遺物（第34・35図）

Po.78からPo.95、S.28からS.31は、水田の検出作業中に出土したもので、水田面から水田の耕作土中より出土した遺物を含む。時期的には、弥生時代前期から中期後半までの遺物であるが、度重なる耕作により攪乱されているものと考えられる。

Po.78は、口縁がラッパ状に広がる壺である。頸部には3条の凹線が巡る。Po.79は、口縁部が小さく外反する壺で、頸部に1条の凹線が巡る。Po.80は、口縁部が外反する壺で、口縁端部に2条の凹線が巡る。Po.81は、口縁が小さく外反する甕で、頸部に4条の凹線が巡る。Po.82は、口縁が「く」字に曲がる甕で、体部はハケ調整される。Po.83は、甕形土器の口縁部片で、頸部には指頭圧痕貼付突帯が巡り、口縁端部には斜格子紋を施す。Po.84からPo.88は、壺甕類の底部である。Po.86は、焼成後に穿孔されている。Po.89は、高坏の坏部で、口縁部は「T」字状に肥厚し、刺突が施される。また口縁部直下に焼成前の穿孔がある。Po.90は、高坏の坏部の円盤充填粘土である。Po.91は、透かしのある高坏の脚部で、端部には刺突が見られる。Po.92は、端部が突出する高坏の脚部で、外面下部には4条の凹線が巡る。Po.93は、高坏か台付壺の脚部で、3条の突帯と三角形の透かしが見られる。Po.94は、外面にヘラ状工具による刺突と、4条の凹線が巡る高坏の脚部である。Po.95は、直径4cmの土玉である。S.28は、擦痕の残る板石の端部を打ち欠いて星形に整えられた石器で、両面から穿孔されている。やや厚みがあるが、石製紡錘車の未製品か。S.29は、棒状に加工された磨製石器である。端部は欠損しており、用途は不明である。S.30、S.31は黒曜石製の石鏃である。

Po.96からPo.99、S.32は、水路1から出土した遺物である。

Po.96は口縁端部が内傾して立ち上がる壺で、口縁端部に3条の凹線紋が巡る。Po.97は、口縁がラッパ状に広がる壺で、口縁端部に2条、頸部に1条の凹線が巡る。Po.98は内彎気味に立ち上がる高坏で、5条の凹線紋が巡り、ヘラ状工具による刺突が施される。Po.99は、高台を持つ底部片である。S.32は、楕円形の礫の両端部を打ち欠いた石錘である。

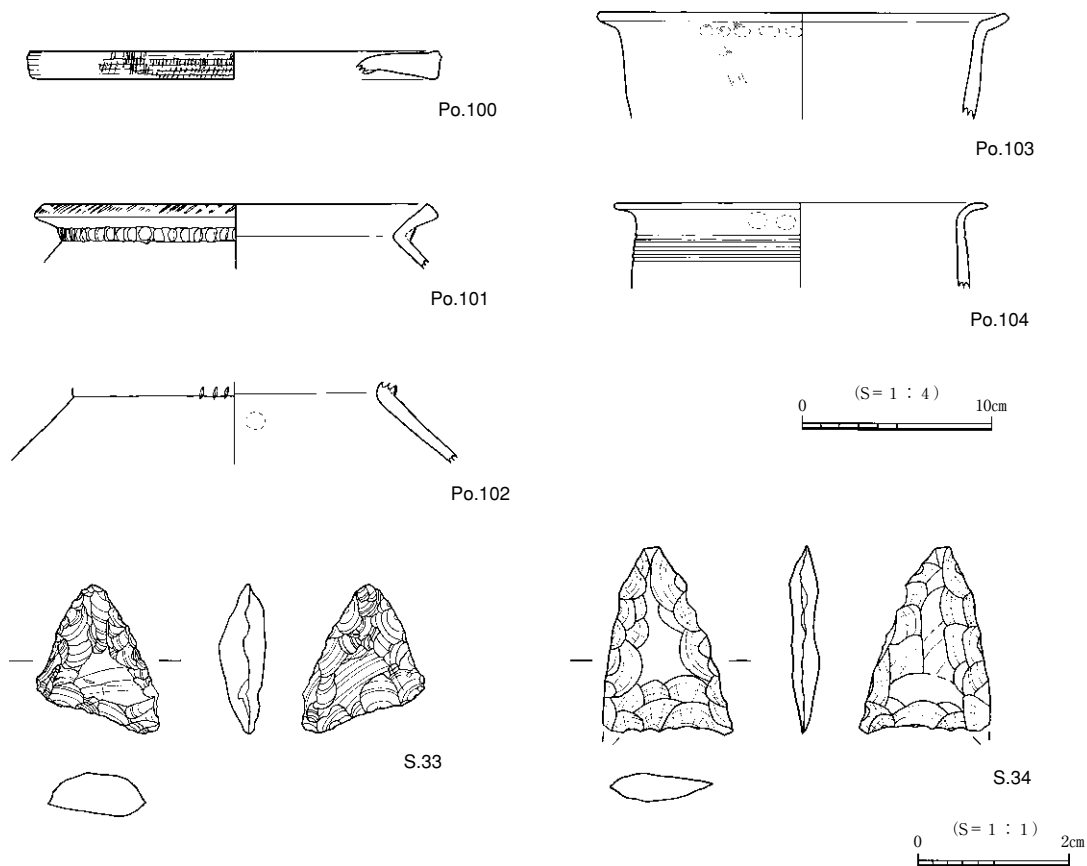
第6節 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物は、調査区の第4層以上の包含層中から出土したものや、調査区の周囲に巡らした排水溝から出土して、層位が明らかでないものを含む。

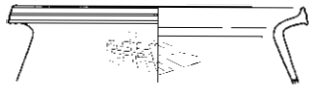
出土遺物 (第36・37図) 第36図のPo.100からPo.104、S.33、S.34は、第4層の洪水堆積砂中から出土した遺物である。Po.100は、弥生時代中期の壺で、口縁部が水平方向に拡張し、端部が肥厚する。口縁端部には、2条の凹線紋が巡り、格子状に刺突が施される。Po.101は、弥生時代中期の甕で、「く」の字状に屈曲する頸部に、指頭圧痕貼付突帯が巡る。口縁端部に、斜め方向の刺突が施される。Po.102も同様の甕であるが貼付突帯の部分で欠損している。Po.103、Po.104は、弥生時代前期の甕で、Po.103は無紋、Po.104は、4条の凹線紋が巡る。S.33は黒曜石、S.34はサヌカイト製の石鏃である。

第37図のPo.105からPo.110、B.1は第1層から第3層において検出したもので、古代から明治時代に堆積した遺物である。Po.111、Po.112と、S.35からS.37は、調査区の周囲に掘削した排水用の溝から出土したもので、帰属時期を明らかにしえないものである。

Po.105は、弥生時代中期後半の甕で、口縁部は「T」字状に小さく拡張し3条の凹線が巡る。Po.106は須恵器の坏身底部で、高台を持つ。奈良時代前期頃のものか。Po.107は、青磁の碗底部、Po.108も青磁の碗で、外面に細線蓮弁紋を模したと思われる波状紋が施される。Po.109は、陶器の鉢で口縁端部がやや玉縁状に肥厚する。18世紀後半以降に、在地で生産されたものと考えられる。Po.110は、肥前系の染付皿で、19世紀代のものと考えられる。S.35、S.36は打欠石錘で、S.36は半分が欠損している。S.37は、黒曜石製の石鏃の先端部である。B.1は「寛永通宝」である。



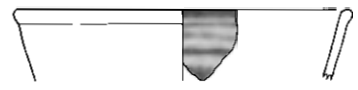
第36図 洪水堆積層出土遺物



Po.105



Po.107



Po.109



Po.106



Po.108



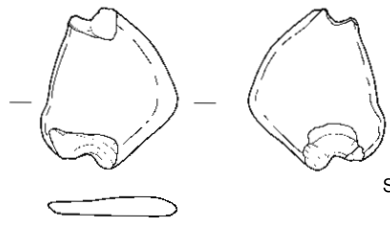
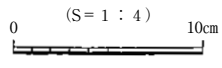
Po.110



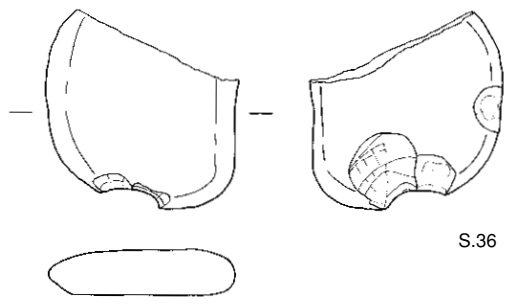
Po.111



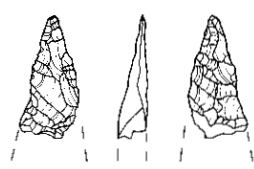
Po.112



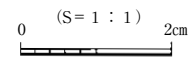
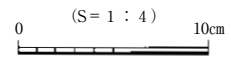
S.35



S.36



S.37



B.1

第37図 遺構に伴わない遺物

第4章 理化学的分析

第1節 目久美遺跡第13次調査の放射性炭素年代測定

(株式会社 古環境研究所)

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により ^{14}C 年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、目久美遺跡第13次調査の縄紋時代グリッドの最下層暗灰色砂質土の堆積年代を明らかにするために、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。測定にあたっては、米国の Beta Analytic Inc. の協力を得た。

2. 試料と方法

測定試料は、グリッド1 (G-1) の最下層暗灰色砂質土 (AK層) において、上層から30cm地点 (試料No.1)、60cm地点 (試料No.2)、90cm地点 (試料No.3)、130cm地点 (試料No.4) より採取された植物遺体4点である。放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

- 1) 蒸留水中で細かく粉碎後、超音波および煮沸により洗浄
- 2) 塩酸 (HCl) により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム (NaOH) により二次的に混入した有機酸を除去
- 3) 再び塩酸 (HCl) で洗浄後、アルカリによって中和
- 4) 定温乾燥機内で80℃で乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、*n*-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデトロン加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を表1にまとめた。

表1 測定試料及び処理

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	G-1, 30cm	植物遺体	酸—アルカリ—酸洗浄	AMS
No.2	G-1, 60cm	植物遺体	酸—アルカリ—酸洗浄	AMS
No.3	G-1, 90cm	植物遺体	酸—アルカリ—酸洗浄	AMS
No.4	G-1, 120cm	植物遺体	酸—アルカリ—酸洗浄	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3. 結果

年代測定の結果を表2に示す。

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際的慣例によりLibbyの5568年を使用した (実際の半減期は5730年)。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することによって得られる年代である。

(4) 暦年代Calendar Age

^{14}C 年代測定値を実際の年代値 (暦年代) に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正する必要がある。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴのU/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新の較正曲線であるIntCal04ではBC 24050年までの換算が可能である (樹木年輪データはBC10450年まで)。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ (68%確率) と 2σ (95%確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。

表2 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	¹⁴ C年代 ¹⁾ (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ²⁾ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 ³⁾ (年BP)	暦年代 (西暦) ⁴⁾
No. 1	228863	4060 ± 40	-27.2	4020 ± 40	交点 : cal BC 2560, BC 2520, BC 2500 1 σ : cal BC 2580~2480 2 σ : cal BC 2630~2470
No. 2	228864	4670 ± 40	-26.6	4640 ± 40	交点 : cal BC 3490, BC 3470, BC 3370 1 σ : cal BC 3500~3430, cal BC 3380~3360 2 σ : cal BC 3520~3350
No. 3	228865	5130 ± 40	-25.9	5120 ± 40	交点 : cal BC 3960 1 σ : cal BC 3970~3940, cal BC 3850~3820 2 σ : cal BC 3980~3900, cal BC 3880~3800
No. 4	228866	6100 ± 50	-28.3	6050 ± 50	交点 : cal BC 4950 1 σ : cal BC 5010~4900, cal BC 4860~4850 2 σ : cal BC 5190~5180, cal BC 5060~4830

4. 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、グリッド1 (G-1) 出土植物遺体のうち試料No. 1 (30cm地点) では4020 ± 40年BP (1 σ の暦年代でBC 2580~2480年)、試料No. 2 (60cm地点) では4640 ± 40年BP (同BC 3500~3430年、BC 3380~3360年)、試料No. 3 (90cm地点) では5120 ± 40年BP (同BC 3970~3940年、3850年~3820年)、試料No. 4 (120cm地点) では6050 ± 50年BP (同BC 5010~4900年、BC 4860~4850) の年代値が得られた。

文献

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

尾寄大真 (2005) INTCAL98からIntCal04へ. 学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo. 3 -炭素年代測定による高精度編年体系の構築-, p. 14-15.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p. 1-36.

第2節 目久美遺跡第13次調査における種実同定

(株式会社 古環境研究所)

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2. 試料

試料は、1グリッドの黒色粘土層（7層・縄文時代晩期から弥生時代から前期）、褐色粘土層（8層）、暗黒灰色粘土層（9-1層）、暗黒灰色粘土層（9-2層）、暗黒灰色砂質土層（9-3層、上位より10cm毎に採取・最下層は縄文時代前期）より採取された計17点である。いずれも水洗選別済みのものである。

3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。試料の9-3層30cm、40cm、50cm、60cm、70cm、80cm、90cm、100cm、120cmは各試料の1/2量の計数を行った。

4. 結果

(1) 分類群

樹木29、草本11の計40分類群が同定される。学名、和名および粒数を表3に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. 種子（破片） イチイ科

茶褐色で長卵形を呈す。表面には縦方向の隆起が走る。断面は円形である。ここでは完形のものは見あたらなかった。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* 毬果 マツ科

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平五角形であり、その中央にはへそがある。

ヤマモモ *Myrica rubra* Sieb. et Zucc. 核（完形・破片） ヤマモモ科

茶褐色で楕円形を呈し、両端がややとがる。一端にへそがあり、表面は粗い。断面は扁平である。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核（半形・破片） クルミ科

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。

ハンノキ属 *Alnus* 種子・果苞 カバノキ科

種子は広卵形や卵形、倒卵形を呈し、扁平である。暗褐色で平滑となる。

コナラ属 *Quercus* 堅果（破片）・幼果・殻斗・ヘソ ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し破片の為、属レベルの同定までである。

幼果は黒褐色で鱗片に覆われた殻斗に包まれている。

殻斗は黒褐色で椀状を呈し、鱗片が覆瓦状に並ぶ。殻斗壁が上端ほど薄くなり、先端がやや内側に向く。

ヘソは円形を呈し、表面には小さな円状の孔がある。

コウゾ *Broussonetia kaiznoki* × *B. papyrifera* 種子 クワ科

明黄赤色で広楕円状円形を呈す。光沢はなく、左右の両側面のうち、一側面は稜になり、次第に厚さをます。この面には幅広い浅い凹みがある。果皮にはいぼ状の低い突起が散生し、ざらつく。

ホオノキ *Magnolia obovata* Thunb. 種子 モクレン科

黒褐色で倒卵形を呈し、下端にへそがある。表面には縦方向の微細な模様がある。

コブシ *Magnolia borealis* Kubo 種子 モクレン科

種子は黒褐色で広卵形を呈す。断面は腎形。下端にへそがある。種皮は薄く堅い。

モクレン属 *Magnolia* 種子（破片） モクレン科

黒褐色で、表面には縦方向の微細な模様がある。この分類群は破片であるため、属レベルの同定までである。

サクラ属サクラ節 *Prunus* sect. *Pseudocerasus* 核 バラ科

黄褐色で楕円形を呈し、下端が大きくくぼむ。側面に縫合線が走る。表面はやや粗い。

バラ科 Rosaceae 核（破片）

黄褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。この分類群は破片であるため、属レベルの同定までである。

キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. 種子 ミカン科

黒色で半円形を呈し、一側面に細長いへそがある。表面には微細な網目模様がある。

イヌザンショウ *Zanthoxylum schinifolium* Sieb. et Zucc. 種子 ミカン科

種子は黒褐色で楕円状球形を呈す。側面に長く深いへそがある。表面にやや大きな網目模様がある。

カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc. 種子 ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面に長く深いへそがある。表面には大きい網目模様がある。

サンショウ属 *Zanthoxylum* 種子 ミカン科

黒色で楕円形を呈し、表面には網目模様がある。破片であるため、属レベルの同定までである。

センダン *Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miq. 核（完形・破片） センダン科

黒褐色で楕円形を呈し、一端は円孔となる。縦に5本の発達した稜が走る。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell. et Arg. 種子 トウダイグサ科

黒色で球形を呈し、「Y」字状のへそがある。表面にはいぼ状の突起が密に分布する。

モチノキ *Ilex integra* Thunb. 核 モチノキ科

浅赤黄色で楕円形を呈し、V字状の溝があり、縁は鋭く、光沢はない。鋭い隆条や凹凸が多く、粗面。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 種子（破片） トチノキ科

黒色と茶褐色の部分とに分かれ、黒色の部分に光沢がある。

ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. 種子 (破片) ムクロジ科

灰黒色で円状球形を呈し、線形のヘソがみられる。

ブドウ属 *Vitis* 種子 ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

ヤブツバキ *Camellia japonica* L 果実 (破片) ツバキ科

果実は三片に分かれたものである。黒色で楕円形を呈し、両端がややとがる。

ヒサカキ *Eurya* Thunb. 種子 ツバキ科

種子は心臓形を呈する。背面は長楕円状・狭三角形など種々な形がある。どの形もへその方に薄い。へそを中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる。

ミズキ *Cornus controversa* Hemsley 核 ミズキ科

黒褐色で横長の楕円形を呈す。表面には縦方向に深い筋が走る。

クマノミズキ *Cornus brachypoda* C.A. Mey. 核 ミズキ科

淡褐色で球形を呈す。表面に一本の広い溝がめぐり、数本の細い縦筋が走る。

エゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc. 核 (完形・破片) エゴノキ科

黒褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面に3本の溝が走る。

ハクウンボク *Styrax obassia* Sieb. et Zucc. 核 (完形・破片) エゴノキ科

黒褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面に3本の浅い溝と、低い稜がある。

ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Blume ex graedn 核 スイカズラ科

黄褐色～茶褐色で楕円形を呈す。一端にへそがある。表面には横方向の隆起がある。

[草本]

カワツルモ *Ruppia maritima* L. 果実 ヒルムシロ科

漆黒で左右の半円状の浅い凹みは淡褐白色。先端に1個の太い刺がある。

ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起がある。

スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

黒褐色で先端がとがる卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

ツヅラフジ *Sinomenium acutum* Rehd. et Wils. 種子 ツヅラフジ科

馬蹄形を呈する。中央部の中心に小さい穴を持つ大型凹みがある。凹みの縁は高く、腎臓状円形である。全縁は狭翼状の稜になり、中心部の腎臓状円形の縁とは互いに連結する隆条が直角に列生する。

ヤブガラシ *Cayratia japonica* Gagn. 種子 ブドウ科

黒褐色で広倒卵形を呈し、基部は嘴状に細かく尖る。背面の正中線上は浅い帯状の凹みがあり、その両面はやや鋭い稜状隆条が5～6個ずつ直角に並ぶ。光沢はない。

セリ科 Umbelliferae 果実

淡褐色～黄褐色で楕円形を呈す。果皮はコルク質で厚く弾力があり、片面に3本の肥厚した隆起が見られる。断面は半円形である。

ナス科 Solanaceae 種子

黒褐色で円形を呈す。表面にはやや大きい網目模様がある。

キク科 Compositae 果実 キク科

茶褐色で楕円形を呈し、両端は切形となる。表面には縦方向に8本程度の筋が走る。

(2) 種実群集の特徴

1) 黒色粘土層（7層・縄文時代晩期から弥生時代から前期）

センダン1、アカメガシワ1、エゴノキ2、ホタルイ57、スゲ属3、カヤツリグサ科8、タデ属2、セリ科1が同定された。

2) 褐色粘土層（8層）

アカメガシワ1、モチノキ1、カワツルモ16、ホタルイ属10、スゲ属2、カヤツリグサ科1、タデ属1が同定された。

3) 暗黒灰色粘土層（9-1層）

マツ属複維管束亜属3、ヤマモモ12、オニグルミ1、ハンノキ属1、コナラ属7、カラスザンショウ6、アカメガシワ6、モチノキ10、トチノキ1、ブドウ属4、ヒサカキ1、ミズキ1、クマノミズキ6、エゴノキ1、カワツルモ46、ノブドウ1が同定された。

4) 暗黒灰色粘土層（9-2層）

マツ属複維管束亜属3、ヤマモモ41、ハンノキ属7、コナラ属9、コウゾ1、サクラ属サクラ節4、バラ科1、イヌザンショウ1、カラスザンショウ37、アカメガシワ8、モチノキ21、ブドウ属4、ミズキ3、クマノミズキ47、ノブドウ1が同定された。

5) 暗黒灰色砂質土層（9-3層）

・10cm

マツ属複維管束亜属2、ヤマモモ16、オニグルミ2、ハンノキ属4、コナラ属4、ホオノキ1、サクラ属サクラ節7、カラスザンショウ2、アカメガシワ6、モチノキ17、トチノキ1、ブドウ属6、ミズキ3、クマノミズキ30、ハクウンボク2、ノブドウ1が同定された。

・20cm

マツ属複維管束亜属2、ヤマモモ15、オニグルミ3、ハンノキ属11、コナラ属5、ホオノキ1、サクラ属サクラ節8、キハダ1、カラスザンショウ10、アカメガシワ5、モチノキ40、トチノキ1、ブドウ属5、ミズキ4、クマノミズキ43、ハクウンボク1、ノブドウ1、ヤブガラシ1が同定された。

・30cm

ヤマモモ13、ハンノキ属5、コナラ属8、ホオノキ1、サクラ属サクラ節4、イヌザンショウ2、カラスザンショウ23、センダン4、アカメガシワ8、モチノキ56、トチノキ1、ブドウ属3、ミズキ2、クマノミズキ33、エゴノキ1、ノブドウ1、ヤブガラシ3、ナス科1が同定された。

・40cm

マツ属複維管束亜属 3、ヤマモモ14、オニグルミ 2、ハンノキ属 4、コナラ属 2、ホオノキ 1、サクラ属サクラ節 5、キハダ 1、カラスザンショウ 7、センダン 7、アカメガシワ 3、モチノキ32、トチノキ 3、ムクロジ 1、ブドウ属 1、ヤブツバキ 2、ミズキ 1、クマノミズキ33、エゴノキ 1、ハクウンボク 1、ノブドウ 1 が同定された。

・50cm

ヤマモモ 5、ハンノキ属 4、コナラ属 3、コウゾ 1、サクラ属サクラ節13、キハダ 2、カラスザンショウ17、アカメガシワ12、モチノキ70、ブドウ属 8、ミズキ 3、クマノミズキ43、ノブドウ 2、ヤブガラシ 3 が同定された。

・60cm

マツ属複維管束亜属 3、ヤマモモ17、オニグルミ 3、ハンノキ属 3、コナラ属 5、ホオノキ 1、サクラ属サクラ節 7、カラスザンショウ13、センダン 5、アカメガシワ11、モチノキ54、ブドウ属 6、ミズキ 5、クマノミズキ47、ハクウンボク 5、ニワトコ 1、ノブドウ 3 が同定された。

・70cm

カヤ 1、マツ属複維管束亜属 5、ヤマモモ14、オニグルミ 3、ハンノキ属 6、コナラ属 6、ホオノキ 1、サクラ属サクラ節16、カラスザンショウ39、センダン 6、アカメガシワ 9、モチノキ79、ブドウ属 4、ヤブツバキ 2、ミズキ 3、クマノミズキ50、エゴノキ 5、ハクウンボク 1、ノブドウ 2、ヤブガラシ 3 が同定された。

・80cm

マツ属複維管束亜属 3、ヤマモモ11、オニグルミ 2、ハンノキ属 3、コナラ属 5、コブシ 1、サクラ属サクラ節13、イヌザンショウ 1、カラスザンショウ 9、センダン 3、アカメガシワ 8、モチノキ 69、トチノキ 1、ブドウ属 3、ミズキ 5、クマノミズキ41、エゴノキ 7、ヤブガラシ 2 が同定された。

・90cm

マツ属複維管束亜属 4、ヤマモモ14、ハンノキ属 3、コナラ属 9、ホオノキ 1、サクラ属サクラ節 15、カラスザンショウ32、センダン 3、アカメガシワ17、モチノキ43、ブドウ属 1、ミズキ 5、クマノミズキ45、エゴノキ 6、ツヅラフジ 1 が同定された。

・100cm

マツ属複維管束亜属 5、ヤマモモ11、オニグルミ 2、ハンノキ属 3、コナラ属 8、サクラ属サクラ節18、カラスザンショウ40、センダン 1、アカメガシワ16、モチノキ41、ブドウ属 1、ミズキ 3、クマノミズキ25、エゴノキ 6、ヤブガラシ 1 が同定された。

・110cm

カヤ 2、マツ属複維管束亜属 3、ヤマモモ18、オニグルミ 3、ハンノキ属 4、コナラ属 7、サクラ属サクラ節10、カラスザンショウ20、センダン 1、アカメガシワ12、モチノキ30、ブドウ属 3、ミズキ 4、クマノミズキ29、エゴノキ 2 が同定された。

・120cm

マツ属複維管束亜属 2、ヤマモモ 9、オニグルミ 3、ハンノキ属 7、コナラ属 6、モクレン属 1、サクラ属サクラ節11、カラスザンショウ35、サンショウ属 1、アカメガシワ30、モチノキ33、ブドウ属 4、ヤブツバキ 1、ミズキ 6、クマノミズキ33、エゴノキ 3 が同定された。

・130cm

マツ属複維管束亜属 3、ヤマモモ 6、オニグルミ 4、ハンノキ属 6、モクレン属 1、サクラ属サクラ節 6、カラスザンショウ 12、サンショウ属 1、アカメガシワ 15、モチノキ 27、ブドウ属 6、ヤブツバキ 1、ミズキ 5、クマノミズキ 17、ハクウンボク 3 が同定された。

5. 種実群集から推定される植生と環境

1) 黒色粘土層 (7層)

ホタルイ属が最も多く、カヤツリグサ科、スゲ属、タデ属、セリ科がこれに続く。全体に草本が多いが、いずれの草本も抽水植物である。こうしたことから、本層ではこれらの草本が繁茂し、1m以浅の沼沢地の環境が示唆される。周辺には樹木は少なかったと推定される。

2) 褐色粘土層 (8層)

草本が多く、カワツルモとホタルイ属を主に、スゲ属、カヤツリグサ科、タデ属が生育していた。カワツルモはやや流れのある汽水域に主に生育することから、本層では汽水性のやや流れのある沼沢地の環境が示唆される。周辺には樹木は少なかったと推定される。

3) 暗黒灰色粘土層 (9-1層)

カワツルモが多く生育し、やや流れのある汽水性の沼沢地の環境が示唆されるが、近隣には森林が分布し、ヤマモモ、モチノキ、コナラ属、カラスザンショウ、アカメガシワ、クマノミズキなどが生育していた。ヤマモモは温暖な沿岸部に分布し比較的人為干渉に強く、モチノキ、コナラ属、カラスザンショウ、アカメガシワ、クマノミズキも人為干渉に強く、アカメガシワは二次林種である。こうしたことから、人為干渉を強く受けた森林の分布が示唆される。

4) 暗黒灰色粘土層 (9-2層)

ノブドウ以外はすべて樹木であり、森林状態が示唆される。本層は森林土壌の腐植によって形成されたと推定される。ヤマモモ、クマノミズキ、カラスザンショウ、モチノキが多く、人為干渉を受けた温暖な沿岸の森林であったと推定される。他のコナラ属、アカメガシワ、ハンノキ属、ブドウ属、サクラ属サクラ節、マツ属複維管束亜属、ミズキなども二次林種であり、自然度は高くはない。草本ではノブドウが同定された。人為干渉のある林縁などの草本であるが食用にはならない。

5) 暗黒灰色砂質土層 (9-3層・最下層は縄文時代前期初頭)

13層準あるが、主要構成と組成の変化はなく同一の群集である。樹木がほとんどであり、多い分類群から、モチノキ、クマノミズキ、カラスザンショウ、アカメガシワ、ヤマモモ、サクラ属サクラ節、ハイノキ属、ミズキ、コナラ属、マツ属複維管束亜属、センダン、オニグルミ、エゴノキと続く。モチノキ、クマノミズキ、カラスザンショウ、アカメガシワ、サクラ属サクラ節、ハイノキ属、ミズキ、コナラ属、マツ属複維管束亜属はいずれも自然度が高くなくても分布する樹木で、特にカラスザンショウ、アカメガシワ、ミズキ、コナラ属、マツ属複維管束亜属は人為干渉を受けた森林に多く、二次林種にもなる。ヤマモモとセンダンは温暖な沿岸部にオニグルミとエゴノキ他にトチノキは谷筋や沢筋の水辺に生育する。照葉樹としては、他にヤブツバキ、ヒサカキがあるが少ない。本層では、モチノキ、クマノミズキ、カラスザンショウ、アカメガシワの主とする人為干渉を受けた森林とヤマモモやセンダンの温暖な沿岸部の森林が主に分布し、谷筋や沢筋の水辺にはオニグルミとエゴノキなどが分布していた。

6. まとめ

黒色粘土層（7層・縄文時代晩期から弥生時代から前期）、褐色粘土層（8層）、暗黒灰色粘土層（9-1）では水生植物が多く、沼沢地の環境が示唆された。黒色粘土層（7層・縄文時代晩期から弥生時代から前期）ではホタルイ属を主とする抽水植物が繁茂し、1 m以浅の沼沢地の環境であったと推定された。褐色粘土層（8層）、暗黒灰色粘土層（9-1層）では、カワツルモが生育し、汽水性のやや流れのある沼沢地の環境が示唆された。なお、暗黒灰色粘土層（9-1層）では、温暖な沿岸部に生育するヤマモモやカラスザンショウと人為干渉の強いモチノキ、コナラ属、アカメガシワ、クマノミズキなどが生育し、近隣に人為干渉を強く受けた森林が分布していたと推定された。

暗黒灰色粘土層（9-2層）と暗黒灰色砂質土層（9-3層・最下層は縄文時代前期初頭）では、モチノキ、クマノミズキ、カラスザンショウ、アカメガシワを主とする人為干渉を受けた森林と、ヤマモモなどの温暖な沿岸部の森林が主に分布していたと推定された。

参考文献

- 笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.
- 南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実．月刊考古学ジャーナルNo.355，ニューサイエンス社，p.18-22.
- 南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.
- 渡辺誠（1975）縄文時代の植物食．雄山閣，187p.

第5章 総括

第1節 出土縄紋土器の編年観

今回の調査地点は、平成18年度に実施した第12次調査地点の中間に位置しており、出土した縄紋土器の様相もほぼ同様のものと考えられる。年代的には、前期初頭の西川津式の段階から認められ、羽島下層Ⅱ式、北白川下層Ⅰb式、北白川下層Ⅱb式（磯の森式）、北白川下層Ⅲ式（里木Ⅰ式）、大歳山式へと続き、中期には船元Ⅲ式期まで存続する。そして、中期の後半段階で一端断絶した後、後期の元住吉山期から晩期前半頃までの資料が再び見られるようになる。

具体的な様相を見てみると、前期初頭の西川津式の土器は、Po.1が屈曲する口縁部の直下に刺突紋を施している。Po.2も口縁直下に板状工具による刺突が施されていて、西川津A式に並行するものと考えられた。また、Po.3～5は、砲弾型の深鉢であるが、緩く外反する口縁端部に刺突を施すもので、内面には貝殻条痕が残るが、外面はナデによって調整される点に特徴があり、西川津式のバリエーションと考えた。続く羽島下層Ⅱ式期の遺物は、貝殻腹縁を利用した工具による刺突を施すPo.11や、半裁竹菅の内側を利用したPo.12、板状工具による刺突を施すPo.9が相当する。また、「C」字状の爪形紋を施すPo.10と、逆「C」字状の爪形紋を施すPo.6～8は、北白川下層Ⅰb式に位置付けられる。これら前期土器と時期的に並行すると考えられるのが、内外面を貝殻条痕のみで調整する無紋の粗製土器で、Po.13～Po.45までが該当し、出土した縄紋土器の大半を占めている。器形的には、2ないし4単位の波状口縁をなす丸底の深鉢と小形の鉢、砲弾型で直線的な口縁を持つ深鉢などのほかに、Po.45のような胴部が膨らむものなど、かなりのバリエーションがある。また、底部についても丸底が主体ではあるが、尖底になるものや平底の個体も存在するなど複雑な様相を呈しているため、今回はこうした状況を整理する段階には至らなかったが、羽島下層Ⅱ式期から条痕紋が姿を消す北白川Ⅱb式期まで存続するものと考えられる。

北白川下層Ⅱb式（磯の森）期の土器は、砲弾型の器形で、外面の上半部に爪形の刺突紋と下半部に羽状縄紋を施紋するもので、目久美遺跡では1次調査や12次調査、14次調査で出土例が見られる。今回の調査では、爪形紋が消滅し、外面に「RL」縄紋を施すPo.55やPo.56、また外面上半に太形凹線紋を施すPo.58が相当するものと考えた。また、Po.58は渦巻状の紋様によって構成されており、山陰地方の資料では類似するものが見られない土器である。

続く月崎下層式期の土器は、今回の調査では明確な資料を得ることができなかったが、隣接地を調査した第12次調査では出土例が見られることから、目久美遺跡全体のなかでは継続する型式と考えられる。

北白川下層Ⅲ式（里木Ⅰ）期の土器は、Po.61が胴部のみの破片であるが、キャリパー形の器形をなすものであり、縄紋地に突帯を貼り付けているが、突帯の周囲に粘土がはみ出す特徴から、この型式に相当すると考えた。

続く大歳山式の資料は、突帯に爪形の刺突紋が施されるPo.59、Po.60があげられる。Po.60は、口縁端部がそれほど拡張しないが、紋様構成から大歳山式土器の範疇に含まれるものと考えた。Po.60も同様であるが、Po.62のように縄紋地のみで突帯を持たないものも出土している。

中期の土器に関しては、条痕紋土器と縄紋地の土器が混在するものと考えられる。外面全体に「LR」縄紋を施すPo.51は、キャリパー状の器形で、口縁部は緩い波状を呈し、端部は内傾しながら折り返す。船元Ⅰ式期に相当すると考えられる。Po.52も外面に縄紋地で、口縁端部にも縄紋が施される。条痕紋のグループは、Po.46が体部を縦方向に条痕調整するもので、Po.47は口縁部がやや肥厚する。どちらも船元Ⅰ式期のものであろう。Po.49は平底の底部で、擬縄紋が施されている。

Po.50は、花形に開く口縁を持つ土器で、竹管状の工具により紋様を施している。船元Ⅲ式期のものと考えられる。

後期の土器は、後期後半段階の土器が主体で、縁帯紋系の土器と無紋の粗製土器が見られた。Po.64は、胴部に板状工具による刺突を施す深鉢で、磨消縄紋を省略したものであろう。元住吉山式期のものと考えられる。Po.65は、内外面に横方向のミガキ調整を行うもので、口縁端部と外面の下半部には縄紋が施されている。Po.66～69は無紋の粗製土器で、Po.66は外面にケズリの痕跡が残る。Po.70は注口土器の注ぎ口と見られる破片である。鳥取県内では、北栄町の島遺跡や琴浦町の太一垣遺跡などで出土しているが、類例は少なく、注目すべき遺物と考えられる。

以上、出土した縄紋土器の型式をまとめた。目久美遺跡では、これまでの調査によって、数多くの資料が得られており、山陰地方における縄紋文化を研究するにあたって、重要な遺跡であると考えられる。しかしながら、これらの土器群は層位的に、あるいは型式ごとのまとまりを持って出土したものではなく、打欠石錘と共に海成層中から検出されたものであり、小破片の個体のなかには波の侵食などによって2次的に再堆積したものも含まれていると考えられる。今後は、過去に出土した資料の再整理を進めて、縄紋土器の出土状況も含めて議論を行い、編年を構築する必要がある。

表1 山陰地方の縄紋時代前期の土器型式

鳥根県		鳥取県	瀬戸内	近畿
西部	東部			
?	長山馬籠			
?	西川津		羽島下層Ⅰ	羽島下層Ⅰ
轟4	羽島下層Ⅱ・北白川下層Ⅰa		羽島下層Ⅱ	羽島下層Ⅱ
			羽島下層Ⅲ	北白川下層Ⅰa
(轟5)	北白川下層Ⅰb・Ⅱa			北白川下層Ⅰb
			磯の森	北白川下層Ⅱa
(野口・阿多)	北白川下層Ⅱb			北白川下層Ⅱb
(曾畑)	月崎下層		彦崎Z1	北白川下層Ⅱc
?	北白川下層Ⅲ		彦崎Z2(里木Ⅰ)	北白川下層Ⅲ
?	大歳山		田井	大歳山

柳浦2001年を基に作成。

第2節 弥生時代中期の水田遺構

弥生時代中期水田の調査では、調査区の中央を水路が蛇行しながら流れていることが判明し、下流に存在する水田への水の供給を行うための用水路の存在が確認された。この水路に関しては、平成17年度に調査した、第12次調査2工区で検出した水路と一連のものであり、第1次調査でもここに繋がる水路が検出されている。これらの水路を繋ぎ合わせると、長さ50m以上の規模に復元することが可能で、これまでに目久美遺跡で見つかった弥生中期水田の用水路としては、最長規模のものとなった。

第38図に示したのが、第1次調査の水田と、第12・13次調査の水田を繋ぎ合わせた平面図である。この図を基に水田の検出状況を比較してみると、第1次調査では良好に畦畔が検出されているのに対して、第13次調査地点よりも西側の水田では、畦畔が検出できない事例が多くあったことがわかる。特に顕著な事例としては、第12次調査3工区の東側では、畦畔の芯材として埋められていた木材が露出している状況が確認されており、洪水などの被害によって水田が破壊され、その後復旧されることなく放置されていたものと推察された。

そのため、今回検出された水路1を挟んで、水田の様相が一変するものと考えられる。また、第13次調査地点で畦畔を検出したのは面のみであり、複数面の水田跡を確認した第1次調査地点とは、開発状況にも違いがあったことが分かる。

次に、目久美遺跡の水田区画の形を見てみると、1次調査地点では東側に不整形の区画を持つ水田が多いのに対して、北西部の水田では面積が大きくなり、方形区画を志向するものが多くなっている。これについては、東側の水田区画が微高地に接した傾斜地に立地していることが原因と考えられ、立地環境によって水田区画の形を変えて、最小の労力で水の供給や排水に便利な水田の形を造っていたと推測される。

このことから、第12次調査で見つかったような、不整形の水田や小区画の水田が広がる原因も、同様に標高の高い傾斜地に位置しているためであろう。このため、最も標高の低くなる水路1の西側を洪水が直撃し、畦畔が流失したものと考えられる。

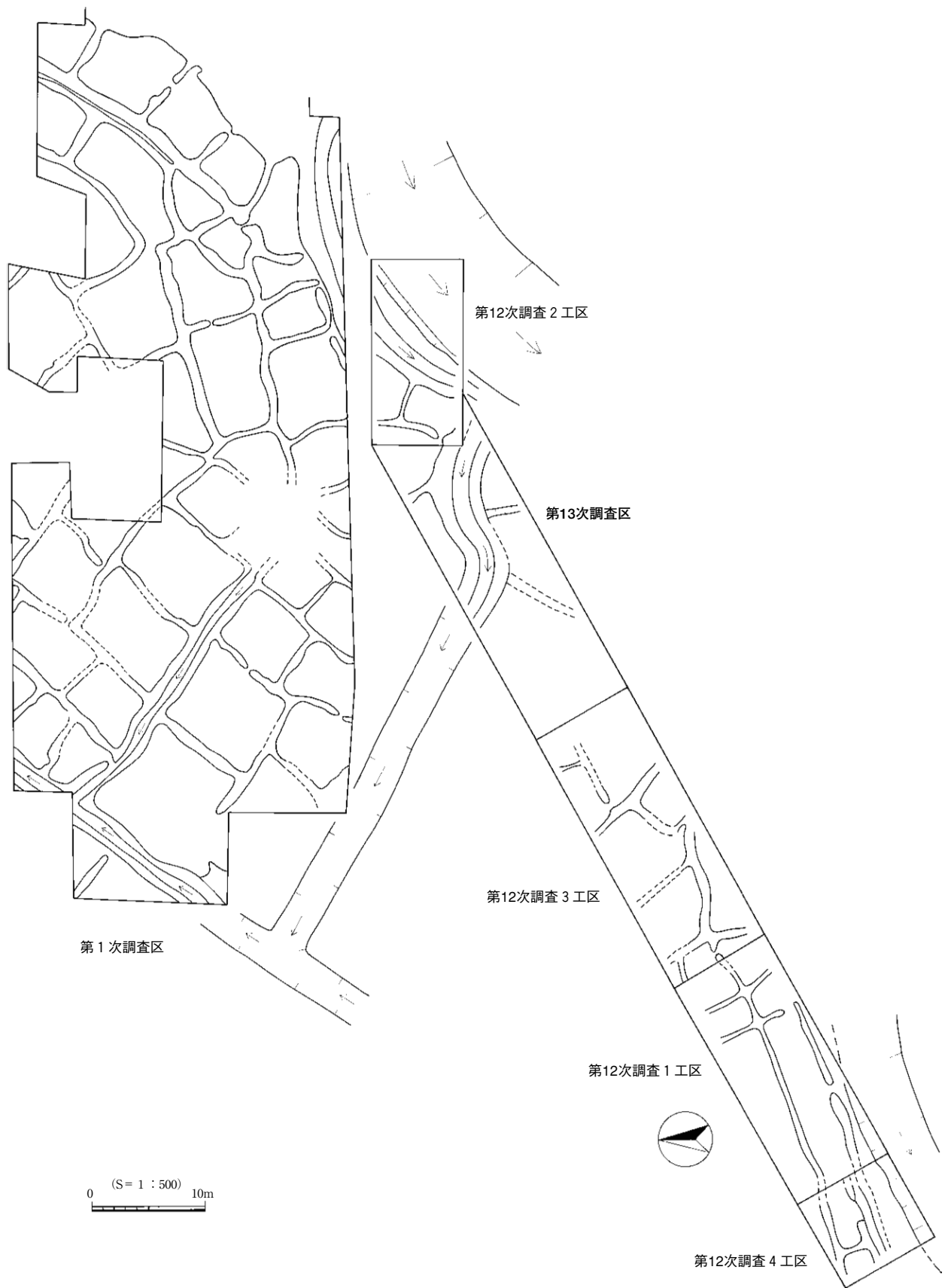
第3節 自然科学分析

自然科学分析では、縄紋時代層のグリッドから出土した種実の同定と、グリッドの堆積物の年代測定を実施した。

海成層の堆積土からサンプルを採取して行った年代測定では、波の堆積作用によって徐々に砂質土から粘土へと変化していく状況が窺えたが、基本的な層位に大きな攪乱は無く、年代ごとに堆積しているものと考えられた。

縄紋時代の堆積層において設定したグリッドから出土した種実の同定調査では、縄紋時代前期から中期の段階で人為干渉を受けた森林に多く見られるモチノキやコナラ属などが検出されており、目久美遺跡周辺の森の様相を知る手がかりとなった。

縄紋時代後期から晩期の土器が出土している8層や9-1層では、汽水性のカワツルモが検出され



第38図 目久美遺跡の弥生時代中期後半の水田

ており、やや流れのある沼沢地の環境が推測されている。また、樹木の種実が少なく、草本類が主体となっている。縄紋時代晩期よりも新しい時期に形成された足跡は、こうした干潟に生育する生物の採取（貝類やカニ・エビなどの甲殻類）の採集に伴って残された可能性も考えられることから、今後こうした水生生物の生育環境についても分析を進める必要がある。

第7層の黒色粘土層では、ホタルイ属やカヤツリグサ、セリ科といった抽水植物が多く、沼沢地の環境が推測された。本層は、これまで明確な水田遺構は確認されていなかったが、第8次調査で実施した分析では、プラントオパールが含まれていることが確認されており、水田耕作土としても使用されていた時期があるものと考えられていた。今回の調査では水田に関わる直接的な証拠は得られなかったが、プラントオパール分析や、花粉分析を併用することで、将来的には、黒色粘土層中でも水田遺構の存在が確認されるものと考えられる。

第4節 結語

今回の調査結果を過去の成果と比較すると、出土遺物の点数が減少する傾向にあることが判明した。これは、本調査地が日久美遺跡の集落からやや離れた位置にある生産域を調査した結果であると考えられる。恐らく、今回の調査した地点のさらに南側に縄紋時代、弥生時代の日久美遺跡の集落本体が包蔵されているものと推察される。こうした集落の未調査部分については、現在建設中の道路が開通した後に、周辺地域の開発行為の増加が危惧されるため、今後、日久美遺跡の集落部と水田域の範囲を確定する作業が急務となろう。日久美遺跡は、都市近郊に位置する大規模遺跡であるため、なるべく早い段階で遺跡の範囲を確定して、適切な保存処置が講じられることが望ましいと考える。

参考文献

- 小原貴樹ほか 1986年『日久美遺跡』 米子市教育委員会
佐伯純也 2003年『日久美遺跡Ⅷ』 (財)米子市教育文化事業団
佐伯純也 2007年『日久美遺跡Ⅸ』 (財)米子市教育文化事業団
杉谷愛象ほか 1984年『陰田』 米子市教育委員会
柳浦俊一 2001年「山陰地方における縄文前期土器の地域編年」『島根考古学会第18集』

表1 目久美遺跡13次調査出土土器・土製品観察表（残存・復元値は（ ）で表示）

挿図 番号	遺物 番号	遺構・層位	種別・器種	法量 (cm)			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
第10図	Po.1	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(25.6)		(5.4)	黒茶 色	風化	刺突紋	
第10図	Po.2	地山直上	縄紋土器・ 浅鉢	(17.8)		(3.0)	灰褐 色	ナデ	刺突紋	
第10図	Po.3	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	13.0		14.1	褐色	条痕	ナデ、刺突	
第10図	Po.4	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(26.2)		(11.1)	灰褐 色	条痕	ナデ、刺突	
第10図	Po.5	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(36.0)		(16.5)	灰褐 色	条痕、縄 紋	条痕、刺突	
第10図	Po.6	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 浅鉢	(19.0)		(4.0)	淡茶 褐色	条痕	刺突紋	
第10図	Po.7	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢			(8.2)	黒灰 色	ナデ	刺突紋	
第10図	Po.8	排水溝	縄紋土器・ 深鉢			(6.0)	黒褐 色	条痕	刺突紋	
第10図	Po.9	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢			(4.1)	明灰 茶色	ナデ	ナデ、刺突 紋	
第10図	Po.10	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(26.0)		(16.0)	黒褐 色	ナデ	刺突紋	
第10図	Po.11	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(28.8)		(13.2)	黒褐 色	ナデ	刺突紋	
第10図	Po.12	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢			(18.9)	褐色	条痕	条痕、刺突 紋	
第11図	Po.13	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(37.1)		(29.2)	茶灰 色	条痕	条痕、刺突	
第11図	Po.14	排水溝	縄紋土器・ 深鉢	(36.6)		(28.3)	茶褐 色	条痕	条痕、刺突	
第11図	Po.15	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(21.1)		(18.5)	黒褐 色	条痕	条痕	
第11図	Po.16	排水溝	縄紋土器・ 深鉢			(5.5)	黒褐 色	条痕	条痕	
第11図	Po.17	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(21.2)		(14.5)	茶褐 色	条痕	条痕	
第11図	Po.18	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(20.4)		(12.6)	黒褐 色	条痕	条痕	
第11図	Po.19	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(25.8)		(10.2)	灰褐 色	条痕	条痕	
第12図	Po.20	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(34.4)		(29.8)	灰茶 色	条痕	条痕	
第12図	Po.21	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(37.0)		(9.1)	灰茶 色	条痕	条痕	
第12図	Po.22	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(33.4)		(12.0)	茶褐 色	条痕	条痕	
第12図	Po.23	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(28.8)		(19.1)	茶褐 色	条痕	条痕	
第12図	Po.24	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(24.0)		(18.0)	茶褐 色	条痕	条痕	
第12図	Po.25	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	26.6		19.1	黒褐 色	条痕	条痕	
第12図	Po.26	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(24.6)		(12.7)	褐色	ナデ	条痕	炭化物付着
第12図	Po.27	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(26.0)		(18.4)	茶褐 色	条痕	条痕、刺突	
第13図	Po.28	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(31.0)		(12.8)	黒色	条痕	条痕	

表2 目久美遺跡13次調査出土土器・土製品観察表（残存・復元値は（ ）で表示）

挿図 番号	遺物 番号	遺構・層位	種別・器種	法量 (cm)			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
第13図	Po. 29	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(25.4)		16.7	褐色	条痕	条痕	
第13図	Po. 30	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(21.6)		(10.9)	黒褐色	条痕	条痕	
第13図	Po. 31	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(25.2)		(3.6)	黒色	条痕	不明	炭化物付着
第13図	Po. 32	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(22.1)		(7.3)	灰茶色	ナデ	ナデ	
第13図	Po. 33	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢		(11.6)	(7.3)	灰褐色	条痕	条痕	
第13図	Po. 34	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢			(5.3)	灰茶色	条痕	条痕	
第13図	Po. 35	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢			(19.0)	灰褐色	条痕	条痕	
第13図	Po. 36	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢			(19.7)	褐色	条痕	条痕	
第13図	Po. 37	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢			(11.6)	灰褐色	ケズリ後 ナデ	ケズリ	
第14図	Po. 38	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢			(20.9)	灰褐色	条痕	条痕	
第14図	Po. 39	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢			(16.8)	褐色	条痕	条痕	
第14図	Po. 40	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢			(16.9)	茶灰色	条痕	条痕	
第14図	Po. 41	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢			(8.7)	褐色	条痕	条痕	
第14図	Po. 42	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢			(4.7)	黒褐色	条痕	条痕	
第14図	Po. 43	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢			(18.0)	茶褐色	条痕	条痕	
第14図	Po. 44	排土中	縄紋土器・ 深鉢			(4.8)	黒灰色	ナデ	ナデ、押引 沈線紋	
第15図	Po. 45	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(41.8)		(26.7)	黒褐色	条痕	条痕	
第16図	Po. 46	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(29.4)		(21.4)	茶灰色	ナデ	条痕、刺突 紋	
第16図	Po. 47	排水溝	縄紋土器・ 深鉢	(29.4)		(22.7)	灰褐色	ケズリ後 ナデ	条痕紋	
第16図	Po. 48	排水溝	縄紋土器・ 深鉢	(33.6)		(9.4)	灰褐色	ナデ	条痕紋	
第16図	Po. 49	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢		8.1	(15.0)	茶灰色	ナデ	条痕	
第16図	Po. 50	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 浅鉢	(21.6)		(4.4)	灰褐色	ナデ	沈線紋、刺 突	
第17図	Po. 51	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(33.5)		(28.1)	茶褐色	条痕	縄紋、刺突	炭化物付着
第17図	Po. 52	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(36.6)		(6.5)	茶灰色	ケズリ	条痕	
第17図	Po. 53	排水溝	縄紋土器・ 深鉢			(4.1)	褐色	ナデ	条痕	
第17図	Po. 54	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢			(4.0)	淡灰色	ナデ	縄紋	
第18図	Po. 55	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(27.6)		(27.0)	灰茶色	条痕	条痕 (縄紋?)	
第18図	Po. 56	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(31.7)		(9.0)	黒褐色	ケズリ後 ナデ	縄紋	
第18図	Po. 57	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・ 深鉢	(34.0)		(5.1)	黒褐色	条痕	条痕	

表3 目久美遺跡13次調査出土土器・土製品観察表（残存・復元値は（ ）で表示）

挿図 番号	遺物 番号	遺構・層位	種別・器種	法量 (cm)			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
第18図	Po. 58	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・深鉢			(23.5)	黒灰色	ナデ	沈線紋、羽状縄紋	
第19図	Po. 59	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・深鉢	(33.4)		(27.4)	茶褐色	ナデ	縄紋、突帯、刺突紋	
第19図	Po. 60	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・深鉢	(35.0)		(17.8)	茶灰色	ナデ	縄紋、突帯、刺突紋	
第19図	Po. 61	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・深鉢			(16.0)	暗黒褐色	ナデ	縄紋、突帯、刺突紋	
第19図	Po. 62	暗黒灰色砂質土	縄紋土器・深鉢			(12.4)	灰褐色	ナデ	条痕	
第19図	Po. 63	排土中	縄紋土器・深鉢			(5.4)	茶灰色	風化	風化、突帯に刺突	
第24図	Po. 64	暗黒灰色粘土	縄紋土器・深鉢	(29.2)		(15.2)	灰茶色	ナデ	沈線、刺突紋	
第24図	Po. 65	暗黒灰色粘土	縄紋土器・浅鉢	(26.6)		(9.9)	茶褐色	ミガキ	ミガキ、縄紋	内面に炭化物付着
第24図	Po. 66	暗黒灰色粘土	縄紋土器・深鉢	(28.4)		(13.2)	暗黒褐色	ケズリ後ナデ	ケズリ	
第24図	Po. 67	暗黒灰色粘土	縄紋土器・深鉢		(7.3)	(20.2)	明灰茶色	風化	風化	
第24図	Po. 68	暗黒灰色粘土	縄紋土器・深鉢		(5.8)	(12.8)	淡褐色	ケズリ後ナデ	ケズリ	
第24図	Po. 69	暗黒灰色粘土	縄紋土器・深鉢	18.0	5.8	13.6	茶灰色	ナデ	風化	
第24図	Po. 70	暗黒灰色粘土	縄紋土器・注口土器			(6.2)	淡灰褐色	絞り痕	ミガキ	
第26図	Po. 71	黒褐色粘土層	縄紋土器・深鉢	(35.9)		(6.0)	暗灰褐色	ナデ	ミガキ	
第29図	Po. 72	黒色粘土層	弥生土器・甕	(30.0)		(6.3)	灰褐色	ナデ	凹線、刺突	
第29図	Po. 73	黒色粘土層	弥生土器・甕	(19.7)		(1.9)	灰褐色	ナデ	ナデ	
第29図	Po. 74	黒色粘土層	弥生土器・甕	(10.7)		(1.7)	褐色	ナデ	凹線	外面に煤付着
第29図	Po. 75	黒色粘土層	弥生土器・壺	(16.4)		(3.5)	灰褐色	ナデ	ナデ、凹線	
第29図	Po. 76	黒色粘土層	弥生土器・底部		(6.3)	(4.8)	灰褐色	ナデ	タテミガキ	
第29図	Po. 77	黒色粘土層	弥生土器・高坏	(23.3)		(3.1)	灰褐色	ナデ	ナデ	
第34図	Po. 78	水田下層	弥生土器・壺	(19.8)		(6.1)	明灰褐色	ナデ	ナデ、凹線	
第34図	Po. 79	水田下層	弥生土器・壺	(13.8)		(4.6)	灰茶色	ナデ	ナデ、凹線	
第34図	Po. 80	水田下層	弥生土器・壺	(13.3)		(4.4)	灰茶色	風化	凹線	
第34図	Po. 81	水田下層	弥生土器・甕	(21.2)		(5.5)	灰茶色	ナデ	ナデ、凹線、刺突	
第34図	Po. 82	水田下層	弥生土器・甕	(18.3)		(3.7)	淡橙灰色	ナデ	タテハケ、ナデ	
第34図	Po. 83	水田下層	弥生土器・甕	(15.9)		(3.7)	灰茶色	風化	刺突、指頭圧痕貼付突帯	
第34図	Po. 84	水田下層	弥生土器・底部		(6.5)	(6.1)	淡褐色	ケズリ	ミガキ	

表4 日久美遺跡13次調査出土土器・土製品観察表（残存・復元値は（ ）で表示）

挿図 番号	遺物 番号	遺構・層位	種別・器種	法量 (cm)			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
第34図	Po. 85	水田下層	弥生土器・ 底部		(5.5)	(4.5)	淡褐色	ケズリ	タテミガキ	
第34図	Po. 86	1～2区水田断 割り	弥生土器・ 底部		5.1	(4.6)	暗褐色	炭化物付 着	タテミガキ	焼成後穿孔
第34図	Po. 87	水田下層	弥生土器・ 底部		(7.0)	(4.0)	灰茶 色	ナデ	風化	
第34図	Po. 88	水田下層	弥生土器・ 底部		(6.7)	(4.6)	暗褐色	ケズリ後 ナデ	タテミガキ	
第34図	Po. 89	水田下層	弥生土器・ 高坏	(21.6)		(3.7)	淡褐色	ナデ	ナデ、刺突	焼成前穿孔
第34図	Po. 90	水田下層	弥生土器・ 高坏	(7.1)		1.5	灰茶 色	ミガキ	ナデ	充填用の円 盤
第34図	Po. 91	水田下層	弥生土器・ 高坏		(12.1)	(3.7)	灰茶 色	ナデ	刺突、ナデ	透かし
第34図	Po. 92	水田下層	弥生土器・ 高坏		(12.4)	(4.0)	灰褐色	ケズリ	ナデ、凹線	
第34図	Po. 93	水田下層	弥生土器・ 高坏		(11.6)	(5.7)	灰茶 色	ナデ	ナデ、凹線	三角形の透 かし
第34図	Po. 94	水田下層	弥生土器・ 高坏		(13.3)	(4.6)	明灰 褐色	ナデ	ナデ	透かしを模 した刺突
第34図	Po. 95	水田直上	土錘	3.9	4.0	3.9	灰褐色		ナデ	黒斑有り
第35図	Po. 96	水路1埋土中	弥生土器・ 壺	(18.4)		(4.2)	明灰 褐色	ナデ	タテハケ、 凹線	
第35図	Po. 97	水路1埋土中	弥生土器・ 壺	(27.6)		(17.6)	灰茶 色	ヨコハケ 後ナデ	タテハケ、 凹線	
第35図	Po. 98	水路1埋土中	弥生土器・ 高坏	(24.1)		(3.4)	暗灰 褐色	ナデ	刺突、凹線	
第35図	Po. 99	水路1埋土中	弥生土器・ 底部		5.4	(2.7)	灰茶 色	ナデ	ナデ	
第36図	Po. 100	洪水層(第4層)	弥生土器・ 壺	(21.5)		(1.5)	淡茶 灰色	風化	刺突、凹線	
第36図	Po. 101	洪水層(第4層)	弥生土器・ 甕	(20.3)		(.3.4)	淡茶 灰色	風化	刺突、指頭圧 痕貼付突帯	
第36図	Po. 102	洪水層(第4層)	弥生土器・ 甕	(16.1)		(4.3)	灰褐色	風化	貼付突帯、 刺突	
第36図	Po. 103	洪水層(第4層)	弥生土器・ 甕	(21.4)		(5.7)	淡黄 茶色	風化	風化	
第36図	Po. 104	洪水層(第4層)	弥生土器・ 甕	(19.2)		(4.5)	淡黄 茶色	風化	凹線、風化	
第37図	Po. 105	第2層	弥生土器・ 甕	(15.3)		(4.0)	灰褐色	ナデ	ヨコハケ後タ テハケ、凹線	
第37図	Po. 106	第3層	須恵器・坏 身		(6.0)	(2.8)	暗灰 色	ナデ	ナデ	
第37図	Po. 107	第3層	中国産青磁・ 碗		(5.9)	(2.0)	淡緑 灰色		貫入あり。	漆継
第37図	Po. 108	第2層	中国産青磁・ 碗	(15.4)		(3.3)	暗緑 色		畳付のみ釉を 掻き取る。	
第37図	Po. 109	第1層	在地産陶器・ 鉢	(17.4)		(3.8)	茶褐 色釉		口縁はやや 肥厚する。	
第37図	Po. 110	第1層	肥前系磁器・ 染付皿	(12.0)		(2.5)	乳白 色釉	文様有り		
第37図	Po. 111	排水溝	弥生土器・ 底部		(6.5)	(4.2)	灰褐色	ケズリ	ナデ	
第37図	Po. 112	排水溝	弥生土器・ 底部		4.8	(3.6)	灰茶 色	ナデ	ナデ	黒斑有り

表5 目久美遺跡13次調査出土石器観察表（残存値は（ ）で表示）

挿図番号	遺物番号	遺構・層位	種別	法量 (cm)			重量 (g)	石材
				最大長	最大幅	最大厚		
第20図	S.1	地山直上	スクレイパー	2.7	4.1	1.2	13.2	黒曜石
第20図	S.2	暗黒灰色砂質土	二次加工の剥片	3.4	4.3	1.1	15.4	黒曜石
第20図	S.3	暗黒灰色砂質土	石匙	5.2	8.1	1.0	39.8	玄武岩
第20図	S.4	暗黒灰色砂質土	砥石	8.5	7.3	1.2	113.0	玄武岩
第21図	S.5	暗黒灰色砂質土	打欠石錘	6.5	6.6	2.2	114.7	石英安山岩
第21図	S.6	暗黒灰色砂質土	打欠石錘	6.8	6.3	2.1	134.7	安山岩
第21図	S.7	暗黒灰色砂質土	打欠石錘	7.7	7.0	2.6	193.7	石英安山岩
第21図	S.8	暗黒灰色砂質土	打欠石錘	8.9	6.1	2.4	167.9	安山岩
第21図	S.9	暗黒灰色砂質土	打欠石錘	7.5	6.8	2.7	198.9	安山岩
第21図	S.10	暗黒灰色砂質土	打欠石錘	9.2	7.2	2.8	275.4	安山岩
第21図	S.11	暗黒灰色砂質土	打欠石錘	8.9	6.1	2.4	167.9	石英安山岩
第21図	S.12	暗黒灰色砂質土	打欠石錘	9.3	7.6	2.1	238.0	安山岩
第21図	S.13	暗黒灰色砂質土	打欠石錘	9.5	6.7	2.3	232.7	石英安山岩
第21図	S.14	暗黒灰色砂質土	打欠石錘	8.8	7.7	1.8	151.6	石英安山岩
第22図	S.15	暗黒灰色砂質土	打欠石錘	9.8	9.0	2.3	311.1	安山岩
第22図	S.16	暗黒灰色砂質土	打欠石錘	9.5	8.6	2.7	277.9	安山岩
第22図	S.17	暗黒灰色砂質土	打欠石錘	10.0	8.3	2.1	269.5	石英安山岩
第22図	S.18	暗黒灰色砂質土	打欠石錘	10.8	9.5	3.2	432.0	不明
第22図	S.19	暗黒灰色砂質土	打欠石錘	11.2	10.0	2.7	427.0	石英安山岩
第22図	S.20	暗黒灰色砂質土	打欠石錘	7.8	9.5	2.2	255.1	安山岩
第26図	S.21	暗黒灰色粘土	打欠石錘	10.3	10.3	3.4	449.4	安山岩
第26図	S.22	暗黒灰色粘土	打欠石錘	11.4	9.9	2.7	416.4	石英安山岩
第26図	S.23	暗黒灰色粘土	すり石	10.6	10.1	4.8	751.6	花崗閃緑岩
第29図	S.24	黒色粘土層(第7層)	石包丁(打製)	5.6	7.6	1.0	47.0	不明
第29図	S.25	黒色粘土層(第7層)	石斧(磨製)	7.2	6.5	2.8	149.6	不明
第29図	S.26	黒色粘土層(第7層)	石包丁(磨製)	5.8	9.5	0.6	61.0	玄武岩

表6 目久美遺跡13次調査出土石器観察表（残存値は（ ）で表示）

挿図番号	遺物番号	遺構・層位	種別	法量 (cm)			重量 (g)	石材
				最大長	最大幅	最大厚		
第29図	S. 27	黒色粘土層(第7層)	石鏃	2.0	1.4	0.4	0.7	黒曜石
第34図	S. 28	水田直上	加工品	8.0	7.1	1.1	66.5	凝灰岩?
第34図	S. 29	水田直上	棒状石器	5.4	2.1	2.2	35.1	石英安山岩
第34図	S. 30	水田下層	石鏃	2.5	1.3	0.3	0.8	黒曜石
第34図	S. 31	1～2区水田断割り	石鏃	2.0	1.3	0.3	0.5	黒曜石
第35図	S. 32	水路1埋土	打欠石錘	6.0	5.1	1.7	67.7	石英安山岩
第36図	S. 33	洪水層(第4層)	石鏃	2.0	1.6	0.6	1.5	黒曜石
第36図	S. 34	洪水層(第4層)	石鏃	2.5	1.7	0.4	1.4	不明
第37図	S. 35	排水溝	打欠石錘	8.6	7.3	1.1	76.4	石英安山岩
第37図	S. 36	排土中	打欠石錘	10.4	10.2	2.5	354.5	安山岩
第37図	S. 37	排水溝	石鏃	1.6	0.8	0.4	0.3	黒曜石

表7 目久美遺跡13次調査出土金属製品観察表（残存値は（ ）で表示）

挿図番号	遺物番号	遺構・層位	種別	法量 (cm)			備考
				最大長	最大幅	最大厚	
第37図	B. 1	第1層	銅銭	2.3	2.3	0.1	「寛永通宝」

写真図版



1. 1・2区水田面（南西より）



2. 水路1完掘（西より）

写真図版 2



1. 調査風景（北東より）



2. 水路1 検出（北より）



3. 水田面完掘（南西より）



1. 水路1完掘 (西より)



2. 水路1完掘 (東より)



3. 水路1完掘 (北より)

写真図版 4



1. 水路1断面C (西より)



2. 水路1断面A (東より)



3. 水路1断面B (北東より)



1. 3区水田検出（北より）



2. 1区黒色粘土層上面足跡検出（北より）



3. 1区黒色粘土層上面足跡完掘（東より）

写真図版 6



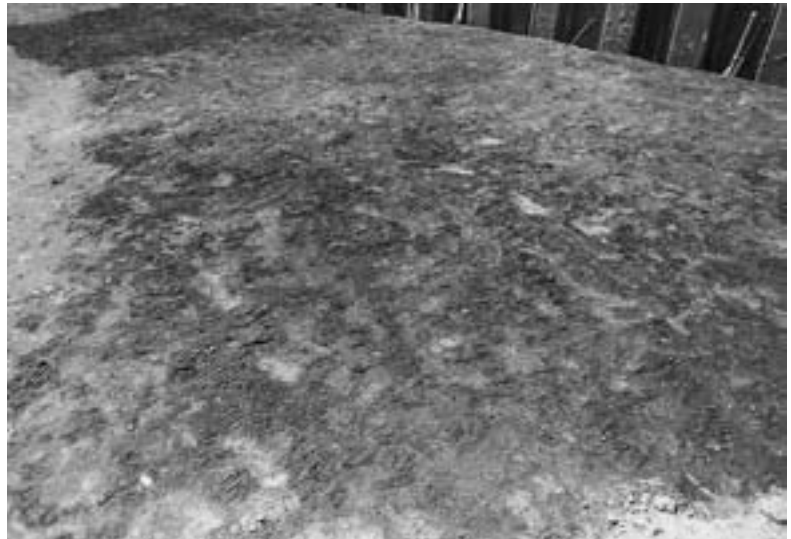
1. 2区黒色粘土層上面足跡検出（北より）



2. 1区黒色粘土層上面足跡検出（北より）



3. 1区黒色粘土層上面足跡検出（東より）



1. 1区黒色粘土層上面足跡検出（南東より）



2. 1グリッドの調査風景（北より）



3. 1グリッドの上層断面（北より）

写真図版 8



1. 1 グリッドの下層断面（東より）



2. Po. 68出土状況（南より）



3. Po. 69出土状況（南より）



1. Po. 3出土状況（北より）

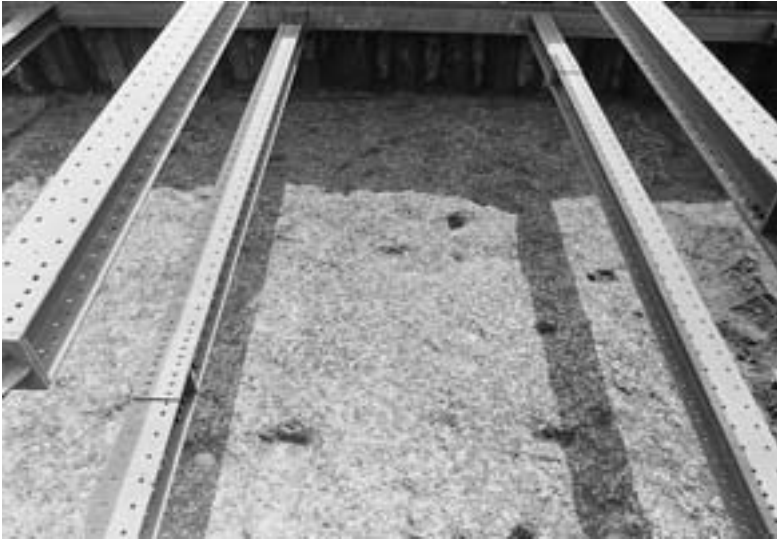


2. Po. 61出土状況（北より）



3. Po. 42出土状況（北より）

写真図版10



1. 2区縄紋時代層完掘（北より）



2. 3区縄紋時代層完掘（北より）



3. 3区縄紋時代層完掘（北より）



1. 縄紋時代層完掘（西より）



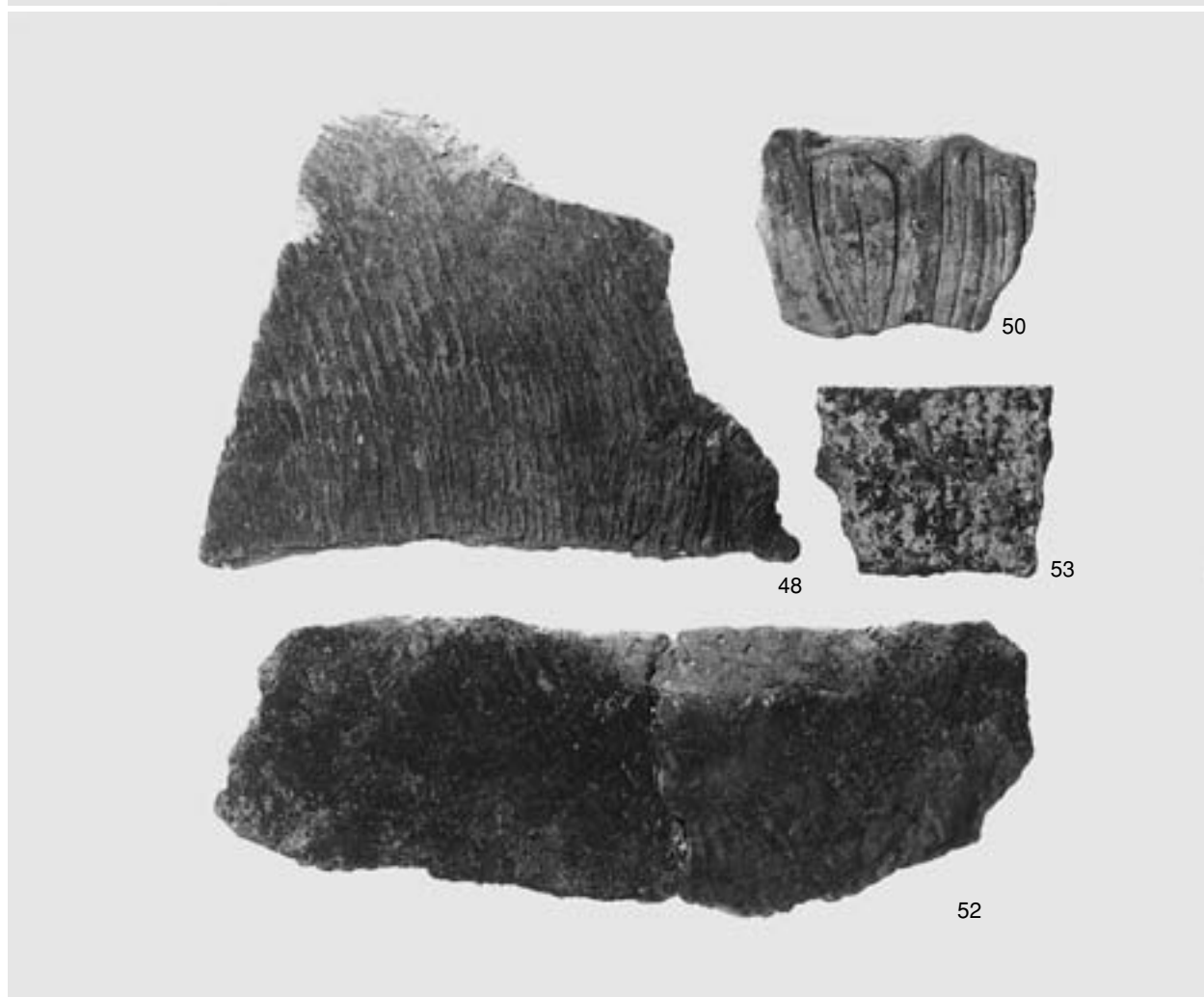
2. 排土の搬出状況（東より）



3. 縄紋時代層の調査風景（北より）



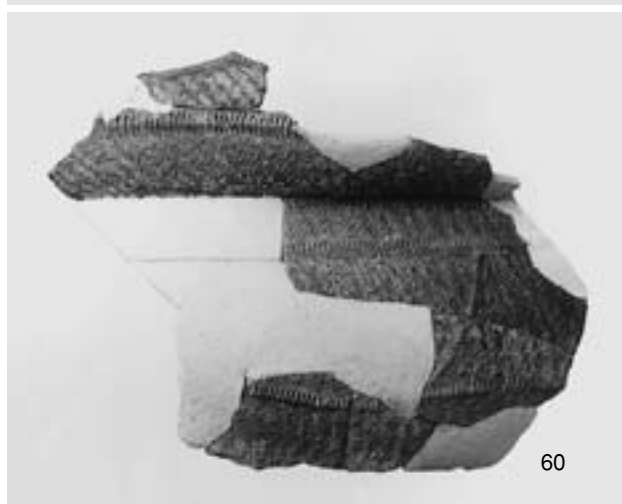
縄紋時代層出土遺物



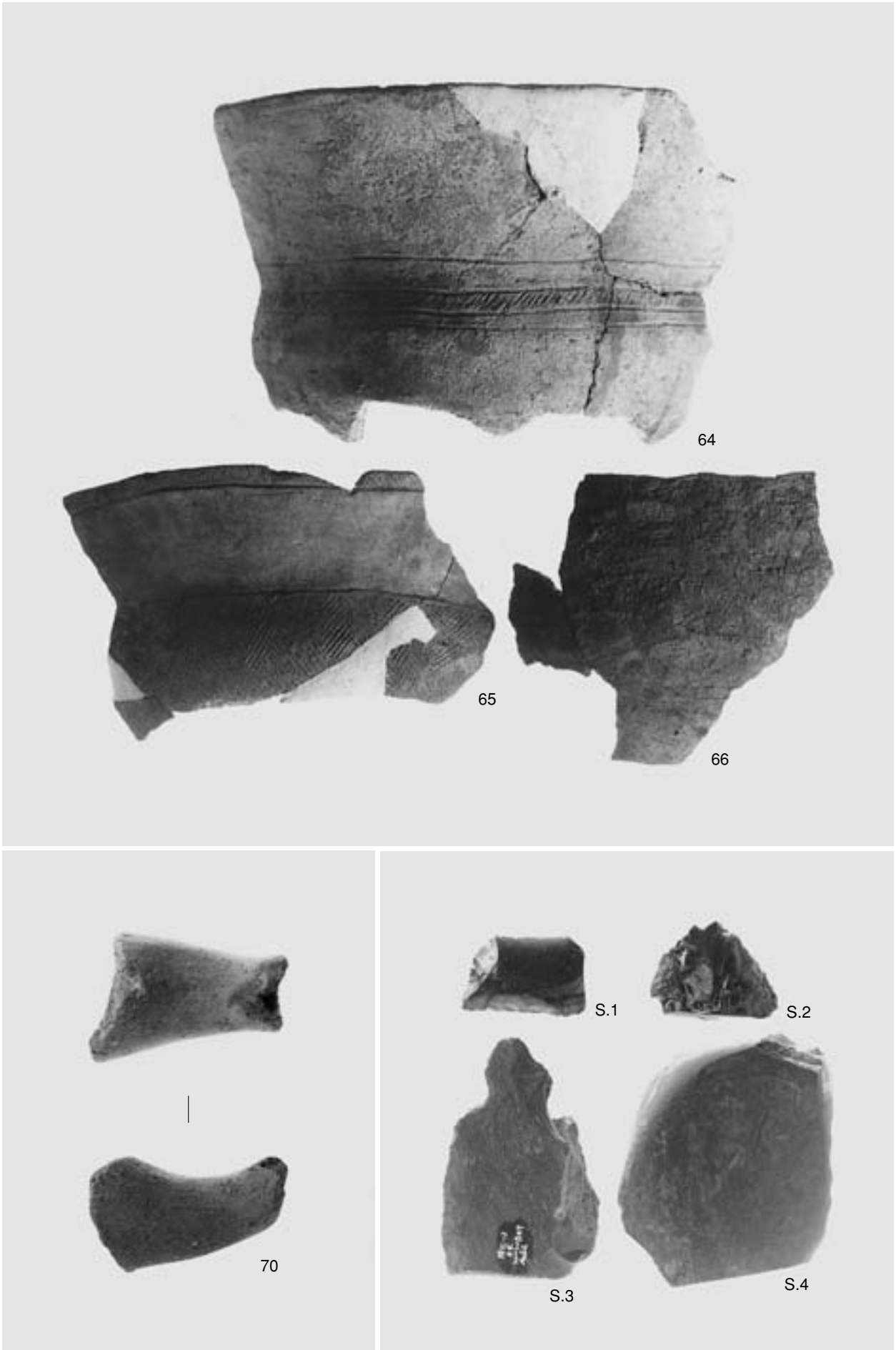
縄紋時代層出土遺物



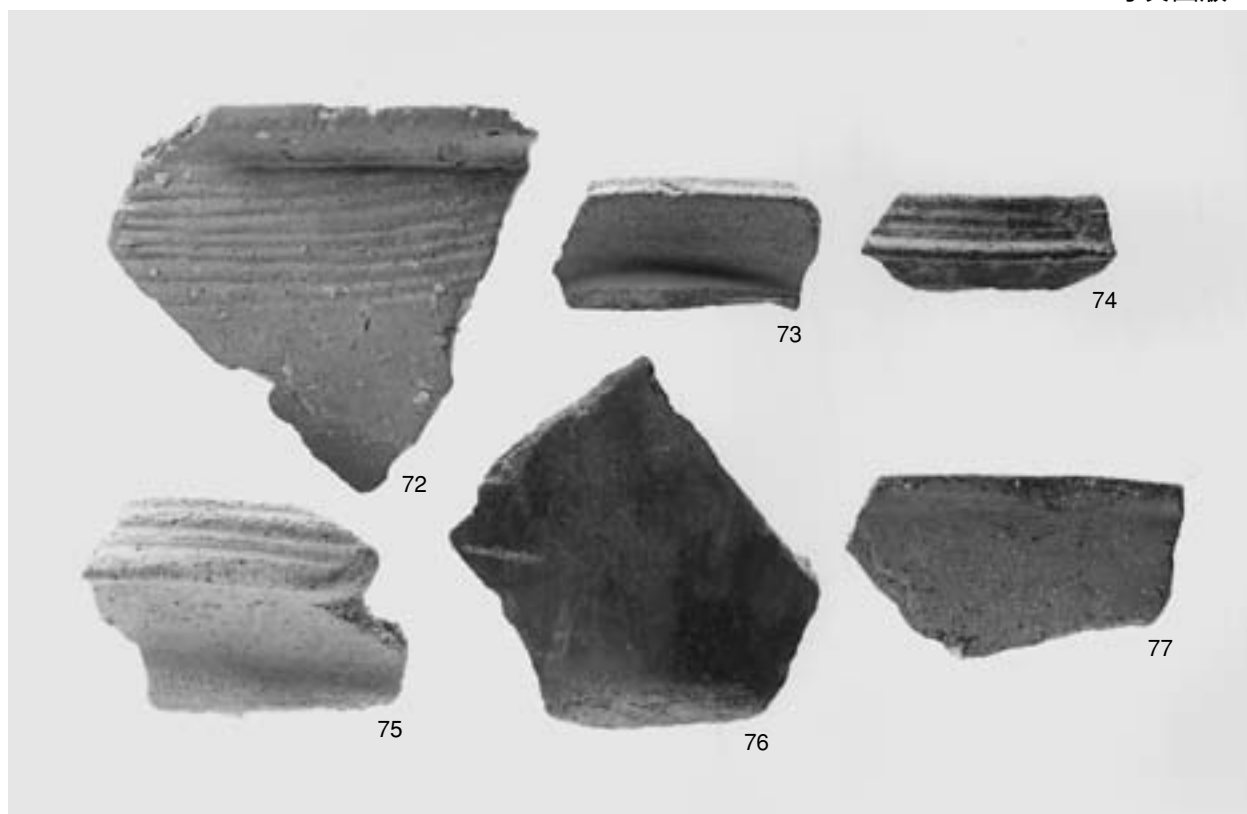
縄紋時代層出土遺物



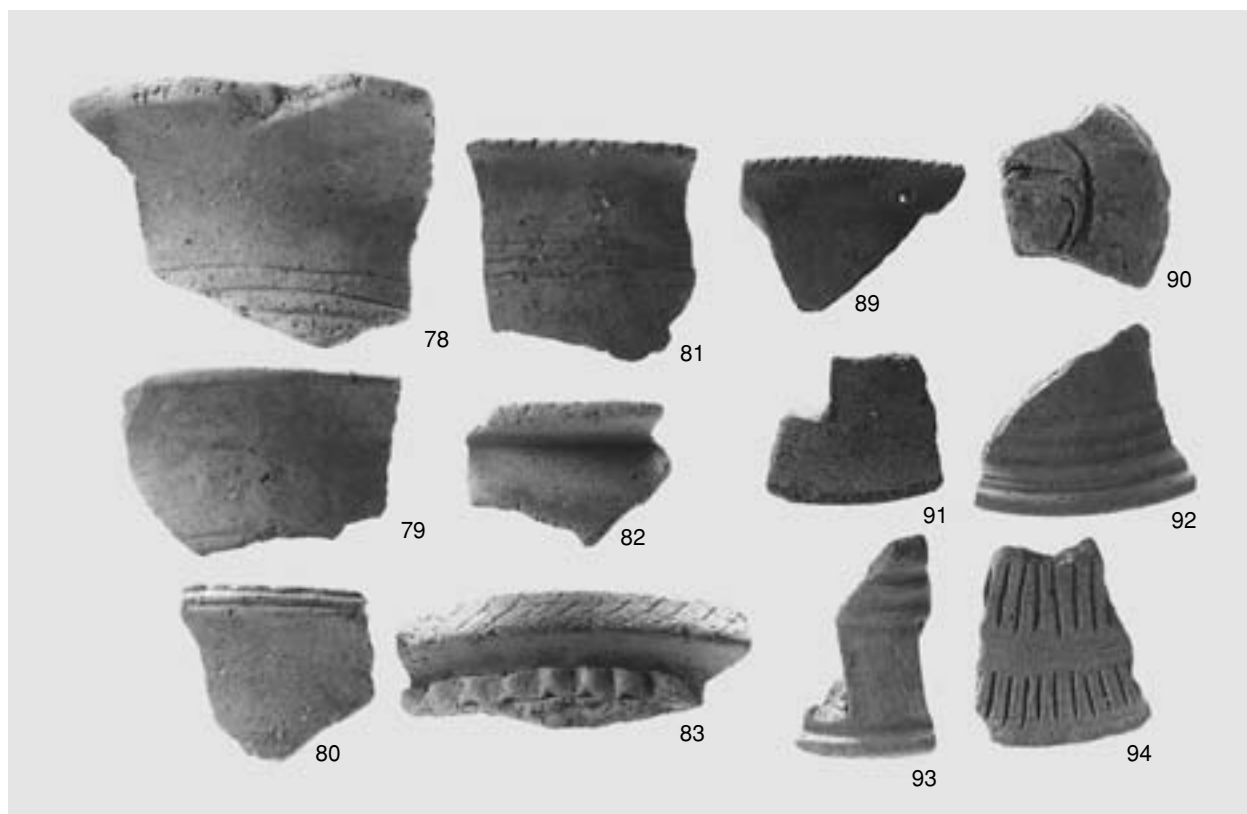
縄紋時代層出土遺物



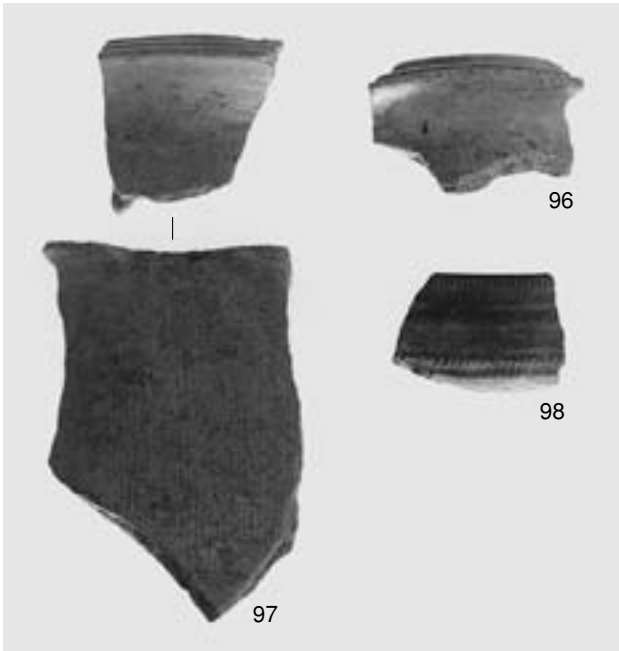
縄紋時代層出土遺物



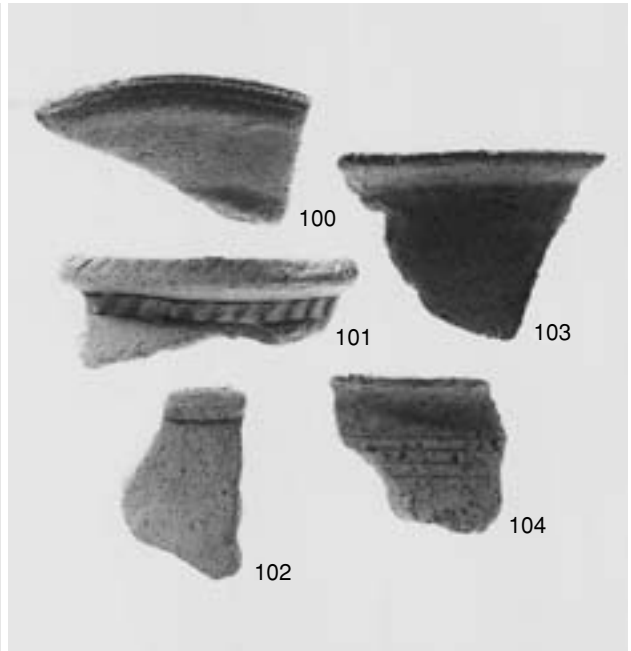
黒色粘土層出土遺物



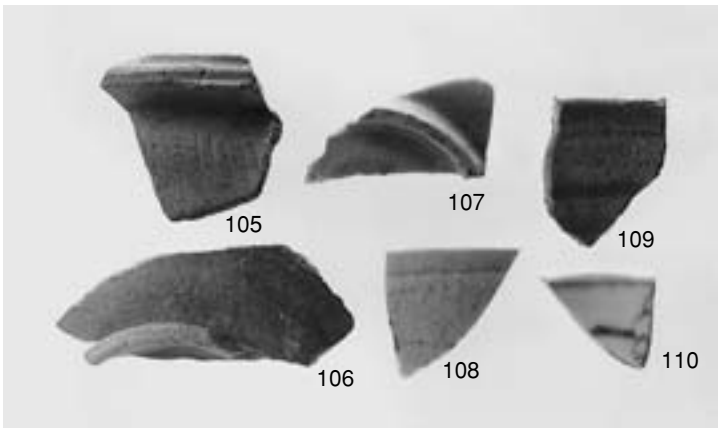
水田出土遺物



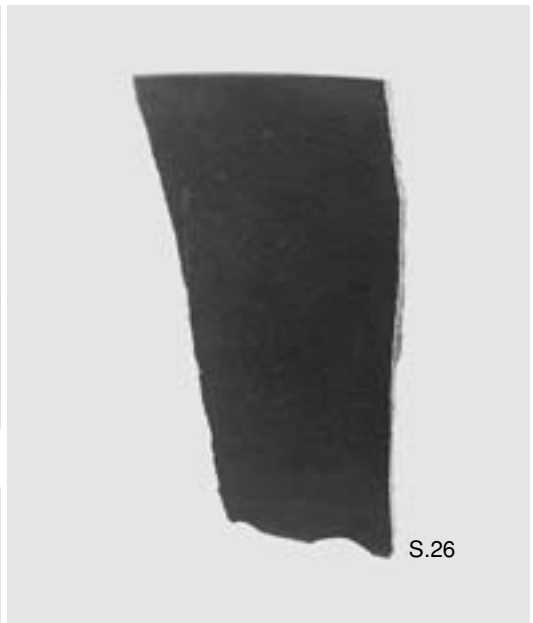
水路1出土遺物



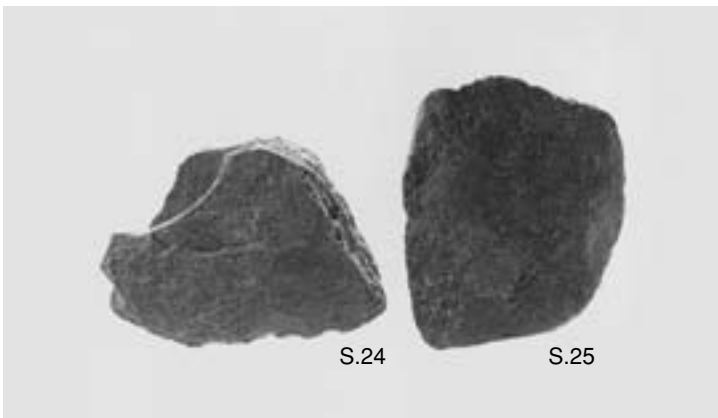
洪水層出土遺物



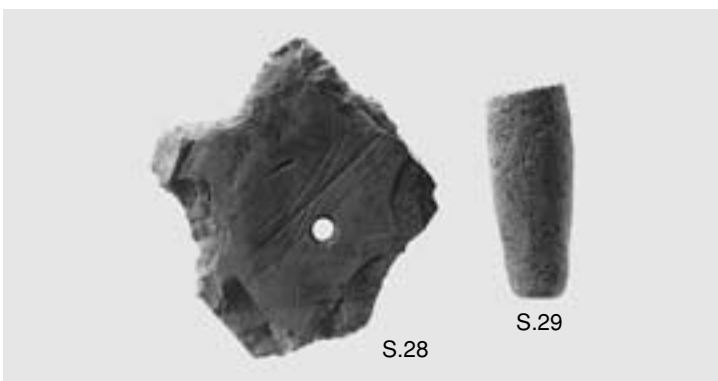
遺構外出土遺物



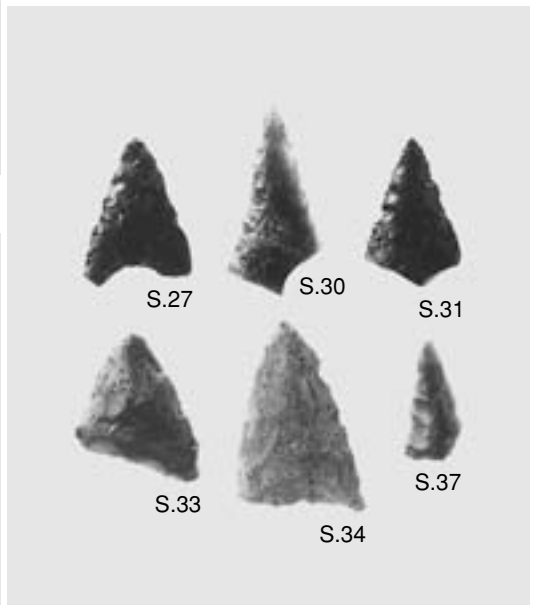
黒色粘土層出土遺物



黒色粘土層出土遺物



水田出土遺物



石鏃

目久美遺跡第13次調査の種実 I



1 カヤ種子 (破片)
— 5.0mm



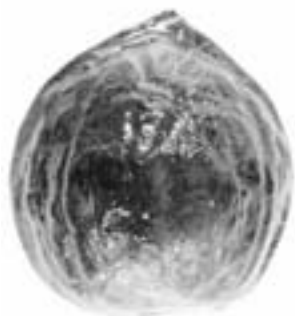
2 マツ属複維管束亜属毬果
— 5.0mm



3 ヤマモモ核



4 ヤマモモ核
— 1.0mm



5 オニグルミ核
— 5.0mm



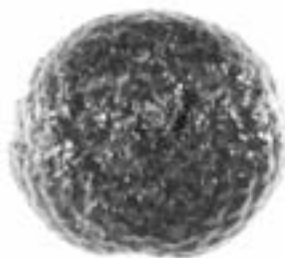
6 ハンノキ属果実



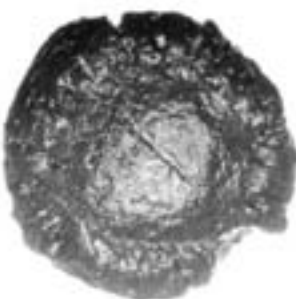
7 ハンノキ属果実
— 1.0mm



8 コナラ属堅果 (破片)
— 0.1mm



9 コナラ属殻斗
— 5.0mm



10 コナラ属ヘソ
— 1.0mm



11 コナラ属幼果
— 1.0mm



12 コウゾ種子
— 0.5mm



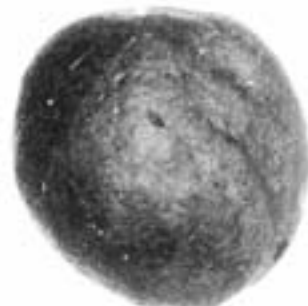
13 ホオノキ種子
— 1.0mm



14 コブシ種子
— 1.0mm



15 サクラ属サクラ節核



16 サクラ属サクラ節核
— 1.0mm

写真図版20

目久美遺跡第13次調査の種実 II



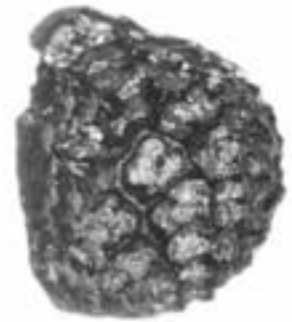
17 キハダ種子
1.0mm



18 イヌザンショウ種子
1.0mm



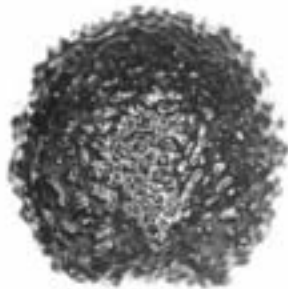
19 カラスザンショウ種子



20 カラスザンショウ種子
1.0mm



21 センダン核
5.0mm



22 アカメガシワ種子



23 アカメガシワ種子
1.0mm



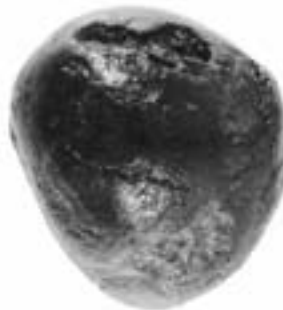
24 トチノキ種子 (破片)
5.0mm



25 モチノキ種子



26 モチノキ種子
1.0mm



27 ムクロジ種子 (破片)
5.0mm



28 ブドウ属種子
1.0mm



29 ヤブツバキ種子
5.0mm



30 ヒサカキ種子
0.5mm

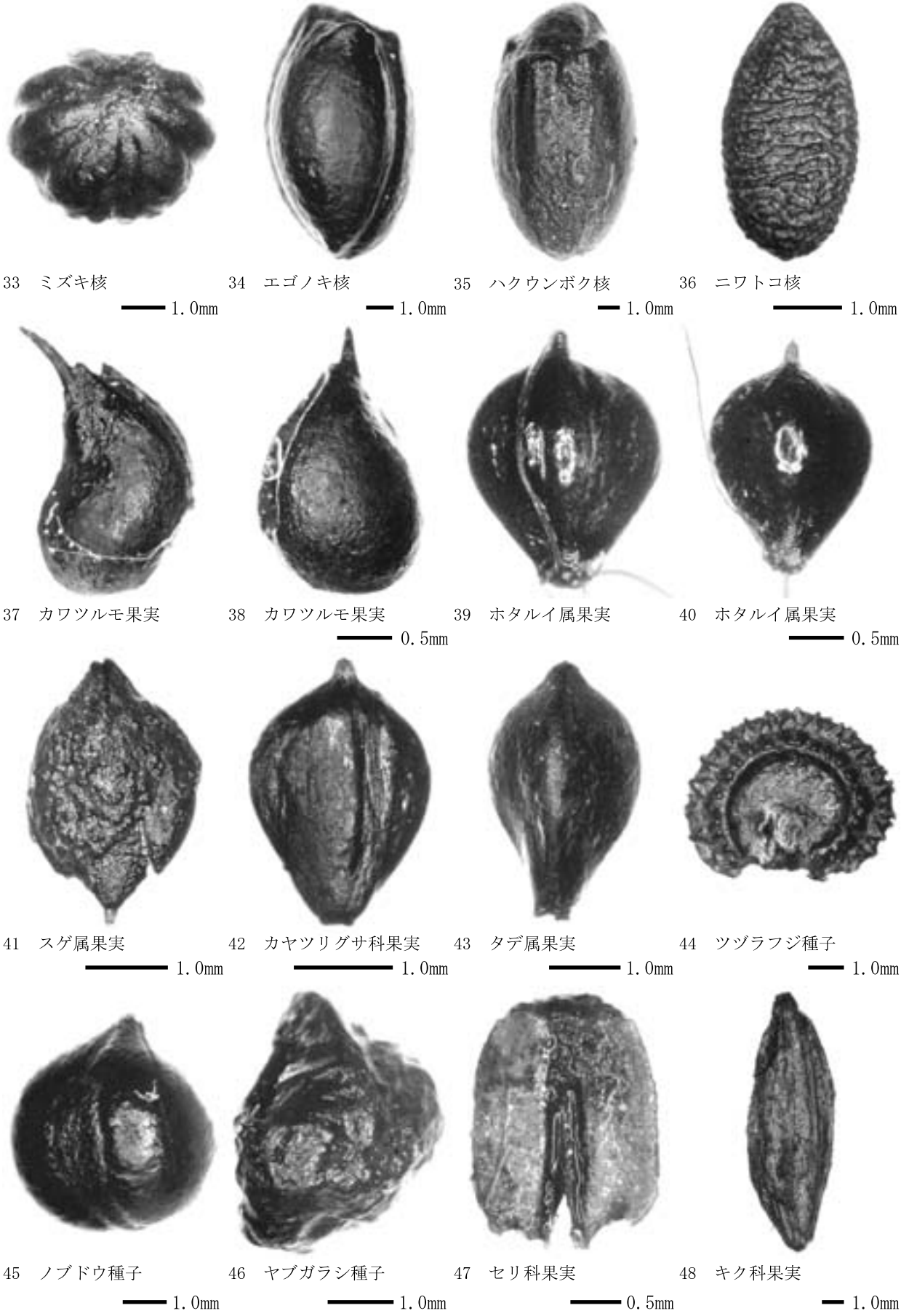


31 クマノミズキ核



32 クマノミズキ核
1.0mm

目久美遺跡第13次調査の種実 III



報告書抄録

ふりがな	めぐみいせき XIII							
書名	目久美遺跡 XIII							
副書名								
巻次								
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	58							
編著者名	佐伯純也							
編集機関	財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地 TEL・FAX 0859-26-0455 メールアドレス yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
目久美遺跡	米子市目久美町		2-13	35° 24′ 58″	133° 20′ 29″	平成18年 6月26日 ～ 平成18年 9月29日	240㎡	道路建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
目久美遺跡 第13次調査	生産遺跡 散布地	縄紋時代 弥生時代 古墳時代 中世 近世	水田、畦畔、水路、足跡		縄紋土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、獣骨			
要 約								
<p>目久美遺跡は、米子市目久美町に所在する縄紋時代前期から近世の生産・集落遺跡である。今回実施した第13次調査では、縄紋時代の堆積層から縄紋時代前期～晩期の土器、石器、獣骨類が多数出土した。また、弥生時代中期後半の水田跡を検出し、大畦畔、水路跡などの水田に付属する遺構を検出した。</p>								

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書58

目久美遺跡 XIII

2010年3月

編集・発行 財団法人 米子市教育文化事業団

〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地

TEL 0859-26-0455

印刷 勝美印刷株式会社